

人のまた怪しむを要せざる所ならむ、さて前にかへり、以上のべたる印歐原人の共有せし時形の外、その種々の國語に分布せし後、それらの國民によりして發達せしめられし多くの時形あり、本論に示せる希臘語及羅甸語の動詞變化表を見よ、まづ希臘人は、「k」を以て現在過去の標識とし、之に「ch」エブリカキオン」を加へ、「h」エブリロイ、カ」(われ協義を與へた)の如き形を作り——be-bouleu-  
 而して、古き形即ち單に「レチエブリカチオン」をなしたる上に人稱語尾を加へたるもの、例へば「エブリロイ、マイ」の如きを以て「受働又は再歸の法を示せり、——Passive, medium——本論の表には加働式をのみ示して、受働式は示さざりし故に、左に例證すべし、

than others.  
 The Latin may be severally arranged:  
 Alii colores Forum sunt multo pulchriores aliis.  
 Colores alli Forum multo pulchriores allis sunt.  
 Multo pulchriores Forum colores alli allis sunt.  
 and so on.  
 第九節 語尾發達の歴史  
 この語尾の變化する部分を除きて不動に止る部分は則其語の本体にして之を幹と云ふ、その「インド」語の起源に溯りて其歴史を求むれば、かゝる無限の變化ある語尾はその始め獨立のことばなりしがこれが他の語の終尾に結合して其文法上の形を示すに用ひられてより漸次其獨立を失ひ、全く語法上の小形分子となれるものなりと見るべし。

Medium. (Indicativ.)  
 "Bouleúo" (to council)  
 1st Person Singular  
 Present Bouleú-omai  
 Imperfect "I council myself," or  
 Perfect "I am advised."  
 Pluperfect é-Bouleu-omén  
 Aorist be-bouleu-mai  
 Future e-be-bouleu-men  
 Infinitive pres. é-bouleu-amen  
 Bouleu-s-omai  
 Bouleú-e-stai

かの如く、被働又は再歸には、「k」なる標識なく(現在過去)にして、却て古き形を存せり、大過去(英に「プリエブリノエト」)、「獨に」プリエブリノエト「ハム」ニ「ト」佛に「ブルス」ニ「バル」ニ「エ」ニ「ト」過去に於て働の既に結了したるを(「Pluperfect, Plusquamperfect, Plusqueparfait」

りといふ、この貴重なる歴史は最新言語學の典祖と稱せられ吾人が尊敬すべき先覺なる獨逸の言語學者「フランツ、ボップ」——Franz Bopp——の開發せしところにして爾來多くの學者研究を致つて、今日にては最明瞭なる事實となれり、さてかく獨立せる二個若しくは以上の單語を結合して復合語(「コムバウンド、ウオールド」——compound words——)を形成し、其中の一が漸次獨立を失ひ單に他の一語が形態的分子(「フォーメーター、エメント」——Formative element——)となるに至るといふは元來「インドゲルマン」語が其語を構成せし一の重要な原動力なりき、その原動力は唯に文法上の形を構成するに止らずして、語の種々の部分に活けり、「フォーメーター、エメント」とは或一語を構成する一部にして其語の本義に關係無く、唯此語を以て文章の上にて或は名詞たりしめ或は副詞たりしめ或は形容詞たりしむる第二次的の意味を與ふる部分なり、例へば英吉利國語にありては、「ヂス」——dis——といふ前綴を加へて否定の意を示し、「ヂスベリフ」(不信用)「ヂスコンフィヤ」(不愉快)の如くいひ、又は動詞に「エーブル」なる語尾を加へて形容詞とし、形容詞に「チー」なる語尾を加へて名詞となすが如き、この「ヂス」「エーブル」「チー」などは皆「フォーメーター、エメント」なり「Eat-able,

に於るも亦同じ、その他希臘語に於る二個の受働の「エオリスト」、二個の未來第三の受働未來の如き皆その人民特別の發達なり、羅甸語も亦た種々の方法にて他の時形を發達せり、今その大要をのぶれば、現在過去を形するに「シイ」「ウイ」を用ひ、大過去に「エラム」を用ひ、過去に「バム」を用ひ、未來に「bo」を用ひしが如し—Perf-si, -vi; Plup. -eram; imperf. -bam; future. -bo—これらの巨細の説明は各其國語研究の範圍に屬する故に今之を論ぜず。

第二次的即印歐原人共通のものをはなれたる後の發達なる時形の最注意すべきは「チウトニツク」民族が、所謂「レヂエヌプリカチオン」を行はざる動詞の現在過去を形するに用ひたる方法なり、かくの如き動詞は「チウトニツク」語にありては、自己の意味を修飾せんがために、その語自身の上の形態を變化せずして、他の外關の助けに依れり、これを弱變化の動詞と

Curiosity の如し、獨逸語にありては、「エル」を動詞の語尾に加て名詞となすと、之は英語と同じ、形容詞の語尾に「ハイト」を加へ「カイト」を加へて名詞となし、名詞の語尾に「リツヒ」「イツヒ」を加へ「動詞」に「サム」を加へて形容詞を作るが如きあり、例は一々示すにも及ばざるべきか、Krank-heit, Schönheit, Tapfer-keit, Billig-keit などはかくして成れる名詞、König-lich, Schuld-ig, Wirk-sam. の如きは形容詞の例なり、かくる語の分子茲に譯して形態的分子といふなり、文法上の語尾等も亦此名稱の中に含有せしむ即英語動詞 d を加へて過去を形り名詞 s を加へて復數となす、d s 皆形態的分子なり、かくの如き結合的言語の構成は「インダ」語族の靈妙なる作用にして今に至て益々活動す、英吉利言葉の形態的分子につきては前篇にその「アングロサクソン」及羅甸語より來れる歴史を論じたる折にほのめかしたる事あり、今進で英國語中その形態的分子の重要な者數個をとりて其歴史を申來とを講明し、以て言語外形上變化の篇を終らんとす、これ最快心の説明ならむ。

第十節 結合語

二個以上の語が結合して、語を形する場合には其段段あり、單に相結合して未だ十分に漆着せざる者、或は全く漆着すれ共未だ各原語の

形を存して判然區別すべき者、或は其結合の度最甚くなりて相融和し多少研鑽を興へざれば甚だ區別を爲し能はざる者、是なり、今日本語と英語とを例にすれば

第一種

山河(山の河の *Schiff und Berg*)  
dish-plate, mother-tongue, well-being

第二種

火鉢(火のはたき *Feuerkessel* 事決して無し)  
godlike, herself

第三種

たなごころ — 手の心  
Forehead — fore part of the head  
Fortnight — fourteen nights  
Breakfast — Broke + fast

此の如く第三種に屬する者は多少語源的の研究をへざれば其成立を了解しえざる者なり、「たなごころ」の例にて古言の「た」は今音の「て」にあたり、「な」は「の」の轉化し其母音が「た」昔の母音「ア」に引よせられて「な」ごなるものなる事をしりて後に始めて其「手の心」從て「手の裏」の義なるを知るべし、結合語に説明を興ふる必要なる者は皆第三種に屬するものなり、英語にて朝食の意義なる「ブレイクファスト」の語をぞれ、この語は「ブリーク」と「ファスト」の二語

「*S*」(「*ウ*」) — Weak verbs — )  
と「*S*」の之に對して「*レ*」チエヌプリカチオン」又は母音變化に依るものを強動詞 (「*ス*」) — Strong verbs — )  
とす、これらの弱動詞には現在過去を形するため、誘辭に、「*なす*」の意の動詞の現在過去を加ふ、即「*ユス*」語にては「*デー*」なり、之を重複して「*タタ*」、變じて「*チタ*」となり — *dadu, dida* — 再最初の子音「*d*」を失て「*イタ*」となり、動詞の語尾に附せり、語根「*ラツク*」(今日英の「*レイ*」、横はる)より左の形を作る

Root lag (to lay) — Perfect.

Sing. lag-i-da, lag-i-des, lag-i-da  
Plu. lag-i-dedum, lag-i-deduth, lag-i-dedun.

英吉利語の過去の語尾たる「*ed*」の歴史は既に本論言語の轉移を論ずる際にもきしが、今又右の説明にて一層明瞭となりしならむ、この「*ユス*」語にて動詞に、「*デー*」(「*なす*」)の現在過去を加へたるもの

が、漸次變化して今日の「ed」の語尾を形  
るに至れるなり、故に

Eng. We tamed

Meso-Gothic.

tam-i-dedum = tame-did-we.

この變化は我國の動詞變化に最類似を保  
つものなり、例へば、「たもちし」「ゆき  
し」の如き過去の「し」が「なす」(爲)より  
來りしものならば明に「チャットニック」語  
法に一致したり、又英吉利語にては「な  
す」動詞——to do——を特に別に本動  
詞に附して用ふる時は意味を強むる  
こととなる、例へば

I love & I do love, I love-d & I did  
love & の如し、國語にては、「なす」動詞  
(の行變格)を用ふるときは、之を以て外  
國語を示すこととなれり、「論せし」と「あ  
げつらひし」「論す」と「あげつらふ」との  
如し、種類は異なれども、「なす」動詞が  
一方は語尾の形に、一方は助動詞の形に  
分 達せし原理に至ては全く其徹を一

より成る——break + fast——「ブリーク」は破るの義「ファスト」は  
固着の義にて轉じて變化なく倦怠の義なる事いふまでもなし、か  
る異様の二語が結合していかたして朝飯の義を生じ出せるが、長夜  
倦怠せる眼りさめて朝食の佳者に接するときいかに心氣の快爽を覺  
ふるものぞ、「ブリークファスト」の結合は實にこれより來れり、始  
めてこの兩語を全然結合して一語として活用せしめ、「ブロークファ  
スト」——broke fast & i-faste 代りに「ブレイクファスタッド」——  
breakfast-ed & i-fasted なる人は、なほ今世の人が「ツック、ヂンナー」  
といふべき代りに「ブー、ヂンナー」——took dinner, takedinner-  
ed——といふと均く誤謬として卻けられしや論なからむ、然れ共其  
用法の便利なる事漸次全社會の認るところとなりては、かゝる異様  
の結合語を亦動詞として名詞として美麗なる英國語の「分子となれ  
ば、さればこの語を以て獨逸語の「フリュー、スチエック」——früh-  
stick——と混同するはあやまれり、「フリュー、スチエック」は單にはや  
き食事の義に止れり。

なほ二個の普通なる形容詞的代名詞「サッチ」(斯様なる)「ホイッチ」  
(何れの)の二語をとらむ、今日の獨逸語に「ソルヒ」「ウエルヒ」と  
いふ、獨逸語系に屬する語なり、「アングロサクソン」に「メウシル

にせり、今日の英國語にてもこの「ゴス」  
語はかくまで頽れしが、單數の第一人稱  
(なんぢ)の之は、「アングロサクソン」を

通じ、「ゴス」原語よりもなほ十分なる形  
體にて残れるを見る「レキテス」は「ホク」  
なり、今日は「レイテスト」なり——  
Pers. Sing. G. lag-i-des, E. lai-dest  
(thou)——

これらの説明を要するに、復合時形の生  
ずる原理は、近世言語の分解的精神と正  
に同一なることを認むべし、或は「オー  
シメント」により、或は「レヂュニアリカ  
チオン」によりなして單獨變化をなす  
とは異りて、獨立なる他の動詞を以て、  
第二次的の地位にたしめ、之を本動詞  
に附着して作るもの、後世助動詞の發達  
は既に茲に萌芽せりとすべし、羅甸の  
「アマ、ホー」——L. ama ho, E. I am  
to love——は、佛蘭西の「エト、アム」  
——E. aimer-ai E. I have to love——  
と正に其法を同くす、たゞ古代語の復合

「フツ井ル」といふ蘇蘭土に「フトル」& i-fut、この二語を研  
究せんてまづその獨逸語をとり

E. Such, Which. G. Solch, Welch Saxon Swyle, Hwyle  
「ソル」は「ウエル」の構造を考へしめ、「ソルヒ」は「ソ」& i-  
「ヒ」とより成るにはあらぬか、而して其「ルヒ」は形容詞の語尾とし  
て用ひらる「ソル」& i-と同様にはあらぬか、形容詞の語尾として用  
ひらる「ソル」は、例へば「ケーニッソル」——könig-lich——の  
如く、(王的若くは王の如き)「ソル」& i-を義に用ひ、而して「ソ  
ル」——So——は「かく」又は「かくて」の義なり、さて此兩語結合し  
て「かくの如き」を意義する「ソルヒ」は發達せしにはあらざるかとい  
ふはまづ生ずる假定説にして、吾人の科學的研究は亦實に其然るを  
示すなり、「ウエルヒ」も亦同様に「ウエル(誰)」と「ソルヒ」の結合な  
り、英語にて示せば、「サッチ」「ホイッチ」は  
suchso + like which——who + like  
の義の結合語なるを認むべし。

第十一節 接尾語の發達(英語上の實例)  
なほ一步を進みて結合語の一種類に入るべし、即二個の語の一方  
主語として獨立に存立し他の一方は之に従屬的となり、單に「サッ

變化と、今日の分解的變化との著き差は、本動詞の完全なる一語なる否との點にありて、これによりて兩者の間に明なる識別あり、即羅甸の「アマ、ポー」の本詞「アマ」は語幹にして直に之に「ポー」の語尾を附したるもの、佛蘭西の方にては、本動詞「エイメ」と語尾「エイ」(持つの意、英の「ハツ」に均し)と何れも完全なる語にして、そのまゝに結合せるなり、「エイメ」は即英の「ツ、ラッ」と均く不定法にして、之に持つの助動詞なる「エイ」の附せらるること、英の「ハツ、ツ、ラッ」といふに於ては、羅甸の方は「アマ」は單に語幹にして完全の語にあらざ、不定法は「アマレ」也、蓋「アマ、ポー」の始めは、「アマ、アマ、ポー」—— amare + fuo —— なりしものにして、「アマレ」(不定法)も「アマ、ポー」(ある)動詞共に完全の語にして、明に英語の「アイ、アム、ツ、ラッ」なりしものなるや、疑無し、「アマ、ポー」の語源が「アマ」—— jhu —— な

「イクス」—— suffix —— として止る者はなり、例へば「ファイナル」の「ナル」「ファイアレス」の「レス」の如きにして之を「サフィックス」とす、譯して接尾語といふべし、語尾ともいふべきなれど文法上の形態を示す語尾と混同するの畏あるべし、是で「ナル」—— full —— より始むべし、この語は英語形容詞の語尾として廣く用ひられ、fearful, care-ful, plenti-ful, duti-ful, truth-ful (畏るしき、注意せる、澤山の、等)の如く多くあり、この接尾なる「ナル」が充足を意味する形容詞の「フル」(みちたる)—— full —— より來り此語が他の形容詞と結合して語尾となれると明白なり、「ペリラス」「プレントラス」—— perilous, plentious —— の「ラス」(外に出るの意と同一なり、されど「フル」が既に他の形容詞に從屬して獨立を失ひ單に接尾語として止るに及びては、既に充満の本義は損減せられ、「ファイナル」—— final —— も「恐怖に満ちたる」といふより單に「畏るしき」といふべし、この「ナル」は「ハウス、トラン」—— house-top —— (家の頂上、屋根)の「トラン」は其能力決して同一にあらざるなり、「フル」と正反對の接尾語なる「レス」の由來は意外なるべし、「ファイアレス」—— fear-less —— (畏れなき)の如し、この語を「見せる人は直にそが、リットン」の比較級にして「……より少き」といふ義なる「レス」

ることを既にいひたりき、されどこの事は歴史上經歷を認め得べからず、又た「なす」と「ある」との二個のことは後世の助動詞、古代の語尾として重要な地位を有することも亦た見られしならむ「to be and to do」—— これ亦東西其微を一にして「したり」は「してあり」より來り、「ゆきしは」ゆきせし」より來るといふに同じ、言語とはふものに一定の法則あるはこれによりても測りうべきなり動詞の性質として次に來るは説語法「ムード」—— Mood, Modus —— 及働式「Voice (active, medium, passive)」—— ことれなり、蓋これら動詞の性質が印歐語に於ていかに發達せしかを考究するは、獨り學問上の興味あるのみならず、又たそれらの性質の意味を明にし、今日の語を學ぶ上に於ても讀者を裨益すること決して少なからざるべし、まづ説語法より始めむ、「ムード」の語は明に「モー」同一語にして、方法を意味し、動作が視察

より來れると思ふべし、これ其形の全く同一にして否定的の意義亦相近きによる、され共其正き歴史を求むれば此の如き臆測的論斷の價無きを見るべし、形容詞の接尾語なる「レス」は「サシヤン」語の「ラス」—— lens —— より來り即今日の英語にて「ルース」—— loose —— といふに於て「脱却」の義又は「……より自由なるの意なり、故に「ファイナル」を「ば」恐怖の少き」といふ義にはあらざ、「恐怖を脱せる」又は「恐怖よりはなれたる」義なりといふ fearless — loose of fear, or free from fear.

次に形容詞の第二の接尾語なる「リー」に進むべし、god-ly, home-ly, child-ly, brother-ly, love-ly (神の、わがやの、小見的、兄弟的、愛らしき等)等の如し、この語もその儘にては直に語原を求め難かるべきなれども、その「アインロサシヤン」語に「リヤン」—— lic —— といふるなるを知らば亦甚難からざるべし、今日の英吉利語にては此最後の「ク」が「ロ」なる喉音をば全く失ひて「リー」となりたれ共「チウアニク」語族の其他の諸語にては皆之を保存して形容詞の接尾語となすを見る、獨逸に「リヒ」瑞典に「リヤン」和蘭に「リク」—— rich, lig, lijk, wijk ——

即今日の英語にて「如き」「似たる」の義なる「ライク」—— like —— に

さるべき方法をあらはすなり、かゝる方法は之を細別せば頗る多かるべく、古代希臘及文法學者は實際其言語の上には區別無き多くの法を區別したりといふ、印歐語の上にて、今日迄形體を別にして示さるゝ法に通常三個あり、左の如し、

(1) なし終れる、又はなしつゝある、又は己に對してなされし單一の動作を示す形にして、語根又は幹に、未來現在過去の時を區別する語尾を加へ、なほ其上に動作者の人稱を示す語尾を加ふ、この方法を指示法—Indicative Mood—といひて簡單なる説話法なり。

(2) 一の動作が會にひあらはされたるのみならず、直に或他の人の前に持來され、通常命令又は要求となるもの、この法を示すには、人稱語尾を用ふることもあれど、通常不必要として語尾を省略し、その上頗る簡單の形體に約めらるゝことあり、これを命令法—Imperative—とす。

あたれり、實に此接尾語の起源は「相似」の意味なる形容詞にして即ち「ライク」の起源なり、獨逸の古語なる「モエン、ゴス」—*Mooson-ohio*—と名くる言語を研究するとき、當時にありて此語が獨立の形容詞として又他の形容詞が接尾語として共に全く同形を以て用ひらるゝを見るべし、かく「ライク」の古言より「リー」なる接尾語を發達せし此語族は、また今日にあたり今日の形を用ひて新き接尾語を發達せしめんとせり、即英語に於る「ゴッドライク」「チャイルドライク」の如き既に十分の通用をえたり、さて又たこの「リー」なる形容詞の接尾語がなほ一段用法の進歩をなしたることを注意せざるべからず、何ぞや、この副詞の語尾として最も普通に最も廣大なる用をえたる是なり、英國語にては形容詞に「リー」を加ふれば副詞をうべし、「ツルリー」(眞實に)、「ファイアレツスリー」(畏れ無く)—*true-ly, fearless-ly*—の如し、この便利にして驚くべき用法は英吉利國語の特性にして、他の獨逸語族中かゝる活用を有する者なし、「サクソン」の古語に求むればかゝる副詞の語尾は「リース」—*lice*—にして形容詞的語尾が「リック」なりき、かくの如くにして英國人は獨立なる形容詞ありて副詞の接尾語を發達せしめたり、「インド」言語の靈妙なる活用亦驚くべきかな。

(3) 一の動作が一の事實として述べられず(たゞ)事實なりうるもの、たゞ心中の考へとして述べらるゝもの、たゞ希望必要にはあらざるも出來うべき條件状態、或他の動作の結果又は目的なる動作などを示す、接續法といふ(英佛に「サンマヤンシチツ」、獨逸に「コンメンクチャツ」)—*Subjunctive, Subjunctif, Conjunctive*—、通常接續法といふは他の動作に附屬する動作を示し、直接のものを示さざれば、こは必しも他の動作に附屬せしものならざれば示しざるにあらざらず、例へば羅甸に「クイッド、ヂカム」—*quid dicam*—といふ接續法は「われはいかなることをいふと考へらるか」(實際いふにはあらざらず)といふ義を示し、今日の「サンマヤンシチツ」の如く必しも他の働き、たゞ「……」を要す「……」とならむの如きに附屬するを要せざりしものなり、古代の言語殊に希臘言語などの接續法は主としてかく

以上の例なる接尾語は皆獨逸語源のものなれば茲に一の羅甸語族より來れる者を示さんとす、幾倍の倍を意義する接尾語に「ブル」といふあり、*double, tri-ple, quadrup-ple* (二倍三倍四倍)の如き是なり、この數詞の由來等につきては「チャットニク」語表を見るべし、さてこの「ナン」といふ接尾語は羅甸の「ナリク」—*ple*—より來り、「保つ」または「まげらるゝ」といふやうなる義なり、英の「ダブル」は羅甸の「チニフック」に均く、獨逸語族の語を用ふれば「ター、フオーニエ」—*two fold*—といふに當れり。

第十二節 英語動詞語尾の發達

いでや是より、少く英吉利國語が文法上の形態に入らむ、こゝに吾人は動詞の規則變化の過去に「d」又は「ed」を加ふる事、及「有る」動詞 *tobe* の第一人稱單數現在に「am」といひ第三人稱單數に「is」といふ事、名詞の復數に「s」を加へ、持格(「ボセシーサ」)に「s」を加ふる事、の三ヶ條をとるべし、説明すべき文法上の形態元より限無れ共、今はたゞ言語の靈妙なる作用の例をどかんがためのみにして、深く「インドゲルマン」の語學に立入らば吾人の目的にあらざればなり、まづ「d」「ed」を加へて過去を形るとより始めん、こはや、解明に難きところなり、既に獨逸語に於てかゝる形態無し、その他獨逸

用ひられしものなり、接続法は必しも一の形なるを要せず、印歐の原語には接続法に二個の形ありて、その種々の古代の分派に傳れり、兩形の最發達せるは希臘語にして、一方簡單なる方を接続法といひ、他を希望法——Optativ——といひ、希臘語にては「ボクタクテター」及「オイクテター」これなり——*thypotakhtike, eukhtike*——蓋この第二の形を希望法とすは、「アツチカ」の語法にて之を直接に用ふるときは、主として希望を示すに用ひられたるが故なり、英吉利語に助動詞の「メイ」(May)を文章の首頭にきて示す形と均し、たとへば、「このことがかくありしならばよ」  
 “might this thing be so!”  
 の如し、されど上代の希臘語にありてはこの兩形はたゞ同一の接続法の分形たるに止りて、その間用法の大なる差は無しものなり、今希臘語の兩形の一例を示さんか。

「われ存在す」又は「われあり」の義なるを知るなり、同じ助動詞の第三人單數なる「イヌ」——*gnō*——をぞれ、「サンスクリット」の古語に遡りて檢すれば、この語にあたるものは「アスチイ」——*asti*——とすふ、「アスチイ」を分解すれば「アス」と「チイ」より成る「アス」は既にいへりし如く存在を示し、而して「チイ」は第三人稱を示す代名詞なり、その「アスチイ」が英吉利國語の「イヌ」となるまでいかなる階段をへたるやを尋ねれば實に左の如し

“Bouleu ō” (to council)  
(Active, 1st person)

Tense.	Conjunctive	Optative
Present.	bouleu ō	
Imperfect.		bouleu—oimi
Perfect.	be—bouleu—k—ō	
Pluperf.		be—bouleu—k—oimi
Aorist	bouleu—s—ō	bouleu—s—aimi
Future.		bouleu—s—oimi

古代希臘に兩法の用法上大差なかりしことを示さんため、「オヂッセイ」篇中一文章の英譯を左に

“This is the way of zeus-reared

語族に屬する語中かゝる形を有するもの無く、「アングロサクソン」語に於ても亦認ること能はず、即此形は近世の英吉利國語が特質なり、されば「ed」の形は比較的近世にして英吉利國語が獨逸の古語に於て吾人は既に此の如き形態の發達を認め、即「モエリ、イヌ」語にて「吾等が愛せし」*We tamed it*「タミデナム」——といひ之を英語に解すれば *tame-did-we* (吾等が慣らしなせし) となる、かくの如く「モエリ、イヌ」語にて過去を示す形は「爲す」——*do*——といふ動詞の過去より來り、これが動詞の語尾となりたる事を認め、かくて吾人が「ed」の由來亦識るべきなり。

次に「有る」動詞にうつるべし、この動詞(又は助動詞)は、第一人稱單數現在に「アム」となる、*I am* 此れなり、「アム」は「a」と「m」とより成る、「インド」語族の古語なる「サンスクリット」語を檢すれば、「アム」——*as*——といふ形ありて存在(「エキヤスト」)の義を示す、又た「ミ」——*mi*——の語ありて第一人稱の單數を示す代名詞にして、英國語の「ミイ」——*me*——にあたり、かくて「アム」の語原を探究するに、その「a」は古語の「アス」の第一綴の残れる者、又たその「m」は「ミイ」の第一綴の遺影なる事を認め、即「アム」といへば、

「サンスクリット」語 アスチイ 希臘語及「リスアニア」語 イヌチイ 羅旬語 エスト 「スラヴオニア」語 イエスト  
 獨逸語 イスト 英吉利語 イヌ  
 Asti-esti-est (yest), isti-is

首音の「a」は一方羅旬語族にありては「e」と變じ(佛語其他皆是なり)、一方「スラヴオニア」語にゆきては「ye」となり、又一方獨逸語に於ては即「i」となる、而して最後の綴音「i」は諸國語に於て脱却し、次で英國語となりては「再」[t]を脱却しかくして「is」はなれりけり、第三人稱單數の動詞に「s」を加ふるは今日の語法なるがその始めは「th」を加へたるものにして、*loves, love-th* の如し、「th」は「t」の轉化にして即亦英人が祖先の代名詞たる「th」の遺影なりと

kings; he may hate (Subjunctive)  
 one man out of mankind, one belike  
 he might love (optative) ”

元より兩者は全く同一にはあらずして、一方は多少他方よりもなほ事實に近きこと、若くは勢力の強きことを表したるなるべけれど、その間に甚しき實質的徑庭はあらずしならむ、接続法は今現在なされつゝある、又はなされんとすることを示し、希望法は既になし終れることの物体又は結果を示す、従て希望法の方は多少指示法の過去に近き性質を有し始めたるならむ、これらの事は各其語自身の研究に任ずべし。

さてこの兩法の構成法は如何といふに、印歐古語に於て、動詞の現在期に、接続法の方は通常「s」の語尾、希望法の方は「ss」の語尾を加へしものにして、諸語に於て種々の形態をなしてあらはる、再希臘羅甸兩法の接続法を比較せむ、

「s」と區別せんためならむ、さらばその復数の記號なる「s」に進まんか、「アングロサクソン」語にも既にこの用法ありしがそれは唯男性名詞に限られしかもその全体にはあらずき、この用法が今日の如く廣き用をえしは主として「ノルマンレンチ」の勢力にあり、佛蘭西言語の起源たる羅甸言語を尋ねれば、復数の語尾に「s」(「es」)を加ふることは、第三變化の男女姓名詞に止り頗る限られたる者なるを、佛蘭西語となりては、恰も持格の「s」が英語に於るが如き關係を生じて、復数の「s」が廣く一般に用ひらるゝに至り、この法が又た英國語に入りて其通用を得たるものなり、英國語名詞の復數に「s」を用ふるを正格とし、其外に所謂不規則と稱へ、他の語尾により又は母音の變化によりて復數を示すもの數個あり「パン」「メン」(人)——man, men——「フット」「フット」(人)——foot, feet——

第十三節 英語名詞語尾の發達

名詞の語尾に加ふる「s」の發達はいかん、まづその持格(「ボセーシ」)に於る「s」の添附を見よ、佛蘭西語にはこの方法なし、この方法は獨逸語族より來れり、今日の獨逸語にて持格に「s」を加ふるものは、強變化の男中姓名詞及混合變化の男姓名詞に限り殊に單數のみにして今日の英語の如く弘く行はれず、

「アングロサクソン」語にありても亦其用法は制限せられて單數のみ用ひられ、今日の英語の如く復數にまで用ひらるゝものに非ざりき、その女性名詞全体及男中姓名詞の多分が持格に「s」を取ること無しも亦今日の獨逸語と異なることなし、然るに進歩と發達とに富みたる英吉利國語は猶豫無く此簡便なる方法を發達せしめ、單復數の別無きは勿論、些少の取除きの外廣く之を用ふるに至る、英文典に於て今日なほ其用ひらるゝ範圍を限り重に動物に限りたれども、既に堂々たる近世の學問書は自由に此方法を無形名の上にも用ふるに至れり、その「」——Apostroph——を加ふるは、復數の記號なる

Latin. (Subjunctive)		Greek	
“Amare” (to love)		“Bouleu—ō” (to council)	
(Present)		Conjunctive.	Optative.
S.	P.	(Present)	(Nuperfect)
amem	amēmus	N. bouleu—ō	bouleu—oimi
ames	amētis	S. —ēs	—ois
amet	ament	” —ē	—oi
		” —ēton	—oiton
		” —ēton	—oitēn
		” —ōmen	—oimen
		” —ēte	—oite
		” —ōsin	—oien
(Imperfect)			
amārem	amarēmus		
amares	amarētis		
amaret	amarent		

兩者語尾の類似に注意せざるべからず、もと羅甸の「ス」マヨシク「チ」の現在

「s」と區別せんためならむ、さらばその復数の記號なる「s」に進まんか、「アングロサクソン」語にも既にこの用法ありしがそれは唯男性名詞に限られしかもその全体にはあらずき、この用法が今日の如く廣き用をえしは主として「ノルマンレンチ」の勢力にあり、佛蘭西言語の起源たる羅甸言語を尋ねれば、復数の語尾に「s」(「es」)を加ふることは、第三變化の男女姓名詞に止り頗る限られたる者なるを、佛蘭西語となりては、恰も持格の「s」が英語に於るが如き關係を生じて、復数の「s」が廣く一般に用ひらるゝに至り、この法が又た英國語に入りて其通用を得たるものなり、英國語名詞の復數に「s」を用ふるを正格とし、其外に所謂不規則と稱へ、他の語尾により又は母音の變化によりて復數を示すもの數個あり「パン」「メン」(人)——man, men——「フット」「フット」(人)——foot, feet——

Singular.

數名詞の形態を保存する者なり。

は希臘の接續法にあたり、過去は希望法にあたり、なほ試に羅句の「ある」動詞(「エッセ」)の接續法を見れば

Esse (to be)	
Subjunctive Imperfect.	
(English)	
I may be.....	1 essem, forem.
thou mayst be...	2 esses, fores.
he may be.....	3 esset, foret.
I mightst be.....	1 essēmus, forēmus.
thou mightst be..	2 essētis, forētis.
hemight be.....	3 essent, forent.

右表中第一人稱の「エッセム」は「エス、ヤ」、第二人稱の「エッセ」は「エス、ヤ」の語尾、「エッセ」は人稱語尾なること既に示るが如し、希臘語にては希望法に於て明にあらはれ「オイミイ」又は「ア

A. Saxon.		English.		German.	
Nom	man	man	mann	(der)	(der)
Gen.(or possessive)	manes	man's	mannes	(des)	(des)
Dat.	man	to man	manne	(dem)	(dem)
Accus.	man	man	mann	(den)	(den)
Plural					
N.	men	men	männer	(die)	(die)
G.	manna	men's	männer	(der)	(der)
D.	mannum	to men	männern	(den)	(den)
A.	men	men	männer	(die)	(die)

第十四節 結合語の發達

かくの如く英語を例として「インドゲルマン」大語族が、言語結合にいかなる靈妙の能力あるかを示せし後、さて結合語の概見をなすべし、結合とは二語上の語が相結合して一語を形れるものにして即「コムパウンド・ワード」—— compound word —— これなり、吾人はさづ結合語にありては單純なる獨立語に於るよりも音類的外形的變化の甚きとを認めざるべからず、形容詞としての「ライク」は「サクソン」に於る「リク」に於る「ライク」の如き古形と

「オイミイ」の如き形をとり、—— essem || es + ya + mi, — oimi, — aimi — 用法は希臘羅句大約同一なりとす、「a」及「ya」なる語尾の由來に關しては頗る明瞭なり難し、或は「a」及「ya」はもと「オイン」の「a」の如く同く「アロミナル、ルト」にて、語の前に來る代りに後に來りしものにはあらざるべきか、或人は之はもと動詞にして、「ya」は「行く」といふ意なりしといふと明瞭ならず。

(4) 第四には所謂動詞の不定法 Infinitive Mood につきて少く述べざるべからず、元來不定法といふは、人稱及數などにて定められざる故に名付けられたる名稱なれど、これは頗る不當の名にして、かくの如き形はもと歴史的の「ム

ト」にはあらず、實をいへば名詞の一格の形たるにすぎず、即動詞が名詞として用ひらるべきに於る形なり、「サンスクリット」にては、或は「アツワチ」たり或は「ダチ」たり、或は「ロカチ」たり

いかほどの差異もあらず、その「リー」となりて形容詞の語尾たり副詞の語尾たるに至ては既に特別の研究なくしてその「サッロ」より來り「レイク」より來れるを知ると能はず、屢論したりしが如く思想と言語とは必要の一致を保つものにあらず、言語は思想の記載にも定義にもあらずして唯吾人が習慣上兩者の間に聯想を構成したる所謂「アロトラーリ」にして「コンヴェンション」の記號にすぎず、吾人が結合によりて「たび新語を作るや、吾人は之を以て唯吾人が聯想の符號となし、其語源の構造性質などに向ひては毫も注意を致すと無く寧ろ之を忘却せんとする傾向あり、一たび語源の性質を忘却せる以上は之を自由に變化し轉移せん事自然なり、無學なる人が自由に言語を轉移するは實にこの如例なるべし何となれば一般の人は即或語の起源歴史などに向いては全く無學なればなり、無學なる看護婦が牛乳を「マルク」マルキ」甚きは「マリキ」といひ、料理番が「ビーフステーキ」—— beef-steak —— を「ホステキ」若くは「フンテキ」といふは通用語となれり、英國の水夫は「ボートスウェイン」(水夫長) Boat swain の敬を長く畏るべきをしる、しかも彼等は「ボート」の何たり「スウェイン」の何たるに留意せざる故に容易に此語を省略して「ボスマ」—— bosh —— とよべり、かくの如き能力は



たるが如し、英語が「to」なる前置詞を用ひて此形をあらはす歴史の如き暫く之を畧す。

次に働式に移るべし、今日の英佛獨語などにて所謂「ゾオイス」として取扱はるものは、加働及被働の二種にして、兩者の差別特におべきまでもなし、綜合的言語にありては兩者其語尾を異にして示せることも讀者の知るところならむ、今は羅甸の一例を示さむ、

“Amari”—to be loved.

Indicative Passive.

Present

S	P
1 amar	amāmur
2 amaris (amāre)	amamini
3 amatur	amantur

Imperfect

1 amabor	amabūnur
2 amaberis (-re)	amabimini
3 amabitur	amabuntur

既に示したる「プレキファスト」「フォアヘッド」より「リー」「リッロ」「フル」などを「アム」「イス」など重要なる分學の上に活き以て音韻の轉化と結合語の靈妙なる作用とを完成したり、音韻(發音)の轉化及省畧は結合語の融着を固くし親密にし、言語の活用を靈妙にする所由の原則なり、英國人は屢々獨逸言語の崎嶇を笑ひ Oberappellationsgerichtsrat, Rittergutbesitzer, Schuhmacherhandwerk など

は屢々その例にひかる、しかれ共英國語とても其歴史に卓越せる音韻化轉の恩恵をうくる事なかりせば今日なら此の種の語にみちたるものなるをしらざる可らず、内形的音韻的の變化及省畧は音に結合語の融着を強固にするのみならず、又又實にその上に於る吾人の聯想を確實にして其言語の生活を敏捷たらしむるものなり。

第十五節 英語の語源説(再)

獨逸語及佛蘭西語に存する多の前頭語接尾語及文法上の形態につきて説明の例を與へんはそれらの著者に向ひて要用の事なるべきをその時と紙とを有せざると深く著者の恨とする所なり、今は前篇の末に讀者に約せしところあり、そは英者利語の語源研究上面白き事實のあるとなり、今本篇を終るに臨み其一二例を簡單に述べ、英國語上の一語をとり「エキモロマイ」を求めんにまづ羅甸起源の者

すべての時形を示す必要もなかるべし、希臘語の方は既に示したりしことありしやに覺ゆれどなほこゝに便のため示す

“Bouleú—estai”  
(to be advised)

Present

S	D	P
Bouleú—omai	Bouleú—omethon	Bouleú—ometha
” —ē	” —esthon	” —esthe
” —etai	” —esthon	” —ontai

と獨逸起源の者とを區別せざるべからざる既にいへるが如し、さて其羅甸族のものは「ノルマンフレンチ」によりて海峽を經過し來れるものなれば其英に入る前には先づ「ゴール」的影響をうけたるをしらざる可らず、羅甸的英語の起源を求むるときはたへず心中に佛國言語上に行はるゝ音韻規則といふものを氣憶せざるべからず、凡そ宇宙の萬象錯雜變化して紛亂極り無きが如くなれ共なほ其間に一系亂れざるの自然則あり、無意識に自由に變化省畧せらるゝ其語の音韻といへ共亦た「自ら原則あり、言語により時代によりて其人民が心理的作用の遺影ありて各特別の法則ありて細せられ、決して常人の思惟するが如き無規則紛亂の者にはあらざると今日言語學の認むるところなり、「インドゲルマン」語音韻轉化の上に行はるゝ大原則の如きはなほ其章に至て讀者のしらるべき處なれば今は暫く之を措きて佛國語の談をなさん、その最著き點は羅甸語中にて兩母音の間にある子音が佛語に於ては消滅することとなり、これによりて英國語には面白き一の現象を呈し、同一の羅甸語が一は佛國語を通じ海峽をわたりて來り、一は羅甸より直接に入りたるによりて、英國語上に二様の異なる語を生じたること多し、「セキユア」(安全)と「シユア」(確固)——Secure, Sure——の如し、一方は兩母音 e u 間の e

かくの如し、かく加働と受働との區別明瞭にして疑無きなれ共、この受働なるものはそも／＼亦他の働式より發達せしものなることをしらざるべからず、希臘言語は最よく此事を證明するものにして此語にては受働式はなほ他の一の働式と殆ど合同す、これを「メヂウム」といふ——Medium——英語にていへば「ミッドル、ツオイス」即中間働式の義にして、希臘の文法家がこれを加働被働の中間にありと考へたるより附したる名稱なり、この働式は今日の分解的言語に再歸代名詞を用ひて示す、所謂再歸の活きをなすものなり、故に希臘語にて、「フーロイ、オマイ」といへば、「われ忠告せらる」といふ被働の意と、及び「われはわれ自身を忠告す」といふ再歸の意と兩様に用ひられうべきものにして、即再歸は働作が働作者自身の上にはたらくを示す、今吾人は又こゝに「サンスクリット」語の受働及再歸の形を示すの繁をなすべし、され

を失ひたるものにて佛語に「マニール」——sur——といふ、又「ルール」(規則)と「レギネーション」(整理)もしかして共に羅甸の「レンジ」(方針を示す)——reg——といふ語根より來る、一方は「レギユラ」、一方は「レギユラチオ」——regula, regulatio——より來り、前の方は中央子音を失て「ルール」となり、他は其まゝに入りて「レギネーション」となれり、「ルール」に當る佛語今にては「レグール」——regle——なれ共其始めは「リツル」——ritle or reule——なり、たゞ茲に一の注意すべき點あり、そをいかにいふに兩母音間の子音を保存する語はすべて羅甸より直接に來れるものと思ふべからず、何となればその英語に傳りし時には佛語にてなほその子音を有し後に落去したる者あればなり、英の「オベディエンス」——obedience——に相當する今日の佛語は「オヘイッサンス」なれと古くは「オヘイッサンヌ」——obéissance, obéissance——といひたるなり。「ナウン」の「アンノクサニクム」——Noun, Agnosticism——の二語はいかたして同一起源なるをみるや、この驚くべき系統を示して愈この篇の終りとすまふ。

Sanskrit. gnanan naman  
Greek. gnosis (knowledge), Latin. cognosco (to know)

ど兩語を比較考究するときは、「メヂウム」は確かに「ハッシュ、ツ」に先立ちて發達せしものなることを知るなり、當初は主格自己の上に来る自身の働作を示せし「メヂウム」が、その自身の上の働きを受くるといふ意味を漸次擴張して、他の人より主格に對して働作を受る場合、即受働の場合にも用ひらるゝに至りしは、最自然にして明瞭なる經過なるべく、希臘語は正しく之を示すものなり、尤も後に多くの復分体を生じ、新しく兩式に附加せるものあれば、兩者は多少異なるどころあるなり、この中間の働式「メヂウム」につきて注意すべきことあり、希臘「サンスクリット」をまなびし人は知るべく、其動詞の中に形は常に「メヂウム」の形をとり、而して其意味は純然たる加働なるものあり、此點にて希臘「サンスクリット」兩語は別に一致せず、人民によりて其用法を異にせしものなり、この微妙なる用法は再歸働詞として、今日獨逸語にも其遺影

“a” Greek 否定の前置詞  
由て “Noun” and “Agnosticism” は共に Indo-german 語 a root “gan” or “gna” より來ることをしるなり

nomen (noun)

あり。

羅句語にては、「メヂウム」の形は全く受働の用に移りたることなほ近世語に於るが如く、當初の再歸の義は全く之を失へり、たゞ決して被働には用ひられざる若干の動詞の上に其本義を保持せり、たゞ「ば」(「ヴェニスユル」)生活する——自身を養ふ(「ウトル」)はたらく——自身を用ふる(「レミニスユル」)思ひ出す——自身の心に呼び返す(その他多くあり——vescor, uxor, reminiscor——)文法學者がこれらを「デポネンツ」(deponents)といふ、發働の意味を含んで受働の形を有するの義なり、受働が「メヂウム」より來れることを知る者には此名稱はやゝ適當を欠きたるものなり、さて働式の意味は此の如しとして、其構成を考ふるに、「サンスクリット」にては受働の幹を形するに新き「ya」の語尾を用ふ、加働の接續法の語尾と同様なるが、この方の起源は明瞭ならず、普通には「行く」といふ義の語根な

### 第九篇 言語の生命

四

#### 第四章 形態變遷の原因

言語の轉化を論じてその第二段たる意義の變遷に進むにさきだち、前にのべたる音韻上若くは外形上變化の四分五裂せし所説を再考し、に總合して其概括を爲さむとす、言語には其形体と内容とありて互に絶對的關係を有すること無く、相獨立して變化し進歩するものなり、故に言語の轉化を論せんには須く兩者を別々にとくべし、第一にとくべき者は則そが外形の變化にして言更ふれば發音上の變化是なり、大凡そ言語の變化するには四個の正き主義あり以下順次に之を説くべし、

##### 第一節 模倣の原則

模倣といふことが言語の歴史上に有する勢力は頗大なる者あり、兒童が母語を習得する方法の大部が之にあるや論無く、之によりて言語に至大の變化を生ぜしと亦多し、或は故意に或は無意識に多人の言語を模し若くは全く之を採用し、かくて多くの國語は常に其形態を變化せり、これに數項の條件あり、

- 1、模倣の勢力の至大なる者

りといふ、されどこれとても十分の説明無し、兎角かく新に作られたる語幹又は語底の上に、再歸動詞の語尾を加ふ、この語尾は形體上、希臘と「サンスクリット」と最相類似して

Secondary Sanskrit.			(N.)	Primary Sanskrit.		
(1)	(2)	(3)	(1)	(2)	(3)	
i	thas	ta	S. i	sē	tē	
mahi	dhvam	nta	P. mahē	dhwē	ntē	
Greek.			Greek.			
mēn	so	to	S. mai	sai	tai	
metha	sthe	nto	P. metha	sthe	ntai	

模倣により時に全く自國の言語を棄て、他國の語をとれる者あり、「コーンウォール」の「ケルト」、普魯西の「ウエンド」、「ブルガリア」の「ハンズ」、「ハイテ」の黒人、北米土人の大半の如きは皆自家の語を棄て、他人の語をとれるものなり、

- 2、模倣の能力に制限あること

兒童にして其父母其他周圍の人の發音を十分に模倣習得し得ざるものあり、同一の國語中にも然り、他國の語を學ぶときは非常に勞力の後なほ十分に模倣し得ざる聲音頗多し、かゝる事は即一國中に方言の別るゝ大原動力にして、發音の上のみならず、言語上すべての部分に是あり、「フムボルト」といへる學者は、合衆國に移住せる國人が十分英吉利語をまなびえざるはその才の足らざるがために

##### 3、模倣の行はるゝ範圍の弘大なること

かゝる廣義の模倣といふ事は言語の歴史の上に最廣く行はれて、今日世界に純粹なる國語として認めうべきもの殆ど一もこれあることなし、若より其語の起源などいふ處に迄立入らず、唯吾人が歴史的研究の範圍内にも他國語の勢力なきものあらず、その模倣は單語、發音の形、熟語(「イデオムス」)を最多しとす、文法上の形は變化

希臘には單數に「マイ」「サイ」「タイ」の如き本源の形態を存す、これが人稱語尾の「ミイ」「シイ」「チイ」より來れることは疑ふべからざれども、其轉移を説明せんは今日容易にあらざ、**「マイ」**は重複の形にして、「**イミ**」の約なりといふは最自然なるがごとし——*mai-ma+mi*——第二次的語尾の「**マーン**」はよく「**マム**」の轉なるを示せり、人稱語尾を重ねて、主格自身に歸着する再歸の働を示せしといふは最ありうべきことなり、又一説には最初には再歸語尾は長母音にて區別せしものにして、「**い**」を「**ii**」「**い**」を「**iii**」の如く發音し、「**ミイ**」「**シイ**」の如くいひたるならむ、於是「**イ**」が働音的性質を帯び來りて「**アイ**」となり、「**マイ**」「**サイ**」「**タイ**」は成りしならむといふこれも理由あるべき説なり、例へば英吉利語に物主代名詞の「**マイン**」(我のもの)——*mine*——は、其始め「**i**」の長母音にて、「**ミイーン**」といはれしものなり、こ

さるゝこと少し、文法は一國語の生存を司る中樞機關たればなり

第二節 類同の原則

この原則は原名を「**アナロジー**」——*Analogy*——といひ、近來學者によりて十分の研究をなされ、言語の轉化を多く上に最貴重なる一原則なり、その理論の巨細は頗る高尙にわたれ共、要するに其本前は前篇に暫くのべたる不規則例外を去て正則統一に就かんとする自然的傾向の支配を云ふ、即他の多數の語の形態意義に少數の語がひきよせらるゝことにして、この原則は内容外形兩者の上に共にはたらくなり、英吉利語の「**シャル**」(未來を示す助動詞)「**ウィル**」(同)より來れる過去なる「**シエド**」「**ウード**」——*shall-should, will-would*——に「**e**」音のあるを以て、「**キャン**」(可能の助動詞)より來る過去の「**クリード**」にも「**i**」をいれるが如き最著き例なり、「**シャル**」「**ウィル**」は其原來の語に「**i**」ある故過去にも之を用ふること自然なれ共「**キャン**」の方はもとの語に「**i**」無きに過去に至て之あるは類同の原則によりて、「**シャル**」「**ウィル**」に引よせられたるものなり、言語の轉化が此原則によりて説明せらるべき場合舉て數ふべからず。

第三節 明晰及感動の希望

れど同く「**ミイ**」が「**マイ**」となれりといふ。

羅旬語及之に類似する「**ケルト**」語にありては、「**メデウム**」の意は全く消滅して受働の之に移りたるにより、再歸は他の方法によりて之を示し、近世分解的言語の方法は既に始まり、即「**セ**」なる再歸代名詞を動詞に附すことこれなり——*の*、されど羅旬にては、近世の佛語の如きとは異りて、再歸代名詞は直に動詞に結合してあらはる、「**アマン**」(愛する)なる動詞を例とすれば、「**アマト、セ**」が「**彼、自身を愛す**」の義なり、この兩者「**ひ**」なる母音によりて結合せられ、「**アマツース**」となり、次で又語尾の「**s**」は「**r**」に變じて「**アマツール**」となる、このとき既に單なる再歸の義をはなれて受働の如く用ひらる、「**彼愛せらる**」これなり、元來「**セ**」は第三人稱の再歸代名詞なるが、**「s」**又は「**r**」の形をなして受働の語尾となるに及び單に第三人稱に限らずしてすべて

示さんとする意義の簡單明瞭なる時は、文章は益々簡單となり單に一個の語にても足ることわれ共、不十分のものを明晰にし、且之をして益強くし他人の注意感動を呼ばむとする時の如きは、或は語をくりかへし、或は之に調子をつけなご種々の方法を用ひて示すこれによりて言語の態面に變化を興ふることあり、一の國語中に同義語(「**シノニムス**」)の發生するは意義を明瞭精細ならしむるによるや明なるべし、また同音の語にして義を異にするものは、其義を異にし來ること常にこれあり、殊に我國語の上には其發達を見得べし、今左に其例の最も普通なるを示さん

橋	Hashi'
箸	Ha'shi
端	Hashi
柿	Kaki'
蝸	Ka'ki
飛	Tobi'
鳶	To'bi
水	Mizu'
不見	Mi'zu
梨	Nashi'
無	Na'shi

この種類求め來れば其數限なかるべし、これ皆同音異義の語を區別せんがために發達せし音韻的の變化なり。

第四節 勞力節減の主義

その結果に異ること無んば成るべく自己の勞力を用ひずして或成効をえんとするは人の性情なり、この主義は意義の變遷の上にも發音

の人稱に適用せらるゝに至る、第一人称  
 單數加働(われ愛す)は「アモール」なり、こ  
 れが「アモール」となりて受働となり、第  
 二人稱單數加働は「アマス」なるを、「アマ  
 シス」又は「アマリス」となりて受働を示  
 すが如く、かくして羅甸言語受働式の  
 全体は組織せられたるものなり

amat se (he loves himself) = amat-  
 use = amatus = amator (he is lov-  
 ed).

amo—I love, amor—I am loved. amo  
 s—thou lovest, amas-is = amaris—  
 thou art loved.

羅甸の受働式がかくの如くにして形成せ  
 られたるものなることは、「リヌアニア」  
 の言語にも同様の發達あるにても確證せ  
 らるべきものなり、「リヌアニア」の語に  
 ては代名詞は單に動詞の語尾に附着する  
 のみならず、時としては動詞と其前級  
 との中間に挿入せらるゝことあり、羅甸  
 語にても時にはかゝる形成法ありて、例

の轉化の上にも働けども、殊に發音轉化の一大原動力となり、長く  
 して艱澁なる語は常に短くして發音しやすき語に變遷す、所謂諸詞  
 「エーホニー」のためにも此中に屬す英の「エーヴ」(年代)——ego  
 —は「インド」語の根根に「行く」を意味せる語にして其始め古代伊太  
 利の方言には「エタチム」といふ、羅甸語に「エタス」といふるこれ  
 なり、内容意義の點に於ては暫く後にゆづり、發音の變化につきて  
 此條の觀察を爲すべし、これに數個の條件あり、一般に勞力の節減  
 により繁冗より簡單に向ふ音韻の變化を「オチチックヂケイ」といふ  
 發音崩壞の義なり——Phonetic decay——

- 1、吾人が言語の歴史に於て發音に困難なる語は常に容易なる  
 方に轉化し行くこと、
  - 2、發音上の「ヂケイ」が行はるゝ範圍の廣狹によりて言語の時  
 代をわきわけること、
- 吾人が有する最古の文書碑銘の上にあはるゝ古代埃及并  
 に「カルデア」の「アッカヂヤ」の言語上に、いかに既に大な  
 る音韻轉化の行はれあるかを見れば、各その國語が一定せ  
 せしより此時代に至る迄にも既に夥多しき年月を経過した  
 ることを推知し得るなり、

「ば」トランス、ヴェホル」の代りに、  
 「トランス、セ、ヴェホル」の如くいひうべ  
 し——transvelhor = trans-se-velo——

「アイストランド」の再歸動詞も亦た此種の  
 構成を説明するものなり、例へば再歸代  
 名詞の「シック」を約めて「シク」となし、  
 一人稱にては「ミク」の代りに「ムク」を  
 用ひて再歸の義を形る、「エルスカ」は「わ  
 れ愛す」の義にて加働なり、「タウ、エル  
 スカ、スク」は「彼等相互に愛す」といふ再  
 歸なり、「エック、チキル」及「エック、チク  
 ム、ムク」は共に「われ見ゆる………」との  
 受働の義なり——elska = I love; than  
 elska-sk = they love one another; Ik  
 theykkir, ek thykkju-mk = I seem——  
 古代英吉利にも亦この構成あり「イムド  
 ゲルマン」言語が、その複雑靈妙なる動詞  
 「インフレクシヨンの組織を發達せし手  
 段の大部分は以上述べたるがごとし、かく  
 の如くして「たび進歩の極に達したる動  
 詞の組織は、その後種々の語族に分派す

- 3、言語の種類によりて發音の「ヂケイ」に多少あると、  
 西洋諸國の語所謂「インフレクシヨナル」語族が我語族など  
 に比して音韻轉化の著く大なることは其言語の歴史にて  
 容易く知りうべきなり
- 4、發音の「ヂケイ」を妨止する者  
 發音が速に崩壞轉化しゆくを妨止するもの多くあり、そ  
 の一二を擧ぐれば

- (a) 文學の隆盛、文章多くの人に讀まるゝときは一般人民の  
 言語の亂雜なる轉化は自然に制肘せらるゝ、こは文章夫自  
 身の勢力と文字の保守的性質との二に由るなり、
- (b) 教育、教育隆盛にして言語常に正しく教育せらるれば亦亂  
 雜なる轉化を妨止す、a及bの原因により世が開化に進  
 むほど言語轉化の度は減少す
- (c) 社會の孤立、若し一の社會が地理的政治的其他の原因に  
 よりて他の社會より孤立して生存するときは、激き交通  
 混合の源中にある者よりも、比較的その言語を保守し  
 轉化を少うするや明なり、漢語の盛に輸入されし我國平  
 安朝前後期の言語の状と、三百年鎖國の夢にふけりし江

るに及び、各語族は其本源組織の一部を失ひ、或はまた各特有の新しい組織を以て之に加へたり、希臘の動詞は新形態の多數を加へつゝ、なほ古形を保存するを以て著く、羅甸は古形の大部を失ひ新しく發達せる多數の構成法によりて之を補へり、「サンスクリット」に至ては、其古形を保存する上にも、また新形態を加へたる上にも共に最も著しく、又た「ゲルマン」族は一時最も貧乏なる形態の狀に陥りしが、後助語を廣く用ひ出して、法式時形の上に新き構成を始め最豊富なる語となれり一時かくの如く「インフレクシヨンの隆盛を極めし印歐の諸語が、忽ち歴史の上に瓦解して、近世諸語の分解的性質に達せし狀況はまた蓋し讀者の會得せしどころならむ、吾人はこれより印歐古語がいかにして其名詞の構成を發達せしを見ざるべからず。

#### 第四章 語之發達 下

戸時代言語の歴史とを比較せよ、又我國二千年の言語史上千年に足らざる最近英國の言語史とを比較せよ、この點に於る吾人の興味直に了解せらるべし、  
文字無く開化無き「リスマニア」の言語が「インド」語西部族中最古形を保存し、又中央亞拉比亞に孤立する「ベドニン」といへる種族が今なほ二千年前の「ニ、ヴェ」又は「イェルサレム」の語よりもなほ古き形の語を保存すること。

#### 5、發音の「チケイ」の勢力、

一語の起源を探究するに際して、最困難なるは發音轉化を調するにあり、佛語の「メーム」(同一の義)が以太利古言の「セメチア・メムム」より來るといふが如きは、最簡單なる轉化なり、

Low Latin: Semetipissimum. Old Persian:

semetessme. Later Provençal: medesm

Old French: meisme. French: même

たゞ聲調「アクセント」のつきたる音は其語中にて重要な分子なる故「ホネチックヂケイ」にかゝると最遲し。

印歐語の名詞構成を發達せし歴史を論ずるに先立ち、なほ少くいひおくべき事あり、言語の構成、即其文法上の形態を研究する言語學の一部を、言語の構成學又は形態學と云ふ、原名「モルフォロジイ」これなり——Morphology——言語の形態學は單にその今日若くは近世の文法上の構成を研究するに止らず、進で其歴史を溯り、或言語族の構成法の發達を研究しなほ進では全世界人民の言語が、思想の標識物として、聲音を組織する方法の根本的原理を講ず、言語の構成法は世界の言語を分類する一の重要な標識たることは吾人既に之を本論に詳悉し、この土臺の上に成りたる分類をさきたりき、即「アインレーチング」(孤立語)、「アックルチネーチツ」(添着語)、「インフレクシヨナル」、「インコーペレーチング」等これなり、今これら諸種の分類を通じて、人が思想を表明するために言語を構成する方法を求むれば、大約左の數頁を併べし

聲音上の轉化を論ずるに於ては、この談話的言語の原子たる人間聲音の本質より、其種類及區別、母音子音等從來の用語の真正なる意義、音圖の製法等詳細の論に入らざるべからず、今日は聲音學と稱する學問既に其發達をなし、言語學の一部として人間の聲音を講究し、生理的歴史的の兩面より種々新き研究をつみ、從來の學者が漠然たる者にのみふけりしを匡正して科學的の意味を與へ、言語學上に貢獻せると至大なり、され共その學たるや頗る困難にして一頁二頁の説明は到底その一部をだも了解せしむると能はず、制限ある紙數が一語を此趣味ある問題に費すことなくして經過せしめむとするは吾人の深く遺憾とするところなり。

#### 第五章 内容上言語の變遷

##### 第一節 總論

いでや直に進で言語轉化の第二たる内容變遷の説明に入らむ、言語の外形發音を研究する傍を稱して「ホノロジイ」といひ、内容意義の側を「セマシヨロジイ」と云ふ——Phonology, Sematology——「キ、ノデー」を以て所謂發音學と混同すること勿れ、發音學は英語に「ホニチックス」といひ獨語に「ホニチーシ」の如く——Phonetik, Phonetik

蓋しこれらの諸項は大概既に、前章印歐動詞の發達を論ぜし中にあらはれ、讀者の容易く了解しをたる處ならむ。

1. 語に前綴若くは語尾綴を加ふるごと、但この前綴及語尾は、獨立に分離したるとき、有義なると無意味なるとある事、

「サンスクリット」の「ド、ミイ」が「われ食ふ」の意を示す、これは單に「アド」なる根と「ミイ」が結合したる故のみにはあらずして、兩者が其「我食ふ」の意を成すやうに集りたる故なることを識るべし。

2. 語の中間に加ふる綴音、即内綴によること。

印歐言語に於る轉位(「メタセシス」といふことは主として此上に起る、「サンスクリット」に「ユナイミイ」は「ユイナミイ」の代りなるが如し——skt. ya-ja-mi || ja-na-mi

3. 母音の變化  
母音の變化によりて意義の變化を示すこ

一人の聲音それ自身の研究をなし、「ホノロウ」は言語の分子として聲音を講究するなり、その間に絶えず關係あるは勿論とす、發音上の轉化は言語學の發達と共に早くより研究せられたり、これ外形の變化は比較的簡單にして説明に容易なるが故なり、意義の上に至ては則然らず、その講究頗る困難にしてたへず人の思想を講究する心理學と關係を保たざるべからず、多少の原則を創建するも到る處不規則例外とに遭遇し、この點の研究は永く不十分の狀に止りき、近世に至りて前記言語轉化の原則として第二に數へし所謂「アナロジイ」の原則發達し來り、加ふるに佛國の言語學者「ダルメステッテ」等の 新研究世に出で、今日にてはこの點の講究亦殆ど完全の域に達しぬ、然れ共これらの新く發見せられたる原則の如きは何れも多少複雑の場合にわたり限ある紙數はこれらの詳細の説明を許さず、こゝにはたゞ最普通なる場合をとりて、單語の意義が轉化しゆく狀況の大体を示さんとす、言語には一方に單語あり一方に文章あり、殊に文章は完全なる思想の一塊を示す者にして言語の單位たることなほ後篇言語の本質を多く時に詳論すべし、されば言語の生命をときその性質を記せんにはまづ文章をときざるべからず、然るにこゝに言語生命轉化として説くところ専ら單語の上に限れるは

Magician Magician

とは諸國語に多く用ひらる、印歐語を例とすれば、英語名詞の不規則變化、「マン」「メン」、「フット」「フイート」の如きは單數復數の別を示し、希臘動詞の「オオ」に終るものは他動詞、「エオー」のは自動詞なるがごとし、又既に語根に結合せる語尾の母音變化は常に用ひられ、我國語動詞の活用は如き全く之による、「アイウエ」の四母音の變化によりて我動詞は種々活用の變化をなす、「ユカ」(行)「ユキ」「ユク」「ユケ」の如き、「ユク」(このクは子音kを示す、「ru」にあらざる)に ai u o の四母音加はりて活用するが如し、又我國語の動詞が母音變化によりて倍數を示すことは著き事實なり、「ヒ」と「フ」(「ヒ」)「フ」は「ヒ」の「フ」の轉化、「ヒ」の「フ」は「ヒ」の「フ」の轉化、「ヒ」の「フ」は「ヒ」の「フ」の轉化、hi, hu; mi, mu; yo, ya etc.、未開の國語には母音變化多く用ひらるゝと云、今左に「マヤツ」、滿州、「フインニツク」、「カムチャッカ」等數個の國語より「

讀者の頗る怪訝するところならむ、然れ共單語自身にありても其内容意義の側は人の思想にかゝはるがため永く曖昧の内において僅に近世多少の發達を見たるまでなれば、まして思想夫自身の表現たる文章上の性質その轉化に於てをや、吾人の言語學は到底今日未だこの點の研究を紹介する能はず、あらず、唯に一般文章法の轉化變遷の如きは暫く措きて我國語文典の上にては文章法(「シンタクス」)は未だ創設の緒に就かざるなり、茲に言語の生命を記載しその主として單語に限れること誠にかやむをえざるの義としるべし。

第二節 意義變遷の實例

まづ一の言語の單位は個人にあり、個人の言語はたへずその變化をなす、その變化が一社會多數の人に採用せらるゝに至りて其言語上の變化を形る、されば言語意義の變化は多く人を同様に影響すべき共同の心理的原動力ありて一の社會に發生し、これが個人の媒介をへて一般に普及するによりて生ず、これが故に言語意義の轉化は其適用がいかん復雜なるにもせよ、人間思想の原理と伴ひ一定の原則ありて支配せらるゝものならざるべからず、全一の言語は個人により、時代により、階級によりて其差異あり、語の意義の歴史は正にその人民思想の歴史なり、「イシドケルマン」言語の歴史講究せられ

二の例を示すべし

國語名	Java:	iki — これ	ika — それ	iku — あれ
代名詞	Japanese:	ko — こ	ka — か	etc.
	Carib:	ne — なんぢ	ni — かれ	
名詞	Carib:	baba — 父	bibi — 母	
	Mantschu:	chacha — 男	ama — 父	
	"	cheche — 女	eme — 母	
	Finnic:	ukko — 老男	akka — 老女	
數詞	Lushu:	tizi, tazi —	—	=
	Kolyma:	niyokh, niyakh —	—	"
	Koriak:	ngroka, ngroka —	—	"
	Koraga:	ngasog, ngasag —	—	"
	Kamschatkan:	tsiik, thaak —	—	"
Japanese:	hi, hu; mi, mu;			
		yo, ya.		

て「アリア」民族が開化史の上で貢獻せしとの大なるを見れば、又た説明を要せざるべし、「ホノロイ」の上に聲音の盛衰生死あるがごとく「セマトロイ」の上には思想の盛衰生死あり、言語轉化の四大原則たる、摸倣、類同、明瞭、節儉の四原理は絶へず意義轉化の上にもはたらきてやむとせなし、原意を忘却して漸次語の新き意義を發達しゆく例は、既に發音轉化と供ひて「ピンヨツ」なる語に見えるところりき、最初は大い管督者後見者の如き輕き意義なりし希臘語の「エヒスエボス」は、人間の天命を支配する貴重なる職掌の名となりぬ、之と相似たる英吉利國語の「プリースト」——priest——(僧侶)に於るも亦然り、この語は希臘古語に「プリーステロス」といへる語より來り其始唯老人若くは年長者の義なりしものなり、書部の數を算するに卷といふ語を用ふ、これは今日にては書を綴れ共未だかく紙を綴ること無くたゞ卷きて用ひたりし時代に、卷を用ひて算せしものなり、その古語が今日にては既に卷といふ原意を失ひつゝなほ書部の數を算するに用ひらる、編の語義も亦同様の事なり、英語に「ヴォリューム」も亦同様にしてその始めは「廻轉する」又は「巻く」といふ義の語より來りて其書を巻きて綴せし時代の面影を止むるなり——volume——「ペーパー」(紙)が埃及の「パピルス」より來れる

母音の變化が言語の上にはたらく面白き作用を見るべきなり。

4. 語の内部の子音の變化による母音變化の如く甚くは行はれず、その最著き例は緬甸語にありて、子音を氣音にて強むるによりて、動詞の加働と受働とを分てり、「クヤ」は落る、「クヤ」は投げらるなり、「プリ」は「みたさる」なり「マンリ」は「みたす」なり——Burman: kya—to fall, khya—to throw; pri—to be full, pri—to fill。

5. 文章上に於ける語の位置單語が夫自身に文章上の關係を示すべき標識を備へて動かすべからざる状態にあるときは、その語が文章上如何なる部分にあるとも毫も全体の意味に變化なし印歐古語の如く緻密なる「インフレクシオン」を有する言語にありては、故に語の文章上の位置は大なる價值を有せざることを既に本論に羅列語の例をとりて明に説明したり、例へば名詞にも主格は主格

は人の知る處なり、——paper, papyrus——「パンク」(書)は源意に「山毛嫁」(マナ)の意あり、且て山毛嫁の板を用ひて文字を記載せし時代の面影なり、編字の糸片なる、編字の竹冠なる如きは皆所謂、時代の標識なり、銀行を「バンク」——bank——といふは市場に於る兩換商人が金銀を取扱ひし机卓の名の無限に發達せしなり、「コッパー」(銅)は其始めて「キブラス」島より發見せられたるを示し、「イッリン」(綿羊)は其始めて「モスル」島よりえられしをあらはせり、漆器を「シヤバン」といひ陶器を「チャイナ」といふ、西印度の名稱は開龍の誤りたる命名なれ共地理學上の術語となりて又動かし難し、かくの如く類々來ればあらゆる語は皆此種の歴史を有するを識らむ、蓋言語の外形と内容とに絶對的關係無きが故に、一語の意義は或は發音の變化に供ひ或は之と全く獨立して自由に變化す、されども一塊の思想と其代表者との關係はまた決して遠に分離しうべきものにあらざる故に、意義の變化は又た發音の變化と同一必ず徐々に來るものなり、

第三節 意義變遷の實例(下)

未だ天日が東より西に吾人の周圍を回轉するが如く思惟せられし頃地中海東部の一小部落に用ひられたる「ブラチテス」の一語あり——



の語尾あり、目的格は目的格の語尾あり、領格は領格の語尾あり、代名詞形容詞亦それ／＼其代表する若くは形容する名詞に供ひて一定の語尾を有す、動詞も亦人稱により數により一定の形態を備ふ、故にこれらの語は文章中前にも後にも常によく首尾相互の關係を示して亂ることなし、これに反し近世の英佛語の如く「インフレクシオン」の性質を失ひ、語自身の變化に乏しき言語にありては、文章上の位置といふことは、言語構成上最重要なる分子たり、我國語に於ても文章上語の位置は重要な分子にして、例へば、「人犬を殺す」と「犬人を殺す」とは兩名詞位置の交換により全く反對のことを示す、主格は常に目的格の前にあるといふ原則による、英吉利語にても同く

“The man kills the dog.”

“The dog kills the man.”

兩者全く反意なり、これを獨逸語に比較すれば更に明なり、獨逸語は今日なほ「イ

Planètes——、遊行者又は彷徨者の義にして天上の諸體が宇宙を彷徨するがごとく思ひし當時人民が之に與へたる名稱なり、この名の下には太陽を始め木星金星などより月までを含み、しかも吾人の地球は入らざりき、天文の學問進むに及びて恒星の區別認識せられ、「プラネット」なる語は太陽木星土星を含有せずなりて而して反りて吾人の地球をは其中に意味するに至る、譯して惑星又は遊星といふは其原意によれり、すべて學問上の言語は亦此の如く變化しゆくものなり、吾人が唯一の最高恩恵者なる「サン」(太陽)を復數に用ひてすべての恒星を示し、かの至愛の女神たる「ムーン」(月)を復數として一般の遊星を示す、談話の序なるを以てこの「ムーン」—moon—なる語の由来を示すべし、この語の歴史は最著きものにして、名稱の發生する段階を見るに適當の例なり、皎々愛すべき「ムーン」の名稱がいかにして「インドケルマン」人祖先の間に發生せしかを尋ねて其起源に溯ればこの語は實に「インド」語の語根に「マ」といひ (ma) といひ、測量といふやうなる殺風景なる語より來るを知るなり、今日にては世界開化の中心たる「アリア」人民も、其祖先が未だ亞細亞の高原に羊を牧せし時にあたりてや、彼等は未だ天文の考無くたゞ月の盈缺によりて時のすぎゆくをばかりければ、茲に「はかる

インフレクシオン」言語の多くの性質を備へ、殊に冠詞の明瞭なる變化あり、故にこの語にては「人犬を殺す」と「犬人を殺す」といふも多少語勢上の差あるのみにて、意味の上には寸毫の變化無し、即

“Der mann todt den Hund.”

“Den Hund todt der mann.”

の如し。

6. 重復即「インフレクシオン」による事、

重復法が印歐古語を形勢する上にいかに大なる作用をなしたるかは、前章動詞の説明に詳悉せしところなり、この方法は全世界の諸語を通じて殆ど之無きはかくまで廣く用ひらるゝなり、その用ひらるゝ場合は極めて多く、又た語によりて其差異あり、今左に重なる用法の場合を示すべし、

(a.) 過去を示すこと、印歐語に於て動詞の過去の時を形るに「オーグメント」と「レヂェニフカチオン」どの用ひらるゝこ

もの」(measurer)と云ふやうなる名稱は即月の名稱となりき、但「ムーン」の語は専ら「チットニック」語族に用ひられ獨逸に「モンド」といふ、羅語族にありては他の語を用ひ、佛蘭西に「リューン」といひ羅甸に「リユナ」—June, luna—と云ふ、光輝の義の語より來れり、尤もこの語族にても、十二月の月といふ名稱には「ムーン」の名稱を用ひ、英に「ヤムス」獨に「モナート」、佛に「モア」羅甸に「メンシス」—month, monat, mois, mensis—、光輝ある者、計るに用ふる者はいと多くあれ共、そが「たび特に月の名稱として用ひられ一般人民の採用を得るに至ては、その語原の如何は敢て關するに及ばざるなり。

第四節 意義變遷の効用

若しすへての異りたる思想に一々異りたる言語を有し、新しく生ずる思想は悉く新しき語を要するものならむには、言語の製造は到底行はれがたきことならむ、幸にして事實は此の如くならず、古き物質を用ひて新しき思想の用となすところの驚くべき能力は言語の間に存し之をして吾人が日進の開化に供ひゆかしむるは又た造化の恩恵なり、「計るもの」—意義の語が月の名稱となりたること既に驚くべし、之に古代人民が一種の迷信を供ひて「ムーン」は又た狂亂的感情のや

とは既にとき盡して余り無し、今日英の「チッド」(なせし)は「コス」の「ダー」(なす)の重複「ダダ」より來れるが如し、(b.)復数を示すこと、復数を示すに重複を用ふることは印歐語には行はれざりしが如し、動詞の人稱語尾の復数を示すにも吾人の考よりすれば、第一人稱復數(われ)の如きは單數の「mi」を重ねたらばよかりしならんに、印歐原人はしからず、之に「si」(なんぢ)なる第二人稱を加へ、以て第一人稱復數の「マン」を作れり、復数を示すに重複を用ふる好例は近くわが國語にありて、第一人稱復數代名詞は「われ」の重複「われ〜」によりて示すを殆め、「これ〜」「それ〜」「めい〜」「やま〜」「とき〜」「ゆき〜」「く〜」「なんど種々の品詞を通じ、種々の義を寓して重複せらるゝもの多し、尤國語の重複法には數多き義ありて、單に二個以上の數といふにはあらずるが如し。

うなる奇怪なる意義を有し來りしとは、又更に驚くべきなり、「リユニ」にありても「ムーン」にありてもこの意味を寓して多くの支語を生ぜり、英語に於て示せば、「リユニシー」「クエナチック」「狂亂」「ムーン、ストラック」「月病)、「ムーニング」「ムーチー」の如き是なり、更に「スミス」(鍛冶)の語をとれ、その滑平の義の語より來れること既にいへり、而して鍛冶職始まりて後人の姓といふもの生ずるに至り、「スミス」——Smith——は其姓の名の一となれり、而して今日にては「スミス」の姓は實際の鍛冶職よりも遙に多しといふ、「ケザル」——Caesar——は諸君も知る羅馬の英雄が名なり、其名の來りし原由はいづこなりや、種々臆説の行はるべきあり、彼が出生の不常なりしによるか——a Caeso matris utero——、その血統の長きに由るか——Caesaries——或はまた「モーレンタニヤ」の家を殺したるによるかモーレンタニヤ語に——Caesar——、そは兎角吾人の「ユリウス、ケーザル」一たび帝位に上りてより、爾來羅馬市に主權を制する者は皆「ケーザル」と呼ばるゝに至る、しかのみならず獨逸の「カイゼル」——Kaiser——(皇帝)、魯西亞の「ツァール」(主權者)——Ozar——はみなこの「ケーザル」より來れり、甲板若くは單に板の義なる「ボード」が「ブロード」(廣き)より來れりといふとは既に

(c.)集合を示す、同一物の復數にあらざりて類似体の集合を示すなり、「カナリヤ」島の語に「ニルガル」といへば、水及水の如きもの、義といふ、

(d.)最高級を示す、事物の甚しきを重複によりて示すは、復数を示すと同一様の原理なれば、國語の重複法もこの用をなすもの多し、「よし〜」「よい〜」甚だよし」の義なるは、佛蘭西の「ポークー」ポークー(澤山〜)といふに均し、「アツカチア」語に「ガル〜」「いへば」甚だ大なる「マンチンゴ」に「チンク〜」といへば甚小なる小兒の事なりといふ、

(e.)連続せる動作を示す、近世の語に「ペリフランス」にて示す連續的動作を、印歐古語にては重複によりて示せしことは亦前章に詳論せられたり、希臘の「ヂダイミイ」、「コス」の「ガガ」の如きは其例としてひかれしもの、「タミール」語に「ムル〜」「さふはつおやくこ」にて英に「ダー〜」「さふと似たり」 Tamil:

いひたりと覺ゆ——board, broad——、この語が其意味を轉化しゆく状態は左に之を列擧すべきなり。

- 1、机卓(テーブル)を示すこと、2、その上に食事を載せその周圍に坐する食卓を意味す、「フェスチバル、ボード」(祭式の宴會)の如き之なり、3、單に食事又は食品の名稱、英語の諺に「吾等は「ベッド」(寢寐)、と「ボード」(食物)とのために勞働す」といへるが如きなり、
- 4、そのまはり人民の群集するよりして直に集會結社を意味することとなれり、「ボードオフ、トレード」「オフコンマース」(商業組合、貿易組合)の如し、5、船の甲板に用ひ、それより轉して種々の語を生ず、「アホート」「オーヴァー、ボート」の如し、

6、この語は又又一轉して紙製造人の術語となれり即「ボード、ライク」——board-like——といひて最厚く強きとを意味す、我が「板のやうだ」といふと全じきなり、

「ポスト」——Post——は羅甸の「ポシチウム」より來る、こは又た「ポニー」より來り、私が置くといふ意なり、——positum from pono——の語の用法の沿革は左の如し、

mut-mur. E: mummur——、かくの如き自然聲をまねたる語に重複により連續的動作を示すものは、我國語の副詞に限無くあり、「むつ〜」「むや〜」「むわ〜」「むや〜」「がむ〜」「よち〜」「むら〜」「もん〜」「ちん〜」此類枚擧に遑なし、皆「オノマトペ」起源の明なるものなり、我に「ちん〜」「ひ、英に「チック、タツ」をいひて時計の音を示すを見れば、重複法が連續的動作を示すにいかによき方法なるかを了解し得べし。

(f)事物の激烈なるを示す、これは最高級を示すと云ふと大なる差はあらず、「たかく〜」のぼる、「やす〜」の如し「きらり〜」「きら〜」との間に差なかるべからず、印歐言語にもこの用法ありて「サンスクリット」に「ウバリ〜」といへば「益高き」こと、希臘に「ハム、フアイノ」〜といへば「光りかやく」ことなるが如し、誇勢を重複にて強むるなども自然の

1、原意にして、置く位地を定めるなどの意に用ふ、2、位置といふ名詞、3、郵便箱、これより多くの「ブリツウェーヂ」あり我「わたし」の一語をどれ、いかに多くの意義が此語の周圍に發達せしものと、人の最上部を示す厚意より、あらゆる物体の上部を示す言語となり、次で譬喩的方法によりて社會の首領たる地位のもの、事物の原始などを意味するに至る、又同時に實體的譬喩的に用ひられて其意味を助くることあり、熊本地方の俚諺に、大要たま頭痛が手わけてまはりよる、の如きこれなり、英語の「ヘッド」はなほ一段用法の進歩をなして、條目の意に用ひらる、これは集會などに列する員の頭といふ考よりして、條目の相並列するをいふなり。

第五節 意義變遷の種類

言語の起源に近き時代より今日に至るまで言語の生命の上に生ずる新き名稱の附與は、皆前の諸例に示せるが如き方法に由れり、この點に二個の形態を認めうべし、第一は新き名稱の起源は意義の限定によりて始まること、第二はその得たる名稱の廣く用ひらるゝに至ること、これなり、所謂「計ることの標準となる者」即「メーメアラ」は限無く多くある其内より、特に月の一をえらみて之に其名を與ふ、これ「メーメアラ」の意義を限定して月の名稱にのみ用ふ

ことなり、「はす〜」「は〜」「さ〜」「さ〜」「は〜」「は〜」と「いや〜」「ぞれ〜」「ぞれ〜」「な〜」「な〜」と「馬鹿〜」「馬鹿〜」「馬鹿〜」數ふるにたへず。我國語重複法の最多く用ひらるゝは此點にありといふべし。

(g) 屈起る、又は反覆せらるゝ動作を示す、「あの人の聞き〜」してはおぼへたの如きこれなり、南米「ブラシル」の語にて「アセム」は「外出すること」、「アセム」は「屈外出すること(第一人稱)」、「オス、オセム」といへば、「彼等相次で出行く」こととなる。

重複法の用ひらるゝ場合は大略此の如くなり、なほもれたるもあるべし、兎角此方法が種々國語幼稚の時代に最多く用ひられたるは疑ひ無く、小兒が多くこの法を用ふるにても知らるゝなり。

語の發達を論ずるに先立ちて、吾人は「コムボサシオン」(結合)の説明をなしたりき、結合は「イマンレンション」發達の原動力にして、當初は獨立に使用せられし

るなり、これを英語に restriction and specialization of general terms といふ、さてかくして一たび限定せられて吾人が愛すべき月の名稱となりたる「ムーン」は、漸次其意義を弘の來りて天文學上無數の遊星を意味するに至る、かくて固有名辭は常に「クラス、ネーム」にうつりゆくなり、この状態を extension and generalization of special terms といふ、新き名稱の生ずるや、人民は常に偶然にその物質に附與せられたる些細の性質をとりて之に命名し其他多く重要な性質あるもそれは命名者の關するところにあらず、言語發達の初期にあたり一般に新き名稱の起るは常に其事物の性質及動作の名稱より來ることには後篇言語の起源を論ずるの條に詳論せむとす、一の語とその語にて示さるゝ事物の種類との結合は極めて寛柔なるが故に言語は常に多くの相異なる意味を同一の形態の下に集め、以て意義の擴張を爲す、試に英語の「マーキユリー」mercuryの語をとるべし、こはもと恒星の名にして我水星といふこれなり、古代の神話に於てこれらの星が皆神力を與へられたるとき「マーキスリー」は神使の名なりき、この二個の原意よりしてこの語は忽ち其中に含まるゝ種類の擴張をなせり、まづ其神使にして迅速なるどころより種々の報道者を意味し、天神の使たる名稱は新聞配達人の

語が、他の語に附着して其從屬となり、第二次的の位置をとりて其獨立を失ひ、所謂單一なる形體的分子と化す、廣大なる印歐語「フレクシオン」の發達がこの原理より來れることは、吾人が學問之を證明してあやまるどころなし、されども斯語の「フレクシオン」が悉く一の例外もなく、結合に基するものと思ふは、今日に於て、なほ未だ不充分の見解たるを免れざるべし、「アリア」言語族にありては、到底其起源を獨立なる語に歸着し得ざる「サフアイキス」あり、かくの如きものは音韻上の轉化の原因より發生したるものなり、されどこれらは極めて少き特例にすぎず、大體印歐語の「インフレクシオン」の組織は、結合より發達せるものとすべきし、これ最新言語學の創建者たる「フランツ、ボッフ」によりて明瞭に示されたる原理にして、呼で「アッゲルチナチオンズ、テオリー」として「Agglutinations Theorie」。

名稱として用ひらるゝに至る、されどこはなほ自然に近き變化なり、化學者は直に之を最流動し易き金屬の名として即水銀の義に用ふ、我水星の譯はこれよりや來りけむ、神の使としての「マーキユリー」の名は既に忘失せられて久しけれども、人の使として、金屬の名としての「マーキユリー」は常に人口にのぼれり、水銀を管に入れて寒暖計を作るより「マーキユリー」はまたかゝる器械の名ともなれり、しかのみならず、佛蘭西人は週の第三日を「メルクレディ」即「マーキユリー」の日と呼ぶ——Mercredi——譯して水曜といふこれ也、これを用ふる佛人は勿論その日が「マーキユリー」の日なるやをしることなけれ共、今其所以を探究するにこの天文學者が全週の各時間星體の名を與へしとき、この日の第一時が「マーキユリー」支配にあはれるによりて、此日を「マーキユリー」日と呼べるなりとぞ、羅旬名たる「メルキユリー、ヂエス」——mercurii dies——は獨逸語の中に入りてその形を變じ「ウオーテン」が、日となり、次で英語の「ウエンズデイ」となれり——Woden's day—Wednesday——今日の獨逸語にては「ミット、ウオタハ」といひて週の中央日の義なり、かくの如く「メルキユレンヂイ」は多神教の神の名より始まりて、星體の名、金屬の名、溫度計の名、週日の名稱、及人の職業の名に用ひられ、

さて名詞の本論に入るべし、名詞形式の起原は動詞の如く明瞭にたどり難し、最明なるものは羅旬の「ゾオックス」(呼ぶこと、聲)、「フックス」(支配者、君王)の二者にして根より直に形成せられたるものなり、其他一般の動作的語根が、名詞の實質を形るに至る方法は、なほ動詞と同一「インフレクシオン」の方法によりて形られたるものなり、その「サフアイキス」の語根が其當初の獨立を失ひて他の語根の從屬物となるに至る歴史の多くは十分に明瞭ならざれども、その多分が「プロノミナツ、ルート」より、來り早くは「ワーヴル、ムート」の一部も其用を爲したること明なり、名詞の性質上第一に考究すべきは格(「ケース」「カズス」)——Case, Casus——にして、即名詞が文章上於る位置を示すために變化する方法なり、いかにして名詞の語幹が、文章上主たり客たる形態を區別せしかを考ふるに、まづ本語の最古き時代にありて目的物を示すに多く

又た絶束の開化國が言語の多くを胚胎せり、かく一語の下に多くの異りたる意義が發達するは、畢竟外形と内容との結合の固からざるによるなり。

第六節 言語の譬喻的用法

一の性質をとりて直に一の事物の名とし其事物の他の性質に關しては毫も到着することなく、またその一の性質が多く他にもありて決して該事物固有の標識に非るにも關係する處無きが故に、言語の上に屢矛盾しておかしき現象を生ずることあり、例へば一般に菓物の未熟なるときは青き故英語にては菓物の未熟なるとを單に「グリーン」なりといふとあり、しかるに茲にも未熟なる時に青くあらざる菓物ありとせば如何、頗る奇異なる言ひあらはしを生じうべし、この最著きは覆盆子にして英語に「ブラック、ベリー」といひ、譯して「くろ、いちご」といふものこれなり、

“Black berries are red when they are green.”

即ち「黒いちごは、その未だ青き時は、赤きものなり」といふとにて三個のおかしき矛盾を生ず、黒と赤と青とが同一の色を示すといふ奇觀に陥れるなり、かゝる奇異の言ひあらはしにして日常無意識に用ひらるゝ者頗る多かるべし、言語が本義をはなれて自己と情

「m」なる語尾を用ふるを見る、術語にては「アッシュサテュー」にして賓格と譯す——Accusative——今日の國語にては「ば通常」……と示すものなり、時に中性名詞にては語根が其儘に用ひらるゝことあり、主格(……)は「……が」等(即「ノミナチー」——Nominative——は男性のときには「s」の記號を有し、女性にても時にはこの語尾をとりたることあり、なほ普通には、これらの専ら異りたる語幹自身を以て區分し、時なる格の語尾に依らず、中性名詞に於ては主格は常に賓格と同一なること最著き現象なりこの用法に種々あるは語尾は始めには主及客の關係を示すために用ひられたるに非ることを示しうべく、なほ又た或名詞に「サフイッキス」の欠けたるは、印歐語古代にありてもなほ近世の英語に於るが如く語尾無く語幹自身が用ひられたる古代の習慣を示せり、この場合に於ては語の順序、又は文章上通常の用法が、主と

性を均くするものに轉用せらるゝと、例へば「グリーン」を未熟の義に用ゆる如きを言語の譬喩的用法(「ノイギユラチツ」といひ、之に對して其本義の儘に用ふるを本義的用法(「リテラル」といふ——figurative, and literal——、生活力無きものを生活力あるか如くに見立て、記載する、所謂「パインニフイターション」の用法は此原理によるなり、頭を有するは動物のみならず、針にも頭あり、事柄にも頭あり、脚も亦動物のみにあらず、机卓に脚あれば、人の行ひたる事物にも脚あり(「あしがついた」の類)尾も然り眼も然り、「あの人はいつでも級の尻尾の方に居る」、「あれは眼ぬきのことろだ」かくの如くにして限りなく進む、皆人が言語の起源といふ事を忘却する傾向に基してその進歩を助くる原素なり。言語の譬喩的用法の最要なる作用をなすは、言語の歴史の上に、吾人が有形事物の名稱を以て無形にして精神的なる事物に適用するの一事にあり、この事は今日言語の狀態に屢起りて事更に説明を要せざるべし、左に英吉利國語の最著き例を示さん、精神的の名稱が有形的名稱より來ることを知るべきなり、

Simple — without fold. Double — two fold.  
Application — folding or bending to. Imply — folding in.

客との區分を示す唯一の方法なりしものと、印歐語最古の時代に於ては、かくの如く名詞は語幹の儘に用ひられて語尾の變化をとりず、文章上の位置のみが其關係を定めしものなるを、後その語の「インフレンクショナル」の性質は漸次種々の方法によりて其語尾を發達し來る、古代語に於る賓格の語尾「m」は、その始め名詞の意義を強むるために加へたる代名詞なるを知るべし、名詞の意義を強むるに代名詞を加ふることは此語族に今日までも行はるゝ方法なり、例へば「かくて」ジョン、彼は我に「さく」——“so John, he says to me, —”と云ふが如く、名詞の主格ありながら其後に代名詞を加へて意を強めたるなり。

格の論を進むるに先立ち、少く「アリア」語族の性(……)の性を論ぜざるべからず、英吉利言語は今日殆ど文法上の性(……)の性質を欠けれども、其他此族の諸語は近古となく、性によりて充満せ

この種の例限なかるべし、今日「インディアン」語の語源學者は、いかなる無形的精神的名稱にても之が起源を求めて、有形的實体的の名稱より出たるを認めざる者無しといふ、我國語にても今日その多くの例を認めうべし、「とく」は始め紐又は糸の結び目をとくより始まりて、多く有形の事物例へば體をとき、それより無形の適用に進みて、我説をとき、數學の問題をとき、争鬭をとき、僱聘をときなど限無く用ひらるゝ、いかなる國の言語といへ共人生思想發達の跡を一にする限りこの現象は一なるべし、無形名稱が其起源を有形名稱に有するとは言語形成上の大原則にして、言語起説をとくに當り再のぶるところあらむ。

第七節 印歐語族助動詞の歴史

言語意義の説明につき、言語轉移の例に最良好なる「インド、ゲルマ

Important — carrying within.  
Apprehension — taking hold of a thing. Relation — carrying back. To invest — to put to clothes.  
to develop — to unwrap. to suggest — to carry under.  
Wrong — wrung or twisted. Right — straight.  
to forget — not to get.

らる、我國人が歐洲語を學びてまづ怪し  
其識別に苦む點は性にあり、男女雌  
雄の自然性を除き、あらゆる無生物の名  
稱は男中女三性に區分せられ、或は語尾  
の如何によりて區別せらるゝもあれば、  
或は全く正則無きものあり、始めて此族  
の語を學ぶもの、先づ困難するは無生物  
の性の識別にあり、「アリア」人民はいか  
にしてかくの如く繁冗なる性の法則を成  
立せしめたるものぞ、たゞ生物の男女を  
別ち、無生物を中性となせば、それにて  
自然に十分なるに、無生物にも男中女の  
性を附し一々面倒なる語尾變化を附帶せ  
しむるに至りしは、果していかなる原因  
によりてなるか、これ讀者の最識らんと  
欲する問題なるべし、希臘羅馬「サンスク  
リット」の古語より、近世佛獨の言語に至  
る迄、「インド・ゲルマン」の語は性の變  
化を以て充満せられ、しかも其諸語に相  
通じて同一なるもあり、異なるもあり、  
性は實に印歐言語に於る一大不可思議な

「語の助動詞を多くべし、「有る」を意味し、それより單一なる助  
動詞となり、主格と賓格とを結合する單一なる文法上の形態詞とな  
れる英語の「be」をとるべし、かくの如き形態詞は多くの言語にて之  
を欠く者多し、この助動詞は現在過去人稱によりて種々形を異にす  
るものなるが、其起源を尋ねれば皆實體的の眞氣を有せるをしるべ  
し、即ち、「am」「is」「are」は語源の「as」より均く發達せしものにして  
呼吸又は着坐の意より來り、又過去の「was」「were」は語源「vas」より來り  
逗留の意を有せる者なり、又その不定法の形なる「be」「been」は語源  
「bhū」より來り生育の意味なり、「do」は感動的文章には單に助動詞と  
して用ひらるゝものなり、「have」も亦之と同く所有又は獲取の原意よ  
りして助動詞の用となれり、所有が過去の動作の完成せられたるを  
示すに用ひられたるや自然にして、英佛獨諸國の言語は皆之により  
て「ハイン・エント、テンヌ」を形る、例へば  
E. I have found the knife. G. Ich habe das Messer  
gefunden.  
F. J'ai trouvé le couteau.  
然るにこの「ハイン」が未來を示すに用ひらるゝに至りしは一段の進歩  
なり、英語にては單に未來の意義のみならず、やゝ義務の意味を寓

り、文法上の性の起原を説明せんは頗  
る困難なる事業にして、今なほ茲には其  
十分なる説明を與ふること難し、たゞ讀  
者にして其大要を了解しえば足るなり、  
印歐語の性の根原を考究するに、「ア  
リア」語族の始原、所謂「プリミチヴ、ア  
リア」又は「ペレント、アリア」と假想する  
時代に於ては、文法上の性の記號といふ者  
はこれ無ししが如く、文法上の性の區別は  
決してこの語自然の性質には非ざるを識る  
その最著き例は、古代希臘羅馬言語など  
に於て、男女性の最明に分るゝ父母の語  
は、「パートル」「マテル」にして共に同  
一の「エル」の語尾をとるにてもしらるべ  
し、通常「o」は男性の語尾、「a」は女性  
の語尾として用ひらるれどもこれ決して  
常則にはあらず多くの例外あり、されば  
印歐古語に於て男女中性を區別する語尾  
其他の形態は決して元來特別の性を示す  
語幹の變化にあらず、始め偶然に男女の  
區分たりしものが學問の力によりて發達

するなり、英佛獨語の例を左に示すべし、佛語にありては、これを  
動詞の語尾に加へ混合して未來を形るなり、  
Latin. habeo virgulum ad findendum.  
German. ich habe ein Aestchen zu spalten.  
French J'ai une verge à fendre.  
English. I have a twig to split.  
French Future: je fendrai = je fendre + ai.  
= J'ai à fendre. = I have to split.  
單一なる未來を示す助動詞なる「シャル」「ウッセル」を見よ、——shall,  
will——、「シャル」は義務の下にあることを意味し、「ウッセル」は希望  
の意より來る、簡單なる文法上の形態詞も十分の意義ある言語より  
發達せしものなることは、言語上重要な眞理なり、我國語の如き  
は「未だ研究の十分なるがために、凡ての文法的助語をその本源  
迄探求すること能はざれ共、その此の如くにして進歩せしは蓋疑  
無きことならむ、「ウッセル」英語にても單一なる未來にあらずして  
希望の意を示すに用ふることもあり、獨逸語にありては、未來を形る  
には、成育の義なる「ウエルデン」を用ひ、「ウッセル」は全く希望を示  
す動詞としてのみ用ひるなり。

し、一方は専ら男性に一方は専ら女性にといふ如く定まりしものなり、印歐言語の始源の性の考へは男女雌雄の實際の区分より起りたるものにして、今日多くの語の如く、語自身の意味又は形体によりて性といふ者を分てるには非ず、されど實際の男女雌雄の性といふ考一たび生ずるや、想像力に富みたる印歐原人は忽ち性を以て、其適當に屬するものよりも、なほ廣き範圍に推し擴めんとせしなるべし印歐の原人は未だ心理的作用の幼稚なる状態にありて、考へられたる目的物と、その目的物につき考へたる主物とを區別すること無く、自己自身の動作及性質の上の考を以て、自己に似たる生活の物体に附與したるものなり、古代神語の發生せる時代が又た名詞性の發達せる時代なりといふは此點の考なり、かく生物の上の關係が無生物の上の關係にも推しひろめらるゝや、「○」に於る語幹を有する當時日用語の多くが意味の上より男性に用

第八節 結論  
かくの如くのべ來れる意義轉化の説明を見わたせば數個の條件をうべし、

- 第一、言語は其意義をせばめ、若くはひろぐるによりて、新き意義を得ること
  - 第二、無意識に言語の上に行はるゝ譬喩的方法ありて、新き意義を作り出すこと、
  - 第三、言語は有形のものゝ名稱より譬喩的方法によりて無形のものゝ名稱を形ること
  - 第四、言語はその共に用ひらるゝ他の語の如何によりて意味を異にすること、
  - 第五、「美しき女」「美しき畫」「美しき花」「美しき天氣」、同一の「美しき」といふ語にいかん種々の意義を有するかを見るべし、
- 言語はその文章上の關係が被動なると働き方なると、主格なると目的格なるとの如き文章上の關係によりて意義を異にすること、
- 「あの人の顔」といふと「顔の形状」といふと、同一の顔

ひらるゝや、其生物と無生物とを問はず他の「○」語の語幹これに類同せられ、こゝに「○」語尾の語は男性なりといふ通則は生ずるに至る、たゞ處々に或名詞の常に特別の代名と共に用はらるゝこと、又は其明瞭自然なる意義が一般の傾向を妨止し、こゝに多く例外の性を有するものを生ず、男女性の發達はかくの如しとして、さて中性は如何といふに、蓋「アリア」人民は「セミン」の如く、兩性を以て満足すること能はざりき、始めは全く自他の區別を混同し、宇宙の萬物に男女性を與へて満足せしものも、人智の進歩と共に一の時代は來りぬ、即自己は實際自己周囲の事物より異なりたるものなることの識覺の生ぜし時代これなり、その自己周囲の事物に被らしめし生命は、單に自身の反映にすぎざることをしり、主と客との別を明にす、この新しく生せる識覺の第一歩は即第一人稱代名詞に主格を形成することにして、「エユー」「エユー

といふ語が吾人の聯想に與ふる感覺は大に異れり、  
第九節 語源説に注意すべき條件  
凡そ一の語の起源を探索するに注意すべき條件數個あり、又た言語の性質を知る一助なればこゝにのふべし、

- 1. 同一の語が異りたる國語に於て異りたる形態をとること、
- 2. 同一の語がまた同一の國語に於て異りたる形態をとる者あること
- 3. 異りたる語が異りたる國語に於て同一の形をとること、

「ヤムス」「ヤムン」。「ケンツ」「メンチ」。「ノリスク」「ノリスキ」。「マンマシ」。「month, moon; bank, bench; brish, frisky, fresh.

異りたる語が異りたる國語に於て同一の形をとること、

英語の「コール」と希臘語の「カレウター」——E. call, G. Kaleo——羅甸の「サンキエニス」と蒙古語の「セムキエニ」——I. Sanguis, M. Sengui——近世希臘の「マキ」の「マリキシヤ」語の「マキ」——M. G. mahi, Pol. mata——の如きは何れも其意味と形とを均すれ共、語源に於て全く異りたる言語なり、少數なる單語の類似は決して言語の根源の同一なるを証するに足らず、語源論者か言語

「アハム」などの代名詞は、「メ」「マ」の如き賓格代名詞より後に生ぜざるものなり、主格と賓格との區別明瞭となりしこの時代は即中性の發達する時代にして賓格に其形を等うる主格の中性名詞はかくして發達し來る、之と併て抽象的名稱若くは普通の名辭生ず、たとへば櫻、梅、桃等の名は既にあり、其上に樹木といふ抽象的總括的名稱生ずるが如し、是に於て乎中性名詞は始めて發達し來る、故に中性名詞は、その以前の賓格名辭なるか、若くは主格として用ひられたる裸体の語幹にすぎざるものなり、要するに女性名詞はたゞ特異の語尾を有する名詞の一塊にすぎず、男性名詞と中性名詞とは同一の幹又は底より形られて、其主格に於て、及復數の主賓兩格に於て異なるものなり、以上は印歐語の文法上の性の發達せし説明の概略なり、これより以上の性語尾は、各國語それらの考究によらざるべからず、之を要するに印歐古語の性

の比較を求めて最注意すべきは此點にあるなり。  
4. 異りたる語が同一の國語中にて同一の形態をとる者あること、

第十節 内容と形態との關係

言語の發音上の變化と意義上の變化とかく獨立に論じ來りしが、外形と内容とはたゞ絶對的關係なきまでも、なほ多少相關係してはたらくこと無論なり、即發音上の變化が意義の變化を助くる場合決して少なからず、既に或時代に於て同音異義の語あるとき、これを區別するために聲調の區別が發達せることありて、我國語今日の如き正に此例なるをときしが、單に聲調を區別するのみならず、音自身を區別して意義の變化に應ずることあり、例へば英吉利語の「オン」(前置詞)と「オッフ」(副詞)——of and off——は「アムク、サクソン」語にては同一の語なりしが、その副詞の方は原意を存じ、一方前置詞となりては非常の意味の發達をなし、之に供て「個の「f」を落去し、且その残れる「t」は多少「v」に近き發音をとり來れり、英語の「キャン」(能ふ意の助動詞)は獨逸語の「コンヤン」(同義)——can, können——と同語なり、この語と獨逸語の動詞なる「ケンヤン」——kennen——と發音相似たるををしるべし、「ケンヤン」

の上の變化を考ふるときは、女性と男性とは其語幹又は底より異なるもの、中性は之に反して男性と語幹又は底を一にした「ノミナチーヴ」の語尾の異なるものなりといふことをしらざるべからず、今羅甸言語を以て例となさんか、羅甸の形容詞は名詞と同様に變化す、既に前に羅甸名詞の變化は之を示したり、最多數の場合なる第一變化に於て、女性の「ノミナチーヴ」は「a」に終り、男性は「us」に終り中性は「um」に終る、形容詞に於るも亦然り、たとへば「よき」(善良)の意なる形容詞「ボームス」(男)は

M. bonus	の如く變化す、この變化に於て、女性の變化「ボームス」が男班の語底の變化せしものなること、なほ
F. bona	
N. bonum	

男性「ゲニチーヴ」の「ボームス」の如くなりと思ふべからず、男性及中性の語幹は「ボーム」にして共に相均しく、これに男性は語尾の「s」が加はりて「ボームス」と

は識るの意)、この兩者は誠に元來同一の語にして、「ケンヤン」が其本なり、然るを所謂「智識は能力なり」といふやうなる理由より此語が可能の義を示すに用ひらるゝに至る、即識ると能ふとの兩義を有するに至りしかば、これを區別せんために發音上の變化は發達し來り、第二次なる「識る」の意の方はやゝ發音を殊にし「f」をとり來れるものなり。

變化は事物の生命なり、變遷あるは即言語に生命ある所以なり、言語がその内容とその外形とに關して時代をへ、個人をへて變化する状況の一斑は既に記載したり、その説明は極めて梗概にすぎずして高尚の理論に入らず、繁雜の例をとらず、たゞ讀者をして此點の概念をせしめむを以て目的としたり、意義變化の新しい説明につきては先づ頃世に出でたる金澤文學士の言葉のいのかと名くる書を読みて其快心なる論旨をしるべし、言語の發音の側を論ずるに欠くべからざる聲音學につきは、限ある紙數がその論に入るを許さざること既にこれをいひたり、いで左に學問の上より排列せられたる英吉利國語の音標即「アルハメラカル、スキーム」——alphabetical scheme——を示して以て此篇を終らむ。



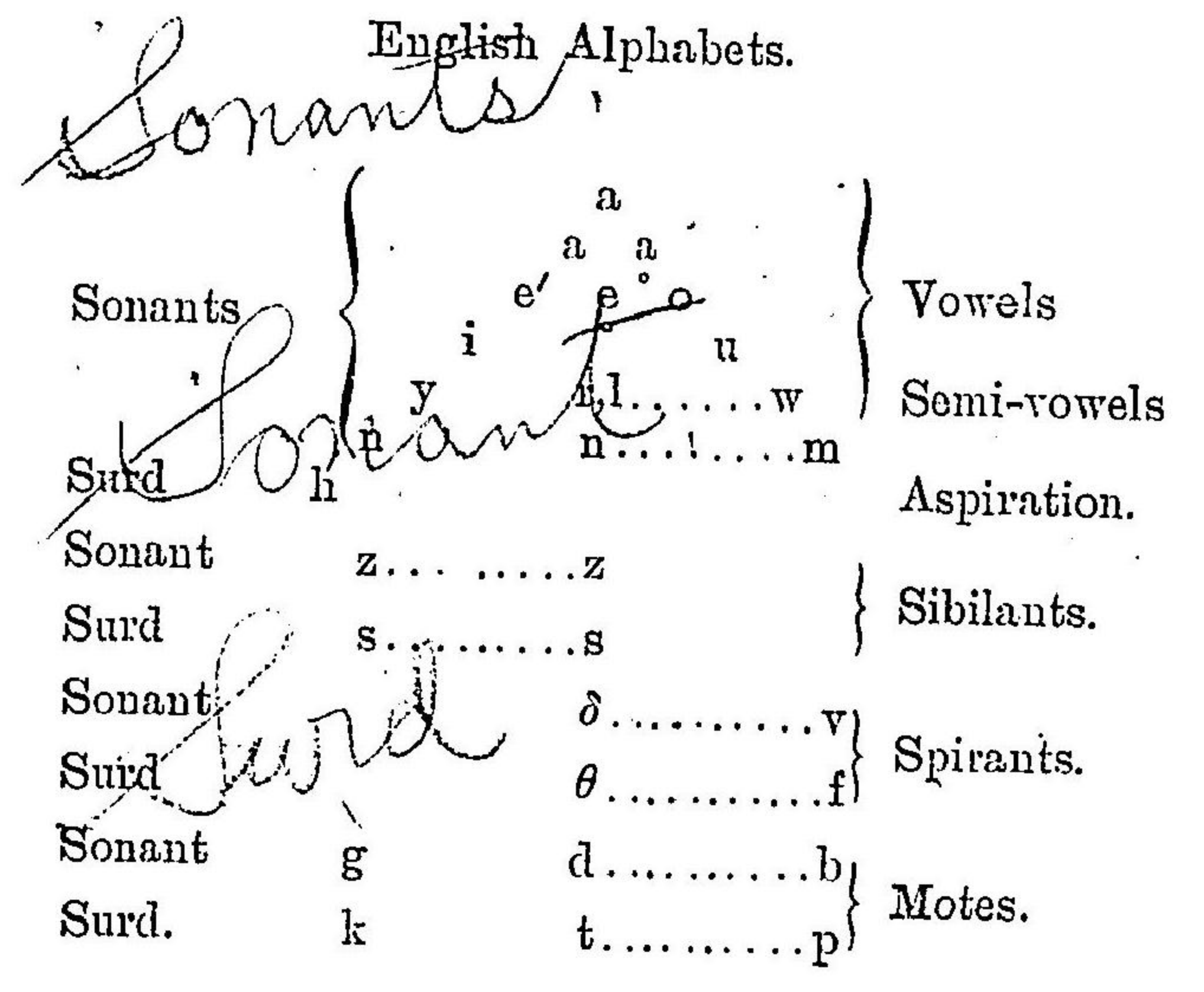
Suyematsu

M. bono—s  
= bonus  
N. bono—m  
= bonum  
F. bonā,  
bonā

なり、中性は「m」  
が加はりて「ボ  
ヌム」となれるも  
のなり、女性は底  
幹より男性及中性

と異りて、「ボ—ナー」なり、その尾の母音  
音が約まりて「ボ—ナ」となれるもの、この  
區別を明瞭にせざれば「インド、ゲルマ  
ン」語の性の本質を理解しうべからず。  
さてこの言語の當初にあり、兩個の格  
「ノミナチーヴ」(主格)と「アックサチー  
ヴ」(賓格)との意味の區別が極めて不精  
確のものなりしや論無るべし、これらは  
決して今日の文典の上に見ゆる如き論理  
的意義を有したるものにあらず、たゞその  
起原はともあれ、始めはその今日吾人  
が所謂主(「サブヤエクト」—Subject—)  
及客(「オブヤエクト」—Object—)と  
稱する思想上の區別を示したるや明なり  
時に「サブヤエクト、アックス、ケース」  
「オブヤエクト、ケース」と呼ぶるこの用によ

English Alphabets.



Sonants  
Kotoshihan  
gasho

第五章 言語の生命

第一節 單語の消滅  
言語に發達あり、變化ある狀況の大畧は之を前の數章にのべたり、

る、最も中性の如きは主格にも賓格にも  
共に「m」の語尾を用ひ其間に區別あらず  
兎角この兩格と、事物を呼びかくるに用  
ふる呼格(「ヴォカチーヴ」)とは共に根原  
的の格にして、他の諸の格よりは古く發  
達せしものなり、主格賓格呼格の三者が  
他の諸種の格より古く發達したるものな  
ることは種々の證左あり、第一には文章  
を構成する上に於て、兩者は根本的に最  
必要なものなること、第二にはこの三  
者は印歐語族中の諸語にはすべて共通し  
て存在す、その他の格は國語によりて無  
きとあると一ならざること、第三にはこ  
れらの格は一定の形を保持して他の格と  
交換せざること、以上の諸理由にて兩個  
の格が最早く發達せしものなるを推測  
しうべし、さて他の諸語の中いづれが第  
二に發達せしやに答ふるは容易の事にあ  
らず、もし、第一には種々の語に存在す  
る範圍の廣さと、第二にはその用法の一  
致の量の大小とより推測しうべきものな

今は一國語の中より失はるゝ語、及新に生れ來る語の大畧の狀をの  
べ、生あり、死あり、生長あり、老衰ある言語生命の記載を終らむ  
とす、一國語の上にて起る消滅は二種類あり、一はその「ヴォカブラ  
リー」中より單語の失はるゝこと、一は文法的形態の失はるゝこと  
是なり、單語が失はるゝ場合は頗る簡單にして多くの説明を要せざ  
るべし、言語は時代を逐て子孫に傳へゆく上にその生命を保持  
するものなるが故に、その社會に於る用あればこれその生存にして、  
無用となれば死したるものなり、言語の消失するに二個の原因あ  
り、  
第一、或語によりて示されたる事物が、其社會の人の思想中よ  
り消滅するときは、その語も共に消失す、勿論文書其他の上に過去  
の遺物としては存在するも、實際人民の談話の上には消失するなり、  
「仲間」穢多、「上下」などの語は殆ど今日消滅せり、これらはなほ  
常人の記憶に止れども、「水干」、「狩衣」などの名は或特種の人に  
らざれば理解せられざるが如し、古代の學問技藝、制度風俗などの  
上に用ひられし日用語が時代を逐て失はれ行くものは枚擧に遑無  
べし、その中は或物は文書又は方言の中に残るべし、或者は全く消  
失して痕跡を止めざるもあらむ、江戸時代武士の間に行はれし特別

らば、「ノミナチーヴ」「フグサチーヴ」「ツオカチーヴ」につぎで起れるは所謂「ゲニチーヴ」の格なりといふを得べし。「ゲニチーヴ」——Genitive——は、英吉利の「ポセシブ」——Possessive——が其一部を代表し、譯して持格又は領格といふ、されどもこの譯語の穩當ならざるは、少く獨逸語を學びたる人の了解せしところならむ、通常この格を示すに、國語にてはなる「の」を用ふれど、「こは唯「ポセシブ」を示しうべきものにして、「ゲニチーヴ」を示すにたらず、獨逸語には動詞の支配あり、動詞の種類によりては其「オプマキター」に「ゲニチーヴ」を取るものあり、その上に種々巧妙なる意味があらはる、例へば、

“Der Herr hat seinen Diener  
des Diebstahls angeklagt.”

の如き、「チーヴメタル」(竊盜)は「ゲニチーヴ」の格にをかれたり、もし「ゲニチーヴ」を悉く、「の」にて譯せば、この

の語が、封建制度の破壊と共に消滅せしが如く、西洋中世の「シツアルリー」に用ひられし用語は、近世の兵制發達せしより、殆ど全く消滅せり、又た其意味を變化して古語の殘るものあり、英語の勢力の義なる「インフルエンス」なる語は、古代の天文學の用語にして、天體が人生の事情の上に與ふる影響を意味せしにすぎず、「マヨギアル」「サターナイン」「スキュリアル」等の語は皆今日消滅せし「アストロロイ」の用語の意味の變じて殘れるものなり、放鷹は我國中世來武士の重なる遊戯なりしが西洋に於ても亦さなりき、此技今日は全く行はれずなりたれども、その技に用ひられし語の意味を變じて殘るものあり、例へば小銃の義なる「マスケット」——musket——はもと少なる雄鷹の名なりといふが如きは其最著き例なり。

第二、語の消失する第二の原因は、同一の意義を有する他の語が入り來りて社會の歡待をうけ、前よりある語を卻る場合とす、この上に最勢力あるは、開化の上兵力の上などにて自國よりも優勢なる外國語の侵入による、たとへ全く消失せざるまでも、そのために著く用ひらるゝ範圍をせば、從て其發達を妨ぐるなり、我國に於る漢語の影響を見ればこの點は直に明なるべし、完全なる大和島根の語を有しながら之を用ひず、競ふて奇怪なる漢語を用ひたるは

文章は、「君は彼の僕を竊盜の告訴したりき」といふべし、この場合には「竊盜を以て」又は「竊盜によりて」などの義を示すこれ獨逸語譯讀の上に屢あらはるゝ奇怪の直譯法なり、蓋格の上の考は最明瞭を要するものにして、之を國語に譯するにあたり、其最多く用ひらるゝ場合を示す國語にてはをとり、之を以て直に其印歐語の格全体の用法を説明せんとするは頗るあやまれり、「ゲニチーヴ」の如きは其最著きものなれども、獨「ゲニチーヴ」のみにはあらず、獨逸語を例とするも、その動詞の支配にて「アックサチーヴ」(賓格)、「ダーチーヴ」(與格)など皆それ、獨有の意義あり、決して單に我國語にてはの「二」を以て譯し得べきものにはあらず、賓格を「を」にて示し、與賓を「に」にて示し、さては「ゲニチーヴ」を「の」にて示すが如きは、其最多く行はるゝ場合をとり、之に當る國語にてはを以て暫く假に其全体の用を代表せしめん

中世以來我教育社會の通弊なりき、「ひ」「み」「よ」「さ」などの始め數個の我數詞をとりて檢すれば其上には靈妙なる作用ありて、將來大に發達すべき要素あるに、支那數詞の早く入り來りて一般の流用をえしより、終に我數詞は發達せずしてやみたりき、日常完全なる我國語を有しながら之を用ひず、好で漢語を用ふることは人のしるところなればこゝに又た例を示す必要も無るべし、或學者は、世の多くの學者が自國の母語をすて、好で不熟練なる漢語を用ふることを笑ひて、死んでしまふことを死黙といふ類これなりといはれき、英吉利語に於る「ノルマン、フレンチ」の勢力亦た之に均くして今日英語字彙上大半の語は羅甸的のものとなり、「アングロサクソン」の獨逸的語は、「ノルマン、フレンチ」の羅甸的語によりて代られたるなり、「アラザン」や「アラターナル」、「アウトランヂン」、「フォレイン」と「フォアキツ」と「ワードン」、「エー」と「カラー」、「フォアサイト」と「フロヴィデンス」の如きは兩族の同義語が共に用ひられて、英吉利語の實用を富ますことの例なり、但し自國の語が其用を失ふは獨り外國語輸入の勢力によるのみにはあらず、語の社會の日用を脱して失はるゝ、他の場合多くあり、總括して之を偶然の出來事といひうべし、羅甸語の馬といふ語の「エックス」は、すべて

とするにすぎず、各格の真正なる用法はそれ／＼の國語の文章法の說明にまたざるべからず、英語の如き分解的勢力其極に達し「インフレクシヨナル」より其て「アインレーチング」の言語の狀態に近づきたるものを除くの外、格の用法は印歐の語族のすべての國語を學ぶにわたる最困難なる點の一なり、なほ獨逸語の一例を示せば

”Die Feindt behaupten meinen Vater seines Geldes und seiner Kinder.”

の如きを見よ、試に之を直譯すれば「敵は我父を、彼の財貨の及び彼の小兒の強奪したり」となる、適當なる我國語にていへば「敵は我父より、彼の財貨を及び彼の小兒を、強奪したり」となる、即ち「を」が必「アックスサチーヴ」を示し、「の」が必「ゲニチーヴ」を示すとせば、こゝに前後の矛盾を免れざるべし、前の場合には、獨逸語の「ゲニチーヴ」は、通常

*Pr. Naoki Naoki*

の「ローマンス」語に用ひられずなりて、「カペルス」のいふ語が用ひらる、この語は「エクウス」よりは劣等なる小馬の義の語なれども、「ローマンス」諸語に至ては完全なる馬の義となれり、「シツルリ」即騎士は中世に於て名譽ある名稱なりしが、これも「カペルス」より來れるなり、これと同様に「マグヌス」の代りに「グランヂス」(大)を措き、「アルケル」の代りに「ベルス」(美)、をおけるが如し、時には最必要なる語が十分の代るもの無しに消失することあり、獨逸の「ヴェルデン」(成るの義)に當る「アングロ、サクソン」の「ヴェオルタム」は消失せり、「ピカム」の語之に代りたれども、これによりて獨逸人が「ヴェルデン」にて未來、又は事の進行を示す如き妙用は全く失はれたり。

これらの事情によりて全く死滅せざるまでも、すべての語にはその行使の限られたる語を生ず、或は稀に用ひらるゝか、特別の句に限りて用ひられ、或は詩句又は擬古文の如き特別の文体に限りて用ひられ、或は普通の人には了解すべからずなりて學者其他一部の人にのみ用ひらるゝもの、或は地方の方言にのみ生存するものなり、諸君は曾て「ミルトン」をよみしことありや、その淑女を叙して、

“from their eyes rain influence”

「アックスサチーヴ」の記號たる我「を」にあたり、「アックスサチーヴ」は、通常奪格の記號とする我「より」にあたるををしるべし、

獨逸語のみにもあらず、印歐諸語殊に其古語に於ては格は微妙なる用法を有し、容易く了解すべからざるものあり、故に印歐語の格の種々の名稱の譯語、たゞ「ゲニチーヴ」を特格といひ、格といひ「ダーチヴ」を與格といひ、「アックスサチーヴ」を賓格といふが如きは、唯其最多く用ひらるゝ場合及原名の原意をとりて名假に全体を代表せしむるにすぎざることを識らざるべからず、例へば「ゲニチーヴ」を持格領格といふは、其用法の大部分を占むる「ポッセシヴ」の場合(人の家鳥の巢の如き)をとりて名假、「ダーチヴ」を與格といふは「ダー」が「興ふる」意の語根より來れるものなるを以て名假たるが如し、譯名を以て直に其實体を解釋せんとせばこれ大なる誤謬なり、又た之と同く、印歐語の格を示し若くは譯するため

といへるを見よ、「インフルエンス」が「アストロ、ジイ」の用語なりしを知らざるものは、この詩趣を會得し得べからざるなり。

第二節 文法上形態の消滅

單語の消失する場合はかくの如く簡單なり、なほ一層繁雜にして又結果の大なるは文法上の區別及其形態の失はるゝにあり、前の數篇を評過せし人は、この點に於て英吉利語が最好き例たるを看過し能はざるべし、曾ては「インフレクシヨナル」の廣大なる組織を有せる「アングロ、サクソン」語より出で、終に今日にては殆ど文法無しと稱せらるゝほど簡潔なる語法にまで瓦解せり、今その少許の場合作をあげて示さんか、今代の獨逸及中世の英語に「エン」といひ、古代の英吉利語に「アン」といへる不定法の語尾は今日英吉利語に失はれしが、この場合にはその代りに「ツ」なる前置詞を用ひられずなれり、今日英吉利語の動詞は第三人稱單數に「s」をとると、「ある」動詞に「アム」「イス」及「アール」と「ワス」及「ウエア」どの變化ある外、單數復數同一の形をとることゝなれり、「アングロサクソン」の形容詞は今日の獨逸よりも一層複雑なる語尾變化を有し、殆ど希臘語同などいふ古語にも近きほどなりしが、今日の英吉利語は全く之を失へり、名詞に於るも同様なり、「アングロサクソン」の言語は今日の

に用ふる我國語の「てには」も亦た其名稱と均く、最も多く用ひらるゝ場合のものをとりて、假に之を代表するにすぎず、決して其てにはが十分に格の原意を示すものにはあらず、「ゲニチーヴ」を「の」にて示し、「アックサチーヴ」を「を」にて示すが如きは是なり、印歐言語の格及性の用法と其發達とは、實に微妙なる變化をなし「アリア」民族心理の發達を考究する上に最興味ある材料なるべし、そは兎も角も斯語の格の論に入るに先立ちて、讀者は先づ此點の考を明にし、吾人が説明と譯語とを見ざるべからず。

印歐古語にありて「ゲニチーヴ」(今より便宜のため不完全なる譯語、特格又は領格などを用ふ)は二様の語尾によりて示さるゝを見る、一は「アス」にして羅句にては、「ウス」の如くなれるもあり、「エイウス」——oisの如し、一は「スヤ」にして、「サンスクリット」語の「デヴァスヤ」(神)——Devasyaの如し、希臘の「ヒ

獨逸語の如く、男性中性女性の區別あり、名詞と形容詞との一致あり、これらは皆失はれて、文法上の性といふことは英吉利語の上には無く、(或詩句などを除きて)、名詞と形容詞とも別は一致も無く、「グード、マン」も「グード、メン」も形容詞に變化無きか如し、名詞の格といふ性質も亦同様にして、今日の英吉利言語には「ダイチーヴ」(與格)「アックサチーヴ」(賓格)などに語尾の區別無く、たゞ格の變化としてみらるゝは「ボセシーヴ」に「s」を加ふることあるのみ、佛蘭西の言語も羅句の言語より出で、非常の瓦解をなしたるものなり、そもく英吉利言語の屬する所謂「インドゲルマン」又は「アリア」といふ言語の族は、希臘羅句、波斯印度等の古語をその古き言語となす、これらの言語に於ては驚くべく廣大なる語尾變化の組織ありて、あらゆる文法上の關係は皆「インフレクシヨンの」方法によりて示され、此語族の本質を成せり、この廣大なる語尾變化は吾人が歴史時代にて漸次瓦解に傾向し來り、終に甚きは今日の英吉利言語の如くにまでなりて、名は「インフレクシヨナル」言語といひながら、實は其語尾變化に認めたるものとなりぬ、佛蘭西語は英に比しては多少之を有すれども、さて其起源なる羅句の古語に比すべくもあらず、獨逸の言語は比較的古い形體を保存するものなり、この「イン

ネーラス」(土地)、「ヂーキース」(權利)——Chor-as, Die-usの如し、この兩語尾の起源は全く不明に屬す、「スヤ」は形容詞の幹にして「アス」と同一なりといふもあれど十分の證左はあらず、或言語にありては關係代名詞によりて「ゲニチーヴ」を示すものあれば、印歐語の「ゲニチーヴ」の語尾もかゝる經歷あるべしといふべし、これも必しもかく限りたるものにあらず、關係代名詞にて「ゲニチーヴ」を示すものは、たゞ the house which the man (家、それは人)の如く排列して、「人の家」の義を示すが如し、「アス」「スヤ」が斯の如き用法より來れりといふは必しも眞ならず、さてこれより印歐古語に於る「ゲニチーヴ」の用法のや、詳細なる説明に入らむ、「アリア」人民がこの一種の格にいかにか奇妙なる用法を與へしかを見るは頗る興味あるべし、「ゲニチーヴ」の最簡單なる用は、一の名詞自身と他の名詞との間の關係を示すにあり

「ドゲルマン」とよべる世界の開化せる人民の言語が、いかにして其廣大微妙なる「インフレクシヨンの」組織を發達せしか、又いかにして近世の言語が之を失ひしか、この最要なる問題は、本論を讀み終りて後、吾人が隘頭に掲ぐる印歐語學梗概をよまひ、悉く之を了解することをうべし、兎角英吉利國語は文法上形體の消失をみるに最好き例なり、曾てはかくの如く豊富にして、今日はいかの如く貧窮せる文法上の形體を有するもの、他の國語には見ることを得べからず、英吉利語は其曾て包被せられし無數の語尾をば、殆ど全く放棄して、やゝ單綴者の語根にも近かんとするなり、その變遷の大運動の大部分の起れるは僅にこの數世紀の間にあつたるとして、かく變遷を強めたる原因を發見せんこと難からず、もし人が外國語を習ふときは、その語に十分熟練する迄は常に其語法をわやまりて誤謬をなす、語をかたるにも十分に其文法上の形體などを活用しえざる故に、たゞ本幹のみを發音して満足するの傾向あり「ノルマン、フレンチ」人が英吉利に入り來りて「アングロ、サクソン」の語と自己の語と相混合するや、相互共に外國語を學ぶに均く、此際にて於て言語の大瓦解は發生したるものなり、この關係は讀者の既に詳悉するところ、羅句の言語が歐洲諸方に分布し、各地の方言を融

て、國語今日の「の」及「一種の」が「にて」示さるゝ用法にあたる、町の人、田舎の家、わたしのうち、などの如し、この概観は種々特別の意義に分布せられ、時には全く本意と反對の如く見ゆる意味にまで用ひらる、我國語にても、例へば「朝鮮のうれひ」(愛)といふときは、朝鮮國民自身の愛慮ともなるべけれども、また日本人が朝鮮に關して愛慮することをも意味しうべきが如し、羅國語に「チモール、ローマン、ルム」といへば、(羅馬人の畏怖)他の人民が羅馬人に對して畏怖することを意味し得べし、上に述べる「ゲニチーヴ」の二義は根本的のものにして、一方をその主觀的用法といひ、一方を客觀的用法といふ「羅馬人の畏怖」といひて、羅馬人が他の者を畏るゝならばこは主觀的なり、もしまた他の人が羅馬人を畏るゝ義ならば、羅馬人は此場合の「オブヤエクト」にしてこの「ゲニチーヴ」は客觀的に用ひられたるものなり、印歐語族の諸語に共通に發

和して作れる所謂「ローマンス」語族、例へば佛蘭西、以太利、西班牙等の言語が亦比較的その古き形体を失ひて瓦解せるも亦此理由による、蓋言語の分解的傾向は「アングロ、サクソン」の後期には既に萌芽せるものなるを、「ノルマン」の入りてより忽ち激烈に行はれ始めしなり、されど英吉利語の變遷は其度に於て他の歐羅巴の諸語にまさるのみ、舊き複雑なる文法上の形体を失ひ漸次分解的傾向に赴くことは、歐洲すべての言語に於て皆然り、さてこの言語が古く發達せし種々の文法上の形体を失ひて分解的の傾向をとる原因はいかにといふに、或學者は單に復雜なる勞力をさげんが爲めに無意識になすなりといふ、これも一の原因なるべし、されども單に勞力の輕減が言語の分解的傾向の原因なるや否やは問題なり、吾人は今茲に此解釋を與へざるべし、印歐語學の梗概をよみ、いかにしてこの語族の文法上形体の構成は發達せしか、又た瓦解せしかを論ずるにあふに及び、讀者は又た其原因の説明に接するをえむ。

第三節 古語より生ずる新語

次に言語の生長の場合にうつるべし、言語の上に新き實質が生ずることをいふなり、これに二個の主意あり、音韻轉化のために破壊されたる部分を擴充すること一、社會に發生せる新き思想及智識

見せられ、從て其最古よりありしことを講るべき「ゲニチーヴ」の用法、其他に數個あり、先づ此格を部分を示すに用ふ、「希臘人の多數」といふが如し、次に所有又は持領の義に用ふ、「ボセシーヴ」の如し、英文典に所謂「ボセシーヴ、ケー」の如し、實例「ゲニチーヴ」の一部分殊に其分布せし一部分の用法を示すにすぎざるは以上の説明のみにて明瞭なりさて次に或語族殊に希臘語族に於ては此格は又た動詞と共に用ひらる、特に事物に觸接し、若くは之をぬらひ、目的とする意の動詞に用ひらる、蓋この用法は第一二次的のものにして、希臘語に於ては、其以前他に格の別種ありて示せし種々の意が、その格の形の消滅せしによりて、「ゲニチーヴ」に移りたるものなるべし、希臘語のみならず、前に説明せし獨逸言語動詞の支配する格の如きも此種の歴史より來れるならむ、森格(「アブラチ

の需要に應ずること一、これなり、普通言語に新き分子を加ふるこの目的は、新き智識の需要に相應して、いひあらはしを擴張し及改正するによりてなり、されどこれらの目的は敢て言語に變化をなさいるも之を達することを待べし、その一部は言語の古き本質を新き文章法の下に結合すること、即古き語を新き文章に綴ることによりて成さる同一の形體の語を同一の形體の文章の上に綴るも、時代により人智の進歩に供ひ、その意味を變じゆくことは前に吾人の見たる所なりき、たとへば「太陽は光と熱とを地上に撒布しつゝのぼる」といふ文章をどれ、かゝるいひあらはしは吾人の言語と智識とが極めて幼稚なりし時代よりいへば、今日なほいはるゝものなれども、さて古今により其上にあらはるゝ意味はいかに異りたるものぞ、古の賢人と今日の愚人とを比較しても、この相違はあるなり、まづ「のぼる」といふ一語にも古人は正しく太陽が下より上にゆくものと思ふ、今日は愚人もなほ、其たゞ吾人が眼に映ずるところをいふのみにして、實際「のぼる」の義にはあらざるをしれり、「のぼる」は其真正の意味を有せざりしなり、次に光と熱との作用が分子運動の結果なることを知りたるは極めて近き時にあり、今日とその以前

「アブラ」——Ablative——) (より、から) の形の消滅せし獨逸言語に於て、「ゲニチーヴ」にて之を示すは既に例にて示したりき、或場合に於ては、「ゲニチーヴ」は、事物の或一部分若くはその或性質をとり観察するを示す動詞に用ひ、其事物全体に關係する時には用ひざることあり、こは兩個の名詞の間の部分的の關係を示す「希臘人の多分」といふが如き用法と其意味一なり、普通に「ゲニチーヴ」が名詞に於る關係は、又ほ「アックスアチーヴ」が動詞に於る關係に均しといふ、こは共にその名詞の附せられたる語の義を限定するの一なるをいふなり、この點に於て「ゲニチーヴ」は最形容詞に近き用をなすや明なり、「しろたび」(白足袋)と「しろのたび」と、一方は「しろ」が形容詞に用ひられ、一方は名詞に用ひられて「ゲニチーヴ」の体をどれど意味は共に同一なり、尤も兩者は多少其意味を異にして用ひらるゝとあり、學童の語に、「くろのたま」(黒球)

と同一の語の上に示さる、意味の相違は此の如く大なり、この種の變遷はたへず言語の上に行はれ、かくして社會の人民は常に言語の古き組織の下に、新しき智識の發達を行ひつゝあるなり。古き語の下に新しき智識を寓することのいかに大なるかは、吾人が語の有する意味の甚き變化を有するにてもしらるべし、もし日用の語が恰も科學的術語の如く一定の定義の下に立ち、嚴格に同一義の事物の外あらはしえざるやうのものならんには、これ到底吾人が日用の便宜に供ふこと能はざるべし、されども曾て無意識に發達せし語は幸にして無意識に止り、一の點を示さずして、一の範圍を示し、しかもその範圍は極めて不規則に、不整に、自由に變化しうべき範圍を示す、曾て英國の一字書の作者は、「グード」(善良)の一語に四十個の異りたる意味を發見せりといふ、外國語を學ぶ人が、その字書をさぐるるとき、一語に多くの意義又は譯語ありて、その中より己の目的に適合する者を探ふに困しむなり、されどこは其學生自身の國語に於ても亦然ることにして、外國人が我語を學ぶときは又同様の困難に遭遇するなり、この一語の下に多く意味の變化の寓せらるゝこと最甚しきは支那語にして、文字の上こそ分て、實際の聲音は全く同一なる異義の語最多くして撰擇に困しむ、以上

と「ゲニチーヴ」を用ひて「ば、單に黒色の球のことなれど、「くろたま」といへば、特に成績の不良を示す記號を意味するが如し、以上は「ゲニチーヴ」格が、根本的なる用法の大略なり、印歐諸語に於る其用法の詳説は、各國語文章法の説明にまたざる可らざること既に論せるが如し。附け加へて世界諸語の「ゲニチーヴ」の小談をなすべし「ゲニチーヴ」を示す形が言語の始源より存在せしものにあらざることば、今日なほこれを欠く語あるにても知らるべし、「タイツク」「マンイ」の如きはたゞ双々語を列して此意を示すのみ、別にこの形態なく、又助語を用ふることも無し、その特別の形態を有するも否とに論無く、大凡「ゲニチーヴ」の意味にて二個の名詞が結合せらるゝとき、其順序の如何は語によりて一ならず、これ其民族が心的作用發達の狀によるなり、印歐語にありては兩名詞の位置によりて「ゲ

二個の點は其に外形を變化せずして意味を増殖しゆく方法にして、こは既に前にも論じたることあり。

第四節 外國語の輸入

さてこれより、一の國語の上に實際 新しき語の生じて、その語の生長をなすことを述べむとす、これに大約四個の道筋あり、第一は外國語の輸入せらるゝこと、第二は復合語(「コムパウンド」)を形成すること、第三は一の語を二個或は以上に分つこと、第四は或品詞を他の品詞に轉用すること、これなり、以下逐次に説明せむ。

第一 外國語の輸入若くは借用、世界中の言語はいかなるものも、その他の言語と相接して、互に他の語の幾分を輸入せざるものなし、最普通に入り來るものは、外國にありて自國に無き物品の名稱、制度風俗上の名稱にして、之を自國の語に譯さんよりも、寧ろ原名の儘によぶ方途に便利なること常にあればなり、「ランブ」といひ「シヤッポ」といひ、「ハンケチ」といひ、「ハット」(牛肉の膏)といひ、「ビール」といふが如し、漢名の我國日常の用をなすものはいふに及ばず、英吉利國語の如きは世界上の殆ど言語と接するが故に、その「ツオカブリー」の上には殆どあらゆる世界上言語より借用せるところありとは、英國學者の常に誇るところなり、歐羅巴の諸種の言

「ニチーヴ」の主観的と客観的とが區別せられたるを見るべし、例へば國語にては均しく、「ソクラテスの愛」といひて、主客兩觀の義に用ひらるれど、試に羅句語をどれば、主観的即「ソクラテス」が感じたる愛「と」いふことを示すには、「ゲニチーヴ」なる「ソクラテス」を「愛」の前に置きて、「ソクラテス、アモル」といひ、客観的即「他の人がソクラテスに對して感じたる愛」を示すには、之を反し、「愛」を前に置き、「アモル、ソクラテス」といふ。—— Subjective Genitive: Socratis amor; Objective G: Amor Socratis ——

この二個の異りたる考へが、民族に於て「ゲニチーヴ」の位置に異なる根本的原理をなす、普通に「ゲニチーヴ」の用は主観的なるものなるが故に、此點にて觀察すれば、印歐語にては「ゲニチーヴ」は、其支配する名詞の前に立つもの、「セミツ」語にては之に反對にして、「ゲニチーヴ」は常に支配する名詞に後るゝなり、

語を通じて最廣く借用せらるゝは、古代の二大開化國たる希臘及羅馬の語なり、卓越せる開化の人民が新き制度新き智識など、供ひてその言語は入り來る、今日「ケルト」「スラボニア」「ゲルマン」の諸語族一として羅句語を有せざるもの無し、英吉利語及「ロイヤル」の諸語の如き、殆ど羅句の子孫たるもの、如きは措ていはず、今日の獨逸語にも極めて多くの羅句的語あり、最古の「アングロ、サクソン」中にも既に少なからず保存せられたる、羅句の文化は永く歐洲各國文明の中心となり起源となり、その言語は中世學問社會の言語たりしを思は、かくの如き現象は理の當然といふべし、歐羅巴に於ては希臘羅句が此の如き地位を占む、他の地方にては又たこの如き地位の他の言語あり、印度に於ては「サンスクリット」語は永く文學的の用語たりし故に、今日印度の開化せる言語は皆「サンスクリット」語を以て充滿すること、なほ羅句の歐洲諸國の語に於るが如し、波斯人は又た永く亞拉比亞の開化の恩恵に浴しければ、それより多くの語をえ、近世の波斯人は波斯語をかたるといはんよりも、寧ろ亞拉比亞語をかたるといふべし、日本語が支那語に於る關係も亦之と異なること無し、今日の英吉利語の「ヴォカブラリー」を檢するに殆ど七分の五は羅句的の語にして、殘餘七分の二は本來の獨逸的語な

このところに又た二個の異りたる觀察點あり、即かく「ゲニチーヴ」の地位の異なることは、所謂「アットリビエート」と「アレチケート」の差あるものなり、形容詞に二様の區別ありて、名詞の前に立ち之に附屬するときは、形容的「アットリビエート」の義を有し、Attributive — 之に反し、形容詞が名詞の後に立つときは、斷定的の義「アレチケート」—— Pre-dicative — を有す、たゞは、「いろくろ」(色黒)の「いろくろ」は、「色は黒し」の義にて斷定的の完全なる一文を意味し、「くろいろ」(黒色)と「いろくろ」の義にて形容的に用ひらるゝなり、名詞の「ゲニチーヴ」と形容詞との關係は前に之をのべたり、其位置に於る關係亦正に此の如く、兩個の名詞が相並列するは三個の文法上の考への發達する起源なり、三個とは、「ゲニチーヴ」「アットリビエート」(形容詞)、「アレチケート」これなり、されば形容詞と「ゲニチーヴ」とは同位置をど

り、他の國語の混ざるものはたゞ一千若くは二千にすぎず、勿論日用語の比例はかくの如くにわらず、吾人が通用の語は大抵本來の獨逸的語なればなり、されど支那語の上には、羅句的語は大なる位置を有す、例へば「ミルトン」に用ひられし語の中三分之二強は羅句的なり、但一頁の上に用ひられし數のみにて統計すれば羅句的のものは百中十乃至十五にすぎず、英歐語中羅句的語の七分の五はたゞ學問上の用をなすのみなりといふ。

借語には其種類及範圍に差違あり、一語より他國にとらるゝ語の最も容易にとらるゝは、物体の名及その性質の名にして、言更ふれば名詞及形容詞これなり、動詞に至ては最少く、種々の「パーチクル」は殆どこれ無しといふべく、文法上の形體たる「デクレンション」「コンジュンクション」の前綴及語尾は就中最僅少なり、語に於ては殆ど羅句化されたる英吉利語も其文法は殆ど全く純粹なり、文章の上に思想を結合し構成するに用ふる用語は大抵皆「アングロ、サクソン」來の者なり、この點よりして英吉利語はなほ純然たる獨逸語族にあり。

第五節 結合語の發達

第二、言語の上に語の新き形の生じて之を富ます第二の方法

るを常とし、或語にては名詞に先立ち、或語にては之に後る、「セミツ」語は既に形容詞を名詞の前におくものなるをいへり、「マレイ」語の如きも亦然り、此地方に「オーラン、ウータン」なる類人猿あり、この語は「人、樹」にて樹上の人の義なり、「グミン、ベサル」は「山大」の如く排列されて、大なる山の義たり、「ベサル、グミン」といへば、「大山」にて、「山が大なり」の意となる、我國語の如きは之に反して、形容詞又は「ゲニチーヴ」を絶対的に名詞の前に置くなり、名詞の「ゲニチーヴ」と形容詞と合同することは極めて見易きことにして、我國語に「金の時計」といふとき、「金の」は之を「金」なる名詞の「ゲニチーヴ」と見るよりも、寧ろ「金の」全体を「の」形容詞と見ること、なほ英の「ゴールデン」に於るが如くするの適切なるにても知らるべし、なほ著き例は、「ピンゾースタン」の語にありては、「ゲニチーヴ」は形容詞の如く名詞に従うて變化す

は即結合(ユムボツシオン)にして、言語の歴史の上に最必要なる現象の一なり、「やまがは」(山河)は山と河とはあらずして、山中にある河なり、「朝起き」は「朝」と「起」きることにはあらずして、朝起ること、「ふなひと」は舟中の人なり、「ふばこ」は文を入れたる箱なり、兩個の語の結合せらるゝ第一の外形徴候は聲調(「アクセント」)の一致するにありて、例へば山河の如きも、やま、かは、と聲調を別にすれば二個の体を意味して結合語とはならず、かくの如きは結合語の最簡單なるものなれ共、言語によりて之を形に度あり、英語及國語の如きは最此方法を用ひ、「サンスクリット」語に至ては殆ど之を濫用せり、希臘羅旬及獨逸語族は皆之を形にのみたり、佛蘭西語は之に反して、殆どかゝる結合語を形を自由を失へり、英吉利語も獨逸語に比しては頗る少きなり、結合法は實に「インドゲルマン」語の廣大なる「インフレクシオン」組織の起る精神にして、獨立せる兩語が相結合するや、之を用ふる人は容易く其本義を忘れ、一方は他の從屬的形態となり音韻の轉化其上にはたらし、かくて文法上の形態の例へば諸種の語尾の如きを形を順序は、前の諸篇に之をときたれば今又永くこゝに止るを要せず、たいなほ少く反覆して讀者の注意を喚起すべし、英吉利語に於て、種々の品詞に屬する

といふ。

格の説明を進むるに先立ち、印歐語には果していかほどの格なるものが存在せしやをいはざるべからず、歐洲二三の言語を學びたる者は、近世に近くに従ひ其格の消滅するを注意せしむるべし、但こゝに格といふは其用語に注意せざるべからず、文章上に於る名詞の位置の種類は種々あるべく、その種々は、或は名詞自身の形により、或は前置詞の如き助語により、或は單に變列するによりて示さるべし、今こゝに格の増減などいふは特に第一の場合をいふ、即名詞が其自身の形態の變化によりて自己が文章上に於る種々の位置を示す、その變化の多きを格多しといひ、少きを格少しといふなり、我國語の名詞の如きは、此點よりいへば全く格といふ性質を有せず、悉く助語(てには)によりて示さるものなり、近世の英吉利言語の如きに至ては、印歐古今の語中最格の形の少きものにして、文章

語尾がもと獨立の語より、結合の法則によりて來れるものなる事は讀者のしるところなり、形容詞に用ふる一の語尾「フル」(full, full)は、獨逸の「フォル」にあたり明に「フル」(充足)なる形容詞より來り、その反對なる「レス」(less)は、「ルース」(寛柔)なる形容詞より來りて否定を意味し、比較級の「レッシ」(より少き)にはあらざることを、一たび形容詞の語尾となり、次で又副詞の語尾と迄なれる「ライ」(ly)は「ラメク」(如くの意)なる形容詞より發達せるものなること、佛蘭西の副詞の語尾たる「マン」、英に入りて「メント」となれるものは、羅旬の脫格の「メンテ」(心を以ての義)より來ること、抽象名詞の語尾となれる「シイプ」は、獨逸の「シヤフト」にあたり「シエーブ」(「形」の義)より來ること、これらは皆既に説明したりき、其他「ホルサム」の「サム」は「セーム」の語源より來りて、同く又は如くの義たり、「チングダム」「ウイスタム」などの「ダム」は獨逸の「ケーニクツーム」の「ツーム」にあたり「ゾーム」より來り運命を意味するの語たり、又た動詞にありては、過去の語尾たる「d」又は「ed」は、「ゼー」(爲す)動詞の過去「ヂヤ」(did)と同く、「ヒッス」語の「テツム」より來る、これらは皆英吉利語尾のものも獨立語より來れるを示して餘あり、これらの詳細の説明はなほ、頭に印歐



の主たるべき「ノミナチーヴ」が語幹又は底の儘あらはるゝを除きては、「S」を以て語尾に加ふる所謂「ボセシーヴ」の「格」といふべきのみ「……」に、まて「如き」ダチーヴ（與格）は「ツ」なる前置詞にて示し、「……」の如き「アックサチーヴ」（目的格）は、「ノミナチーヴ」と異なることなく、人を呼びかくる「ヴオカチーヴ」亦同じ、英吉利文法には皆これらの語を用ふれども、それは單に文法上名詞の位置を示す便宜にして、實際語尾の變化によりて示す格と稱すべき者は「ボセシーヴ」の一あるのみ、佛蘭西言語に至りては此解體は一段甚く、「ボセシーヴ」も「ド」又は「デ」なる前置詞にて示し、適義の格と稱すべきものは實に佛蘭西文典の上に、其跡をたてることなほ我國語と異なることなし、近世の獨逸語はすべての點にて多少印歐語の古き形を保存するものなるが、格に於ても亦然り、英語を出で、獨逸語に入れば既に多く新き名詞

語概をのぶる時に至てなほ十分になすべし、英吉利語のみならず、印歐言語の諸種の語尾は、その族中の各語を通じ古今に亘りて殆ど悉く其起源を獨立の語に有し、結合の法則によりて文法の形體子となれるものなり、これ吾人が言語學の創建者たる「フランツ、ポツプ」によりて始めて十分の証明を以て設立せられたる原理にして、之を「アックルチーシヨン」の法則といふ、漆着法の義なり—— Principles of agglutination——「インドゲルマン」言語發育の根本的法則たるこの結合の原理は、その事物に向て新き名稱を形ると、文法上の新き形體を形るとを問はず、その成立は頗る徐々にして、外國より新語を輸入する如く突然に出來るものにあらず、殊にこの語に於るが如く、この法則によりて緻密の組織を發達するなどに於ては、至大の年月を要したるや争ふ可らず、たゞその結合によりて一の形體の分子を生じ、其起源の忘れらるゝや、これは忽ち至大の範圍に適用をひろげ、吾人が類同の精神によりて、忽ち一般の通用をうるに至るなり。

第六節 一語の分裂及品詞の轉用

第三、一語が二個若くは其以上に分れて用ひらるゝことは、又た言語の上に新しき實質を増す、これは寧ろ第二の特別の場合とも

の變化法に接すべし、先づ此語にては、英語の所謂「ボセシーヴ」は既に「ボセシーヴ」にあらずして、一層廣き汚用ある「ゲニチーヴ」に進化し、その上に「ダチーヴ」（與格）「アックサチーヴ」の二格新く發生し來る、「ノミナチーヴ」と「ヴオカチーヴ」とは共に均くして變化無きものなること英吉利語と同じ、希臘語は格の點にて印歐古語中最解體せるものにして、大約獨逸言語とおなじ、羅甸言語はなほ多くの格を保存す、即「ノミナチーヴ」が特別の語尾を有するほか、「ヴオカチーヴ」（呼格）は「ノミナチーヴ」と異りたる語尾を有し、なほ其外に一の新き格あり、之を「アブラチーヴ」（奪格）といひ、「……」カラ、ヨリ、ヲ以テなど、英にては「バイ」「ウイズ」「フロム」などの前置詞にて示すもの之にあたる、— Ablative—希臘及羅甸語名詞變化法は既に其大要を例示したることありしが、今又た羅甸の一例を左に示す、

見らるべし、當初同一なりし語が數多に分れて發達し、各特立の生活爲す、たとへば「アングロ、サクソン」語の「アン」は、近世英吉利語に於て一方數詞の「アン」となり、一方冠詞の「アン」及「エ」となる、「オフ」は一方副詞の「オフ」（去ること）、一方「オフ」（前置詞）に分達す、又た英の「オールムー」（又は）及「アス」は、獨逸の「アルズ」及「アルス」と均く同一起源の語より出でたり、「フオア」（前に）、及前置詞の「フオア」は、又た獨逸の「フオア」「フエール」「フエル」などの如く同一起源なり、「スルー」及「ソルー」は共に同一起源なり、又た音は變ぜざるも聲調（アクセント）を異にして意味を分つもあり、我國語に於ても此種のもの多くあるべし、されど語學說の發達せざる今日、未だ十分の例を與ふること能はず、同音語を「アクセント」にて分つことは既に述べ、「かき」（柿、蠟、等の如き）前に例を與へたり、されどこれらは偶然に同音なる語を區別せんため後に發達せしなるべく、當初同一語なりしものが「アクセント」の相違によりて意味を異にするとは、その義異れり。

第四、最後に言語の實質を増殖するにほ他の一の方法あり、一の品詞に用ふることにして、これは主として語尾の作用に依頼するものなれば、これは第二の結合法則に關聯せるものといふべきが、言

Dominus.  
Sing.

Nom.	Dominus	a master
Gen.	Domini	of a master (or's)
Dat.	Domino	to or for
Acc.	Dominum	a master
Voc.	Domine	O master
Abl.	Domino	by, with or from

Plural.

Nom.	Domini	masters
Gen.	Dominorum	of masters
Dat.	Dominiis	to or for
Acc.	Dominos	masters
Voc.	Domini	O masters
Abl.	Dominiis	by, with, or from

印歐語族中最多くの格の形の保存せらるゝは、語族中最古き形を有する印度の「サンスクリット」言語にして、實に入個の多きあり、この入個の格は、印歐古代の人民が名詞の文章上に於る關係を識別して發達せしむるに於りて、該民族が緻密なる心理的現象は此上にもあらはれたり、羅言言語に於て讀者の既知りたる格の

語發達の上には又た頗る重要の原理たり、されども現在に存する「インフレクション」が悉くかく類同せらるゝものにはあらず、「ヒイ」の「ヒム」「セイ」の「セム」「ヤム」の「ヤム」「キツ」の「グーツ」「シット」の「サット」「ツル」の「ツル」の如きは皆死滅せる「インフレクション」の遺物たるにすぎずして、類同せらるゝこと無し、たゞ「s」を加へて復數及「ゲニチヴ」を示すが如き方法は、あらゆる新き名詞に適用せらるゝ、その他皆同一の原理なり、同一の「テレグラフ」よりして、「テレグラフフェスト」(電信師)、「テレグラフス」(電信)、「テレグラフド」(分辭)、「ランクラフイング」(分辭及不定法)などを生ず、動詞と名詞となり、次で形容詞に發達して「テレグラフィック」を形する、又た冠詞を加へて形容詞を抽象名詞となし、或は「チッス」なる語尾を加へて同く用ふ、「ゼ、グロッド」又は「グロッドチッス」(善)の如し、又た「リー」なる語尾によりて形容詞を副詞に變ず「テレグラフィカリー」の如し、動詞よりも亦た變化を生ず、動詞の「テレグラフ」よりして、「テレグラフファー」「テレグラフィスト」「テレグラフィ」等の如し、又た一方には形容詞及名詞を動詞となす方法あり、「ハード」「かたき」なる形容詞より、「ハーツン」(かためる)なる動詞を作り、「レヴォリューション」(革命)より「レヴォリ

形は六個、「ノミナチヴ」(主)「ゲニチヴ」(領)「ダーチヴ」(與)「アックサチヴ」(賓)「ウオカチヴ」(呼)及「アブラチヴ」(奪)これ等「サンスクリット」語にては此外には二個の形を區別す、「インストルメンタル」及「ロカチヴ」これなり、「インストルメンタル」—「Instrumental Case」—は、機械格ともいふべし、「……を以て……する」の如き「……を以て……する機械的作用を示す」「ロカチヴ」—「Locative」—とは場所を示す格にして、「……に」「……の場所にて」の意を示す、今左に「サンスクリット」の八格の一例を示し、一々之に大畧我てにはの相當する者をあてはむべし、此語にては「デュアル」(二個數)を區別すること希臘語に於るが如し。

「エーシヨナイズ」なる動詞を形成す、この如き方法は、苟も語尾變化をなすすべての國語に於て、其の生音を助くる至重なる原因をなすなり、以上の諸例に相當する例をば國語の中より發見せんことも亦頗る容易なり、近世の英吉利言語は分解的の極點に近きつゝ、なほ一の名詞を、別に變遷の外形なくして、直に他の品詞に適用する點に於て、十分に「インフレクション」言語の本質を存せり、英人は殆ど自由に名詞より動詞を形する、例へば「ヘッド」(頭)なる名詞を用ひ、「軍隊をヘッドす」といひ、「フット」(足)より「靴下をフットす」といひ、「アイ」(眼)より「敵をアイす」といひ、其他數限無くあり、蓋し「インドゲルマン」言語文法上にはあらはるゝすべての所謂品詞は、悉く名詞及動詞より發達せしものなることは、印歐語學梗概に於て讀者の了解しうる所とならむ。

第七節 言語國語及方言

數章の永きに亘りたる言語生命の説明もこゝに終尾となりぬ、大凡人生言語は其當初いかにして生ぜしものか、言語起源の説明は、その本質と共に篇を改めて説く所あるべし、たゞ篇を終るに望みて言語、國語、及方言の用語を少く説明せむ、一國語とは一國を形成する社會人民の言語をいひ、英語に「エ、ランゲージ」といふ、時に

Vocalische Declination

„deva”—God.

		Singular	Dual	Plural
Nom.	は、が	devas	devau	devās
Voc.	よ	deva		
Acc.	を	devam	devābhyām	devān
Instr.	を以て	devena		
Dat.	へ	devāya	devat.	devēbhyas
Gen.	の	devat.		
Abl.	から、より	devasya	devayos	devānām
Loc.	に、に於て	deve		

多くの變化を悉く表示せん必要もなかるべし、呼格が語幹のまゝに存するものなり、我「てには」を以てはむれば

單に言語といふことあり、英語に一般に「ランゲージ」といへば、人生一般の言語といふことを抽象的に意味するなり、然るに一國中の言語には種々の區別あり、地方によりて各其性質を異にす、同一の日本語にても、東京の言語、關西の言語、東北の言語皆それと特質あり、一般に一國語といへば、其國の中樞たる地方、日本ならば東京の言語を以て之を代表せしむ、其他京といひ大坂といひ關西といひ東北といひ諸地方の言語は、皆之を其國語中の方言言若くは方言といふ「チャレント」これなり、但「ランゲージ」と「ダイヤレント」と兩名稱の區分は國語に、國語と方言といふやうよりは多少廣義にして、例へば、英吉利、和蘭、獨逸等の語は皆「ゲルマン」と稱する「英ランゲージ」中の「チャレント」なりといふことあり、なほ廣くしては、「インドゲルマン」語を「エ、ランゲージ」と見做し、希臘羅馬を始め其中に屬する大言語を皆その「チャレント」なりといふことあり、「エ、ランゲージ」と「チャレント」とは畢竟するに比較的名稱たるにすぎず、我に國語と方言とを區別するとは多少異れり、又た言語族とは原名「ファミリー」にして、系統的祖先を一にする諸の言語又は國語を總稱するなり、例へば「インドゲルマン」語族の如し、尤もこの名稱も亦た比較的のものたるにすぎず、英吉利、和蘭、獨

大畧此の如し、印歐言語の始源にあたりてはかくの如く巨細に區別されて、各異りたる形を示せし多くの格は、時代を経るに従ひ漸次減少し來り、終に今日の英佛語の如きに至ては殆ど所謂格といふ性質をも失ふに至りぬ、その格の一個二個づゝ消滅するや、たゞその形は消滅したりとも、その文章上の關係は依然として存するものなれば、之を示すために、消滅したる格の形に代るべき他の方法無るべからず、その方法は二個ありて、一は消滅せし格の用を、他のなほ保存せらるゝ格の上に附すること、一は他の助語の發達によりて之を示すこと是なり、當初は此兩者相俟て行はれしが、新世の諸語に至り分解的の風潮盛となり、助語の發達が専ら行けるに至り、英佛語の如き結果とはなりぬ、「サンスクリット」と羅匈語とを比較せよ、梵語にては「……を以て」又は英の「ウイス」、「バイ」にあたる「インストルメンタル」格あり、

逸等を含むして「ゲルマン」語族といふことあるなり、今日世界言語の系統的研究未だ十分ならざるが故に、語族の數は一定せず、兎角今日世界の言語は、多くの語族、多數の國語、及無數の方言に分るゝこと明瞭なれど、さて人生言語の起源は果して始よりかく無數の方言に分布せしものか、又は統一せる一部より種々に分布せしか、この深遠なる問題も亦た言語起源説の篇に多少の説明を得きなり。

羅甸にては之を失ひたるために、その用を「アブラチーツ」(奪格)の上に加へ、「……より、から」の如き取り出す意の外に、「……を以て」の意にも之を用ひ始めたり、又梵語には「ロカチーツ」格ありて場所を示す、羅甸語にては之を缺きたるが、其代りにいかなる方法をとりしかといふに、此場合には前と異りて、第二の方法を用ひ、場所を示す助語の發達をなせり、例へば「イン」——「ゴ」の如きものにして、英の「イン」「オン」などの前置詞にあたる、吾人が前に獨逸語及希臘語などの、動詞に支配せらるる「ゲニチーツ」格の用法をときし際、その本義以外に用ひらるることを説明して、他の以前存在せし格の消滅せしにより、其用の「ゲニチーツ」の上に移りたる者なることをいひたり、こゝに於て其意味は愈々明瞭となりしならむ。

さて印歐語格の發達の歴史にたちかへらむ、「ノミナチーツ」「アックスチーツ」「

## 第十一篇 言語の分布

### 第一章 世界言語の分類

#### 第一節 總論

上は大和嶋根の神の言草より下は「ホッテントット」の蠻語に至るまで、東西を通じ南北に亘り地球上人類あるところ言語あらざるは無し、人生の深秘をわばき天地の秘密を記載する希臘羅甸の聖語より「ホッテントット」の蠻言に至る間、人生言語の種類亦限無し、細を結び枝を折りて彼此の意味を交換するが如きものは暫く措き、聲音に意味を與へて思想を表明するもの均くこれ言語なれ共、我習はざる言語を聞きてはこれ恰も鳥の歌ひ獸の吠るにひとし、しかもそれを語る人民はこれを用て交通の機關となし社會の結合を形ること亦我に異らず、或は數百里數千里の山河を通じて同一種の言語をかたる人民あれば、或は一葦水を隔て、全くその語を異にするものあり、ひとしく大和敷嶋の言の葉なれども、東北の人と西南の人と相對してかたらしめばいかに笑ふべきものならむ、微細なる地方言までを區別せば世界上言語の種類は到底枚舉に遑あらざらむ、暫くその最主要なる大別を爲し、例へば日本國語英吉利國語の如きを單に一の語と見

オカチーツ」の三者最早發達し、之に次で「ゲニチーツ」生れき「ロカチーツ」及「ダ」第三に發達せしは、「ロカチーツ」及「ダ」チーツ」(與格)の二格なるべし、「ロカチーツ」は假に地位格と譯すべし、兩者は其形體最よく相類似し、地位格の語尾は「i」なり、與格の語尾は「a」なり、前例「サ」ンスクリット」地位格の語尾が「e」なりしは、幹の「o」と語尾の「i」の相合したるに由る、或語にありては兩格は屢合一し、殊に希臘語にては全く相合して「ダーチ」の「i」の用をなす、語幹の子音に終り、若くは「i」又は「u」に終るすべての名詞は、「ダーチーツ」即「ロカチーツ」なり、主賓呼領の前に示せし四格をのぞきては、地位格及與格は最多く諸語に共通して發見せらるるに、其發達の時代の古きを知るべく、其他形體及用法の上よりいふも其決して新きものに非るをしりべし、地位格の原意が「或場所に於て」——in a place——の義なりしこと

て計算するも、實に二百に近き多數に上るといふ。

かくの如き多數の言語は一として相均きはあらざれどもさりとて宇宙の事は決して亂離なる者にあらず、一見しては何の類似も無き如く見ゆるものも、仔細に之を檢するときは種々の點に於て相類似するところありて決して支離滅裂なるものにはあらず、是に於てか、言語の分類といふことの起るなり、その起源の如きは暫く之を措きかく迄限無き言語をその類似の點より觀察して數個の種類に區別するを言語の分類といふ、かくの如く言語を分類するは世界上人類が言語につき大體の明なる觀念を得るに最必要なる方法なり、古來學者が言語を分類する方法數多あり、言語の智識未だ進まざりしときには其分類の方法も極めて粗雑なりしが世界上言語の智識進むに従ひ、分類も亦漸次巨細に亘り來れり、而してその分類の方法に至りても、類似をみる標準の如何によりて種々に異れり、或は人種の如何により人類學の助けによりて分ち、或は文章形態の上心理學の力によりて分ち、さてはまた各種の言語が思想を標識するため構成せらるるその構成法によりて分類するなり、今これら分類法を一々論ずるに及ばず、たい今日最多く用ひらるる分類によりて世界言語状況の大體を示し、さて後その内最重要なるものに

は又た疑ふ所無し、これよりして、地位格語尾の「i」は、羅句に於るが如き前置詞の「in」より来る、希臘の「オイコイ」、羅句の「ドミイ」(共に「家に於て」)は、正に我「家にて」英の「ハウス、イン」なりと云ふ論は起れり、G. oiko-i, I. dom-i, E. house-in—それと此説は頗る矛盾せるものなり、何とならば元來前置詞なるものは、斯語の分解的傾向により綜合的言語より分れて生じたるものにして、普通には名詞の格の語尾自身が分裂して獨立語となりたるもの、「イン」の如きも亦此種なるべし、されば前置詞を以て格の語尾を説明せんとするは、なほ子を以て父母を説かんとするに均しく、到底何の値も無きこととなるべし、そは後世に發達せし一二の格の語尾は實に前置詞より來れるもあるべきなれど、「ロカチーヴ」の如きは、かく前置詞にて説明し得べき程新きものにはあらず、支那語の構造などより推せば、地位格の語尾は、内

つきて二三の談を試むべし、この分類法は即第三種の言語構成の上より分ちたるものにして、英語に「モロカロシカル、クラシフィケイション」といふものは是なり——Morphological Classification——、世界上言語分布の巨細、即二百有餘の國語の名稱分布は之を龍頭に表示せんとす。

第二節 構成的分類

世界の言語を其構成の上より觀察すれば大約四種に分る即左の如し

- 第一、孤立語(「アインレーチング」語)族  
Isolating, Isolierende

この種に屬する言語は其構造の最簡單なる者にして、この語の單語は其相互の上に構造の關係無く、語根をそのままに互々併列して文章を形するものなり、對岸の支那の國語は正にこの語族に屬するものなり、支那語より一例を示せば

儒們的學堂在那兒啊

(發音) ni—men—te—she—tan—tsai—na—ru—a.

(意義) 汝等の學校は何處にあるや

右の如く、「ニイ」(汝)「メン」(輩)……「ツァイ」(存在)……等の語は根本よりそのまゝに止り、いかなる場合にもその形を變じ又は他語

部中間などを示す或語若くは存在を意味する動詞の遺物の如く思はるれ共、かゝる語の痕跡は今日發見せられず、要するに地位格の母體は今日未だ明瞭ならず。與格は又た地位格の「モチファイケーション」にすぎざるべし、兩格の用法の極めて相類似せることはいふまでもなかるべく「或人に」といふ如きいひあらはしは、(又は「或人」)與格にも地位格にも解釋せらるべし、「何處を歩いてきた」(この「を」は「アックサチーヴ」にあらざることを注意すべし)の「何處を」は地位格なり、「何處に歩いてきた」又は「何處へ」といへば與格なり、この間に意味の大なる差無し、兩格が後分に歸するも亦自然の理なり、最も與格を深く研究して見るときは、印歐語の此格は其始め、或物体に對しての嗜好又は傾向を示し、こゝには「ロカチーヴ」ではやゝ縁遠き者なり、「ロカチーヴ」の正則なる用法は二個あり、第一は場所を示す、第二には一事物の起れる

のために犯さるゝこと無きなり、「ツァイ」(在)は存在を示し我國語の「あり」にあたる、我「あり」は或は其時により或は文章上の關係によりて「あり」「あれ」「ある」「あら」「ある」などに變化すれ共、支那の「ツァイ」(在)は永久「ツァイ」に止りて變化せず、この種の語は不思議にも東南亞細亞に集り、まづ支那語を始とし、安南暹羅緬甸その他前印度一般の言語はかゝる構成を爲すなり。

第二 漆着語族(「アングルチネーチヴ」語)

Agglutinative, Agglutinierende

この種の語族は孤立語族につぎて複雑なる構成をなすものなり、日本の國語は正に此語族に屬せり、この語族にありては、單語は既に其前頭又は後尾に第二次的の分子を附着し、若くは其單語自身の内部に他の分子を加へ、第二次的の分子の變化によりて種々の意味を示す、然れ共其單語の語幹自身は變ずること無く止るものなり、例は遠く、求むるに及ばず、

ひと(人)(語幹)——たち、——ども

ゆかる、ゆかす、ゆける、ゆきて等、是は羅馬字にて示す

yuk (語幹)——aru,——asujeru,——ite etc.

かくの如く語幹は常に不變に止り語尾の變化によりて意味を示すな

時を示す、與格は、第一に一の動作によりて影響せられたる人又は事物を示す、但其人又は事物は他の人又は事物を斥して間接に關係す、間接の目的格又は離隔の目的格これなり、第二には、文章にのべられたる事實に關係を有する人を示す、例へば彼は我れに(又は我がために)好迎せられたり」といふが如し、この第一の用をなす與格は諸語を通じて大抵同一の動詞に附帶して用ひらる、英語にて示せば例へば

'bending' 'inclining' 'giving' 'showering' 'speaking' 'being angry' 'well disposed'

これらに限れり、これらを通觀すれば、皆或事物に對する肉體上—精神上の嗜好若くは傾向を示せざる、その物に對する動作といふものは示さるゝこと無し、與格の第二の用法は、羅甸語に所謂感情的與格(「エシカ、ダーマ、エー」—Ethical Dative——)なるものこれに當り、例へ

り、前頭若くは内部に第二次的分子を加ふるものは他の語より例をとるべし、なほ土耳其の言語の例をみむ

dog-mak (to strike) — mak : Infinitive Sign.

dogur = striking. dogur-um = striking I. = I strike.

dogd-um = act of striking mine = I have struck.

dogur = striking = he strikes

dogdi = he stroke dogur-lar = they strike

dogdi-ler = they have struck. (lar, ler plural ending).

多様に變化しつゝも語根の「ヤク」は依然たり、かくの如き繁冗の例を列して讀者をむづらはすことをなせざるべし、漆着といふは

「アンシムニ」の直譯にして、語幹と第二次的分子とが漆にてつけたる如く着するをいふなり。

第三 彎曲語(「インシムニ」語)

—Flectional, Flectivende—

漆着語がなほ一歩進みて、たゞに第二次的分子の加はる外語幹それ自身までが變化して意味を示すものなり、世界言語構造の上にては

最高等の地位を有するものとして認めらるゝところにして、從來讀者が屢應接したりし「インドゲルマン」語族及西部亞細亞の「セミ

は

L. 'Quid mihi Celsus agit'

E. What to me Celsus does

= I with to know how Celsus is.

即「何を「セルスマ」が私になすか」、この與格の「ミ」は感情を示すた用で、第一と第二との用法の間にはさまで明瞭の區畫を最よしとす、この語の與格は他の語に比して最純粹なる者なればなり、希臘語の與格は之と大に異りて、「ロカチーヴ」を其中に混ざることを前に述べたる如く、「インスマ、デーメンマン、ケーメ」の用も亦此上加へられたれば、これによりて與格真正の用法は研究しうべからず、羅甸語に於て與格最著き一の用法は動作の目的を示すにあり、例へば

L. receptui canit.

E. to the retreat (for), he sings.

かりに「た」にて與格を示せば、「彼は退隱に歌を「ミ」、「退隱に」なる與格は「歌

ツ」人種が言語は之に屬するものなり、漆着語の例は「フィンラン」  
「タタル」、「バシク」、後印度半島、南北米の土人、南亞非利  
加土人の一部等の語之に屬す、

第四 合體語族(「インコーポレーチヴ」)

—Incorporating—

南亞米利加土人一部の語にして、「サンシキト」  
「オンシキト」などを全く合體して一聲に發音する語族なり、「ク  
キー」人種の語より著き一例を示さむ

wi-ni-taw-ti-ge-gi-na-li-skaw-lung-ta-naw-

ne-li-ti-se-sti = they will bythat that time

have nearly finished granting from a distance to thee

and me.

第三節 構成上言語相互の關係

以上は構成の上よりみたる分類の大畧なり、然れ共今日にてはなほ細き分類もあり、また以上の説明にては讀者は未だ十分各分類を了解すること能はざるべきなれど、吾人は永く此點に止ること能はず、盡天地間の事物は皆相互に關聯して截然たる區畫あるにあらず、言語に於るも亦た然にて、かくの如く大体の分類をなすといへ共、こ

「この目的にして、退隱のために」の義なり、又これに附帯して與格が動作の結果を示す、この場合には多く「ある」動詞(「エスト」と共に用ひらる)「サンスクリット」にては第一の用のみ行はるれど、其古語なる「ヴェダ」の言語を見れば第二の用法の存在を見うべし、この最後の二個の與格の用法は印歐諸語中羅甸と「サンスクリット」とのみに存在するものなるが、もと羅甸は梵より之をかりたるにもあらねば、梵語が羅甸より借りたるにもあらず、この兩者の合同は印歐語太古の文章法を示すものにして、かゝる用法は必ずや「インドゲルマン」の語族が未だ歐亞の東西に分布せざりし以前より既に識られたるものならざるべからず。

「サンスクリット」語にありては、與格の普通の用法、即間接の「オブヤエクト」を示すが如き用法は「ゲネチーヴ」にて示すことあり、或は又た「ロカチーヴ」にて示すこともあり、その「ロカチーヴ」は又た

れたゞ大体の區分に止れり、殊に或言語にては恰も分類の中間にありて何れに屬せんとも決せざるもあるなり、我日本の國語は漆着語なりといふ、しかれ共多くの點にて「フレクシヨナル」語族即歐洲の諸語の構成に類せり、「ゆかる」「行」「ゆかず」「ゆける」の如きを語尾變化なりといふも何の不可あらむ、「これを」「これは」の如き「これ」なる代名詞の幹に「は」「を」の漆着せるものなりといふ、され共之を英吉利語の「ヂス」——this——の一語にて「これを」「アックスアチーヴ、ケース」)「これは」「(「ミナチーヴ」の何れにも用うるに比せば遙に「インフレクシヨナル」にして語尾變化を能くするものにあらずや、又た英吉利語は「フレクシヨナル」若くは「インフレクシヨナル」語に屬すといふ、英吉利言語の祖先なる羅甸獨逸の古語さては、「インドゲルマン」語族の古語はまことに微妙なる「インフレクシヨナル」によりて活用し、前頭後尾の分子母音の轉化綜錯靈妙を極め人をして應接に違わらざらしむ、然れ共その靈妙なる組織は吾人が歴史時代に於て轉々瓦解し盡し、今日の英吉利語はその極に達し名は彎曲語族中でありながら實際は孤立語に近けり、言語構造上最高等なる「インフレクシヨナル」語族より最劣等なる「アインレーチング」語族に近き來れり、「インドゲルマン」語族の構造は綜合的に

「サンスクリット」にては、重に「インストルメンタル」に屬する動作の方法を示すことあり、かく諸種の格が互にその用法を交換することは注意せざるべからず、印歐語の後世或格が消滅するに従ひ、その用を他の格にゆずるに至る原理は既にこの「サンスクリット」の古語に萌芽せるものなり、すべての八格はこの語に保存せられつゝも、其用法は既に甚しく相交換せらる、たゞ其形態が互に相類似せざるために混亂を妨げり、與格の用法の中最注意すべきは所謂印歐語の不定法これなり、時として「ロカチーヴ」及「アックスアチーヴ」にもこの用法あり、前章印歐語の動詞を論ぜしとき、所謂不定法の名稱と解釋の從來あやまれるものなることをほのめかしたりき、印歐語の不定法なる奇怪の形態は、永く文法學者が疑問の燒點となり、終に之を以て動詞の「ムード」となし、その人稱數などにて變化無きより不定法と命名し始めた

は「今日船は何處に碇泊すべきか」  
支那語 今兒個在那兒灣船  
Pin-ru-ko-tsai-ni-ru-wan-tiowan  
Today will where lodge (the) ship?  
英吉利語

この間に幾何の差あらむや、さてはまた佛蘭西語を見るべし、その各語の語尾の子音を、次の語の頭の母音にひかかしめ、相連續して發音する状を見れば、それが南米の土人なる「ケルキー」の語にいかになきかをしらむ、また支那語にても漆着又は彎曲の語に近き點あり要するに、かく分類せられたる種々の言語は、互に相綜錯混雜して一方は他方に似、または一方より他方に實際移りゆくことあり、其間には決して絶對の區畫無きをしるべし。

微妙なる「インドゲルマン」の言語が綜合的に始まりて分拆的に進歩し來り、「インフレクシヨナル」の起源より「アインレーチング」に近き來れることは既にいひたりしが、さてしからばその起源の微妙なる「インフレクシヨナル」の状体はいかにして發達し來りしかと尋ねるに、これはまた「アインレーチング」の状体より「アックスアチーシヨナル」の状へて進歩し來れる者なること學者の論ずるところなり、

り、されどもこの解釋は終に誤謬たるを  
まぬがれざりき、科學的語源説の發達す  
るに及び、所謂不定法は名詞の一格にし  
て、恰と與格が示す如く、働作の目的物  
を示すものなること發明されき、この説  
明は在來の西洋文典に慣れ、「インフイニ  
チーヴ」の語に心醉せし人には頗意外の  
事なるべきなれど、吾人が言語學は終に  
此の理論の動かすべからざるを證明し  
ぬ、今こゝに印歐語の所謂不定法の發達  
を詳論すべき進められず、たゞ一二の例を  
示さん、羅句語を例とせんか、「レグレ」  
(支配する)なる不定法は、「支配」の義な  
る無形名詞「レグス」の一格たり——*lego*  
*re, regos*——「サンスクリット」の「ゾー  
ナイ」(與ふる)なる不定法は、「ダ一格ア  
ナ」なる無形名詞(與ふること)の義)の  
一格たるが如し——*donnai, dāvana*——  
この「ダーヴァナ」の與格は現に「ヴェダ」  
中に見えて、「ダーヴァナー」といひ、英  
にて「to giving」といふが如し、

希臘羅句「サンスクリット」等の諸語にその微妙なる發達をなせる動  
詞の語尾がもと獨立なる代名詞なりしものが、動詞の語幹に添着し  
次で其獨立を失ひ全く文法上の形態分子となり、なほ進みて語幹迄  
をも影響し來れり、世界の諸語の「インフレクション」が皆斯の如き  
階段によりて進み來れることは、「フランツ、ポップ」が歐洲言語につ  
きて證明せしより、今日は學者の信じて動かさるるところなり、なほ  
「インド」語が種々の「インフレクション」につきては退て説明すべき  
なれど、要するに構造上言語の區分が決して根本的絶對的のものに  
あらざるは、これらの説明にて明瞭なるべし。

第四節 系統的分類法 (上)

さて世界言語分布の狀を詳にせむには、かくの如き構成的の區分  
にては未だ十分ならず、世界言語の種類分布の狀を明にせんには系  
統的の分類にしくものあるべからず、系統的の分類とは何ぞや、今  
日にては全く異なりたりと見ゆる多くの言語も其歴史を遡るときは  
其以前同一の言語より種々に分布變遷せしものなるを知ることであり  
その分布變遷の大部分は遠く歴史以前にありて淺薄なる觀察にては  
到底その起源に溯るべくもあらぬ共、精勉なる學者の研究はよく  
これを開發するなり、東は印度波斯の高原より西は大西洋の海岸に

「人が與ふる働作にむかひてある」といふ  
如きいひざまなり、英吉利語に於て前置  
詞を用ひて不定法を示すは殊にその與格  
の性質を有するを示すものなり、「ツ」  
なる前置詞は、一方名詞の「ダ  
ーチツ」を示し、一方所謂不定法を示す、  
「ツ」(與ふる)の「キツ」が動詞  
として、見ればこは所謂不定法なれども、  
これを「與ふる」を示す、無形名詞とすれ  
ば、與格となる、羅句語に於ても亦同様  
にして、たゞ「ダーレ」は「與ふる」  
の不定法なり、この代りに「アド、ダンツ  
ム」といふ、「ダンツム」は「與ふる」義の無  
形名詞なり、「アド」は英語の「ツ」に正  
合する前置詞なり——*J. dare=ad dan*  
*num*——かく考ふれば不定法の本質は愈  
明瞭ならむ、英語に前置詞「ツ」を用ひ  
て不定法を示すは近世の發達にして、古  
代英語に於ては *en* 又は *an* を以てその語尾  
となせり、「チヨーサー」中に「ギーツ」  
「ウエイツ」の不定法あり、「アングロ、

至る迄世界の開化せる人民の大部分が語たる無数の言語が、その歴  
史的系統を一にして、曾て亞細亞の高原に羊を牧せし一塊の人民が  
言語なりしことは既に吾人が歴史を論ぜし篇に於て詳論せしところ  
なり、實に「インドゲルマン」語族の統一は、人類學歴史學地理學な  
どの未だ至らざりしところを成したる言語學の効績にして、そが研  
究はまた言語學自身が創設せらるゝ原動力なりき、世界上のあらゆ  
る言語は果して同一の根本的起源より發達せしものなりや否や、即  
言語の單一起源論と復雜起源論との如きは暫く措くも、少くとも、  
世界上言語には先づ數個の中心ありてこれらの中心より限無く分布  
せしものなること、是れ學者の假定せんと欲する處なり、然れ共か  
る中心の存在、かゝる分布の現象は遙に吾人が歴史以前にあれば  
これを探究せむこと豈容易ならむや、地球上言語の數多しといへ共  
そが發達の系統を明瞭にし、又動かす可らざる證據を以て其親族的  
關係の論斷せられたる者は、實にかの「インドゲルマン」語の一族  
に限れり、その他のものに至ては未だ模糊たる研究の内において、  
二十世紀學問の光も此點に與ふるところは實に微々たるものなり、  
たゞ學者は或は構造上の關係より或は單語の類似より或は地理上の  
關係よりして、同一起源より發達分布せし如く思はるゝ言語を集め



「サクソン」に至れば「キフアンチ」なる與格を發見すべし、——「Britanno」——さてこの與格に似たる性質を備ふる不定法は、印歐諸語に於て多く文章の主として用れ、羅甸語族、希臘語族「チウトニク」語族皆多少其用あり、英吉利語に於ては殊に廣く用ひらる、英語に不定法が文章の主として多く用ひられ始めしは其理由あることにて、第十五世紀の頃、不定法はあやまりて「インク」又は「インゲ」の語尾をとりしが、この語尾は「インク」に終る名詞及現在分詞と混同し、この混同は英語に不定法を文章の主用ふることを盛にしたるなり。

さて次に來るべき格は「アブラチーヴ」にして奪格若くは脱格と譯す、羅甸「サンスクリット」にはこれあれど、希臘語獨逸語などにも既に消滅せり、この格の原意は「或位置より脱する」の意なり、其語尾は「ゲニチーヴ」と均く「アス」なり、尤も此格を示す語尾は一個に限らずして、「ア

て、假に數個の語族を建て以て研究に資するに止れり、今これらの語族の名稱、及これに屬する言語等を示してなほ言語分布の狀を明にすべし、學者がかくたてたる各語族上の特質の如き、一々之を示さんは頗る趣味あることにして、讀者の耳目を新にすべきなれども、余り復雜に亘るべければ之を畧せん」とす。

第五節 系統的分類法 (下)

第一 「インドゲルマン」又は「アリア」語族

(1) 「ゲルマン」族

(a)ゴシック語 (b)低獨逸語 (c)高獨逸語 (d)「スカンヂナヴィア」語

(2) 「ローマンス」族

印太利、西班牙、葡萄牙、佛蘭西、「ワラシア」、「モルダヴィア」

(3) 「ギリク」族

(4) 「ベルシア」族

(5) 「インド」族

(6) 「アルメニア」及「アルバニア」族

第二 「ウラル、アルタイク」語族—「Ural-altaic Languages」—

「ト」 「ゾハス」等あり、羅甸にて「アット」の「t」は「d」に變ぜり、羅甸には「ツス」の語尾もあり、希臘語には此格の遺影あり、「チウトニク」語を検するときは、その文學的時代にありては「アブラチーヴ」は全く其痕跡を止むる事無し、蓋或は此語はに始より全く此格を有せざりしものならむ、さればかゝる格の考へが印歐語分布の以前より此人民中にありしといふことは、やゝ考へ難きところなるべし、たゞそのなほ頗る古きものなることは、羅甸と波斯古語「ゼンド」が此格の同形を有し、他方には希臘と「サンスクリット」などが固形を有するにてもしらるべし。

少く脱格の用法を考ふべし、もと場所より出ることを示したるなれば、轉じて人又は事物が生ぜし起源を示すに用ひられき、羅甸語にては此格によりてきた「イノストルメント」を示したること既にのべたり、「……を以て」「……によりて」の類これなり、從て動作の生活せ

(1)「フィンノ、フンガリアン」族 (2)「サモイド」族 (3)「トルコ」及「タルタル」族 (4)「モンゴル」族 (5)「チニークス」族

我日本國語も亦此語族として取扱はる。

第三 單綴語族—「Monosyllabic Languages」—

支那、安南、緬甸、西藏、印度全部、この語族の特質は其單語が單綴にして語根の時代に止るにあり、然れ共支那の單語は果して悉く單綴のもののみなるや否やはなほ研究の中にあるなり。

第四 南洋語族

マレイ、ポリネシア、メラネシア、等の語なり、「オーストラリア」「パプア」の語は「マレイ」。「ポリネシア」の語に關係なけれ共暫くこの中に分類す、此語族中最著名なるは瓜哇の「カワイ」と稱する方言なり。

第五 「ドラヴィヂア」語族—「Dravidian Languages」—

南印度即「アッカマ」半島、「セイロン」島等、

第六 「セミック」語族—「Semitic Family」—

亞細亞の西南部にして「ハンノツ」 「シリア」 「アラビヤ」の言語是なり、「セミック」人種は歴史上に重要な地位を

る器械たる管事者を示す、但この間に多少の區別はありて管事者には「アツア」なる前置詞を用へり、又た働きの器械とこの方法との間には確たる區別無きよりして、脱格は又た原働作の方法を示す、「こぶしを以て打つ」といふは器械なれど、「はげしさを以て打つ」といふは方法なり、羅甸語にありてはこの脱格の用は主として「インストリウメント」の上に来り、或位置よりの運動を示すが如き時には前置詞を用ふるを常とす、脱格の最著き用法はその比較を示すことなり、即例へば英語に「ザン」、吾人に「ヨリ」を以て示すものを此格にて示すなり、羅甸を例とすれば、その「クアム」(「より」の義)なる前置詞を用ふるときは其後の名詞は「ハニナチーツ」を用ひ、この前置詞を略するときは即脱格を用ふ、かゝる前置詞は後の發達なれば脱格を用ふるが古き形なり、たゞしは

“Marcus quam Quintus sapientior est.”

有し、或は宗教の上或は軍事の上或は通商の上皆貴重なる事業あるは又いふに及ばず、耶蘇、回教の二大宗教は此人種によりて創開せられ、「フェニシア」人は古代通商の先達たり開化の中心たり、「サラセン」の軍は曾て歐洲の大陸を風靡せり、殊に其他の歐羅巴に接するを以て、歐洲の學者がこの語の研究に力を費すこと多年なれ共、その語の性質元來研究に困難にして今日まで未だ十分の結果あらず、この語族の性質に最奇異なることは所謂語根の「トリソテラリテイ」——trilaterality——にして、すべての語は三個の不變なる子音を有し、種々の形態は他の母音の變化によりて形なることなり、例へば「qat」なる三個の子音連れば「殺す」といふ原意を形り、他の母音變化して種々の形態をなすなり、

q-a-t-a-i-a = he killed. q-u-t-i-i-a = he was killed.

q-ut-lu = they were killed. q-ut-l = killing.

iq-tal = causing to kill. q-ut = murder

q-ut = enemy q-ut-h = murderous

“Marcus Quintio (Abl.) sapientior est.”  
の如し、この用法は「サンスクリット」にあり、希臘にも其残れる形あり、尤希臘にては脱格のかゝる用法は大抵「ゲニチーツ」によりて示さる、「アンラチーツ」の用法が「ゲニチーツ」に移りゆきし所以は、一は其語尾が共に「as」に終るを常として相似るによれど、重なる原由は兩者用法の一部の意味が合一せるにあり、兩格は其部分的用法にて相一致す、「希臘人の多數」といふは希臘人より取出されたる多數」と同一なるが如し、この點に最興味ある一事あり、そは英吉利語の「オン」(「ツ」に近し)——of——なる前置詞にて、これは今日通常「ゲニチーツ」の記號として用ふれ共、其始源は羅甸の「アン」なる前置詞より來る——「on」——「アブ」は即英語の「バイ」又は「フロム」(「……」によりて、……より)にあたり、脱格を示せるもの也、「アングロ、サクソン」語にて此前置詞は脱格の合一せる與格の名詞

此の如く三個子音を骨子とし母音の變化によりて、動詞の各種の形態、名詞、形容詞皆形らるゝなり。  
第七 「ハニ」語族——Hamitic Family——  
埃及古今の言語なり、

## 第二章 印歐言語族

### 第一節 古言の性質

以上が大畧其系統を一にし、同一中心より分布せしものと思惟せらるゝ語族の區分なり、其外いづこにも屬せざる蠻人の言語あり。世界上言語の分布する状況の大略は此れらの説明にて想像せらるべきなり、いでこれよりは、今日の最開化せる人民の言語たる「インドゲルマン」語と、我國人に最近き東洋の二三の國語につきて少しく述るところあるべし、まづ「インドゲルマン」語族の談話をなすべし、凡そ言語の學をなす者は必ず「インドゲルマン」語の上に學ばざるべからず、その理由に數個あり、まづこの語族は第十九世紀開化の中心たる歐洲人民の言語なるにより、苟も歐米文化の光を仰ぎ見る者は其言語の上の智識無るべからず、次に吾人が最新の言語學は歐羅巴の人、主として獨逸の學者が創建せし處にして、從てそ

を従へたるものなり、英語に於て「オア」が時々「より」の義に用ひられ、「s」とは「異りたる用法をなすも亦其理なり、これらにて「アブラチーヴ」と「ゲニチーヴ」どがいかに親密の關係を有するかをしるべきなり。

最後の考究に入る格は所謂「インストルメンタル」にして、「……を以て、……によりて」の類、すへて名詞の器械的用法を示す、語尾は「s」及「hi」これなり、この格は脱格よりもなほ諸語に共通すること少くその意味も亦た頗る不定なり、「hi」なる語尾は獨梵語の復數に用ひられ、この上になほ他の「s」なる語尾、又は與格脱格の記號たる「as」を取ることもあり、この格の正しくあらはるゝは「サンクトリット」に限り其他の諸語には痕跡を止むるにすぎず、或は全く他の格と混合せり、羅句語にては「アブラチーヴ」によりて全く代用せらるゝこと既に述べたるが如し、梵語に於る此格の用は頗る廣

の研究の第一段は自己の言語たる「インドゲルマン」語の上にあるにありき故に言語學をなす者は先づこの研究をしらざるべからず、既に此語の上に學問の創建せられたる以上研究の最進歩せるも亦上にあるや論なし、言語の系統の十分明にせられたるは獨此語あること既に述べたるが如く、あらゆる言語研究の方法證例は此語研究の上に備れり、故にいかなる國人にもあれ、苟も言語を研究せんとする者はまづ此語族の上に開發せられたる智識を得ざるべからず、現時我國人の一般に學ぶ英佛獨諸語は即この語族に屬するものなればこの上に少許の談をなさんも亦全く趣味無きにはあらざるべし。

談話をなすに先立ち、先づ希臘語及羅句語の最正則なる一動詞の指示法（「インヂカチーヴ、ムード」）の變化を示し、語族の古語「インフレクシヨン」の狀を窺ふに資すべし、

くして、「インストルメント」の外「アヴェント」を示す、この格の種々の用法、其語尾の性質等の論は餘りに巨細なる故之を略すべし。

かくの如くして印歐古語に於る八個の微妙なる格は發達したるものなり、以上のべたるところは皆單數に關せり、吾人はまた復數の場合を詳論すべき違あらず、復數の場合には單數の場合に比して殊に複雑なり、一般にこれは復數語尾の「s」を加ふるが如く見ゆれど、その由來は詳ならず、「ヂュアル」即二個數を示す形は、復數より後に發生したるものならむ、「ヂュアル」には格の形の數既に著く減少し、與格と脱格とは區別無きは復數に於て既に然り、「ヂュアル」に至ては、之に「インストルメンタル」迄が混同し、又「ゲニチーヴ」は「ロカチーヴ」と相合一となれり、これらの混同は説明せんこと頗るかたぐ、結合せる方法も頗る奇怪なり（前の梵語の例参照）、されどこれらが名

Amare - to love. (Indicative, active)

		Latin			
I	loved	S	1	Amo	I love
			2	amas	thou lovest
			3	amat	he loves
shall	love	P	1	amamus	we love
			2	amatis	ye love
			3	amant	they love
will	"	S	1	amabam	I was loving
			2	amabas	thou wast "
			3	amabat	he was "
will	"	P	1	amabamus	we were "
			2	amabatis	ye were "
			3	amabant	they were "
shall	"	S	1	amavi	I have loved
			2	amavist	thou hast loved
			3	amavit	he has loved
wilt	have loved.	P	1	amavimus	we have loved
			2	amavistis	ye " "
			3	amaverunt	they " "

詞の数の自然の性質より來れることは明にして、即復数は極めて稀なる物体多く、或物体に至ては全くこれ無きもあり、「デュアル」に至ては、之の形を有せし語にありても用ひらるゝ場合は極めて僅少なりしならむ、蓋名詞が一の文章の上にあつて位置と關係とは、その種類決して數個にして足らず、或個數の論理的思想を示すには、いかほどの形態の形ありとも、遺漏無くなるものにはあらざれば、格が種々に變化しゆきたるも亦頗る自然のことなるべし。

格の説明を終るに先立ち、少くその名稱を説明すべし、格の考へ及其種々の名稱は西洋の文典より我國に入りたるものなれば少く其原名の意義をしるも亦無用ならざるべし、「ノミナチーヴ」を主といひ、「ゲニチーヴ」を領といふの如き譯語は、或は其格の名稱の義より附したるもあれば又は其用法の大体より附したるもありて一ならず、譯語のみにては原名の義は

これ即羅何語規則動詞第一變化の指示法にすぎざれば共、亦以て該語族が舊体を窺ふに足るべし、次に希臘語規則動詞の「V」語尾動詞の指示法變化を示さむ、變化に變化を重ねる間、一糸の自體さるものあり、靈妙なる「インフレクシ

		Latin		
Pluperfect	S	1	amaveram	I had loved
		2	amaveras	thou hadest „
		3	amaverat	he had „
	P	1	amaveramus	we
		2	amaveratis	ye
		3	amaverant	they
Future	S	1	amabo	I
		2	amabis	thou
		3	amabit	he
	P	1	amabimus	we
		2	amabitis	ye
		3	amabunt	they
Future Perfect.	S	1	amavero	I
		2	amaveris	thou
		3	amaverit	he
	P	1	amaverimus	we
		2	amaveritis	ye
		3	amaverint	they

しり難し、今日西洋の文典上用ふる名稱は大抵羅何名にして、格亦之に屬せり、先づ格といふ原名「カスス」——(Casus)——は、希臘に「プトーシス」——Ptoisis——といひて始めて「アリストテール」に見えたる語を、羅何に譯したるものなり、この語の本義を尋ねれば、「落る事」又は「流れ入ること」の義にして、名詞又は動詞が其始源の形態より變化せることを意味せり、「ストイック」派の學者始めてこの語を名詞にのみ限りて用ひ始め、「ゲニイタ」——(ゲニチーヴ)「アイチアチケー」——「アックサチーヴ」「ドチケー」(ダチーヴ)の名を與へたり、この學者は「ノミチーヴ」を「オルター」又は「オイテア」といへり、「オルター」は加動を意味し、使命者又は管事者の義なり、「オイテア」は眞直を意味せり、共に「ノミナチーヴ」は加動者又は眞直者の義なり、「ストイック」學者が「プトーシス」の語を「ノミナチーヴ」にも用ふるや、「ハッパテテクス」派

「イン」法の變化は、この表を精讀せるもの、容易く了解し得る處なるべし

		Bouleüō — to counsel (Indicative Active)		Bouleü-ō			
		N. P.					
Pluperfect Present.	S	1	— -eis	S	1		
		2	— -ei		2		
		3	— -eton		3		
		D	2		— -eton	D	2
			3		— -eton		3
			P		1		— -omen
	2	— -ete		2			
	3	— -ousi (n)		3			
	Aorist I. Imperfect.	S	1	é- — -on	S	1	
			2	é- — -es		2	
			3	é- — -e (n)		3	
			D	2		é- — -eton	D
3				é- — -etên		3	
P				1		é- — -omen	
		2	é- — -ete	2			
		3	é- — -on	3			
Future Perfect.		S	1	be- — -k-a	S	1	
			2	be- — -k-as		2	
			3	be- — -k-e		3	
		D	2	be- — -k-aton	D	2	
	3		be- — -k-aton	3			
	P		1	be- — -k-amen		P	1
2		be- — -k-ate	2				
3		be- — -k-âsi(n)	3				

の學者は之に反對して、「ノミナチーフ」は決して他の諸形の如く「ブトリス」即變化せる者にあらずといふ、於是「ストイック」派は之を辨じて、元來名詞の「ブトリス」なるものは、同一の思想が種々に分布變化せることを意味するなれば、「ノミナチーフ」も亦一の「ブトリス」たり、「ゲニチーフ」「ダチーフ」等が「ノミナチーフ」の「ブトリス」なるにはあらずと、さてこの「ブトリス」の語は羅甸に入て翻譯せられ「カズス」となり、英語に於て「クース」たり、獨逸語にては原意をとりて「デア、ファル」の語を用ふ

— Der Fall — 格、「クース」の語は日常に用ひらるれども、其原意をしろものは稀なり。

格の名稱がかく希臘より來れるをいふにつけ加へて、少く希臘語學のことを述べべし、希臘は歐羅巴語學史の第一段を形成、希臘文明の盛時、碩學雲の如く、宇宙の森羅萬象一としてその講究の問題たる

さてこの希臘語の表と羅甸語の表とを比較せよ、希臘語の方にては羅甸語に比して三個の増大せる點を見るべし、(1)總体語尾變化の比較的羅甸よりも複雑なること、(2)羅甸語には未だこれ無き前綴「プレフィキ」(Prefix)のあらはること、「パーフェクト」には「be」の前綴を標識とし、不完全(「イムパーフェクト」)には「e」を以て標識の前綴とするこれなり、(3)羅甸語には既に見るを得ざる、二個數の希臘語にはなほ殘ることなり、簡單なる單數復數の外兩個を示す「デュアル、ナムバー」ありて特に異なる形態を用ふ、こは「イマドケルマン」の古語に於てこれありしものにして、後漸次消滅せしものなり、この上に動詞の種々の活用法を通じ、又名詞形容詞の語尾變化に及び、なほ波斯「サンスクリット」等古語に溯りて、相

é-be-	Bouleü-k-ein
é-be-	— -k-eis
é-be-	— -k-ei
é-be-	— -k-eiton
é-be-	— -k-eitên
é-be-	— -k-eimen
é-be-	— -k-eite
é-be-	— -k-esan
é-	— -s-a
é-	— -s-as
é-	— -s-e (n)
é-	— -s-aton
é-	— -s-atên
é-	— -s-amen
é-	— -s-ate
é-	— -s-an
	Bouleü-s-ô
	— -s-eis
	— -s-sei
	— -s-eton
	— -s-eten
	— -s-omen
	— -s-ete
	— -s-ousi(n)

らざるは無しとときにあたり、人生の言語豈獨彼等が腦裏に入らざらむや、言語の研究は實に當時學者が一大事業なりき、不幸にして彼等碩學が講究は、一方尊内卑外の狹隘なる精神と、一方は哲學的臆斷的偏見の跋扈とのため妨げられ、歐羅巴語學はその創むる處となりしにも關らず、言語の科學的研究の名譽は終に希臘學者が手中に歸せざりき、されその文典編纂の事業は驚くべき發達をなし、近世最新言語學の發達して科學的文典の講究始まるまで、歐羅巴各國の文典は皆希臘の祖先が建設せし範圍を出ること能はず、今日といへ共なほ其種の文典行なはる、この文典は獨歐洲各國の間のみならず、世界の諸地方に傳りて各地方文典編纂の基礎を形り、我國の如きも、明治以來西洋文典に倣ひて編纂せる多くの國語文典は、皆この希臘文典の糟粕をなむるものなり、されば今日吾人が東西の文典の上に接する崇高なる用語は殆ど

比較すればなほ種々の面白き現象を認め得べきなれど、こはそれら諸國語の文法をどに似てあまりに巨細の點なれば今之を略す、

第二節 「チウトニツク」語族

さてこれより今日「インドゲルマン」語族が世界に擴布するの状況に入らむとす、既に譯者は、今日の以太利佛蘭西西班牙葡萄牙等の言語が所屬「ローマンス」語族又は羅甸の語族に屬し、各その古言の性質を交へつゝ、そのむかし「ケーザル」「キタロ」の言語たりし羅甸の聖語より分布發達せしものなること、又今日の英吉利國語は「ノルマンフレンチ」人を介し、その單語の上に夥多しき羅甸的語を有するものなることをしりたり、これより今日の獨逸言語の屬し、又た英國語の根本的祖先たる「ゲルマン」言語族の談にうつらむとす、「ゲルマン」語族内「ゴス」族は今日既に人口に乏し、今日行はる、「ゲルマン」語族は三派に分るゝこと既にいへるがごとし、

- 一、「スカンヂナヴィア」語 — Scandinavian branch
- 二、高獨逸語 — High German
- 三、低獨逸語 — Low German

「スカンヂナヴィア」語派には瑞典那威及丁抹の語、高獨逸語には今日の獨逸中樞の語、(埃太利の文語も屬之)低獨逸語には今日の和蘭

悉く、二千年の以前「クレシヤ」小半島の人民が與へたる名稱なりとしるべし、一班の文典上の用語が發明せられ、範圍が區別せられたるは希臘語學史の第二期にして所謂「ソフィスト」の時代にあり、此時代は大約紀元前二百八十年の頃にあたり、其最著名なる「オリソリテイ」を「アリステル」となす、名詞と動詞とより、他の小品詞を區分し、單純名詞と復合名詞とを分ち、次で助動詞、冠詞を識別し、四個の格、動詞の「テンス」「モード」を分つなど、大體の事業は皆此時代に成立せり、此時代に次で第三期の「アレキサンドリア」の批評時代來り、希臘文典の研究は殆ど完成の域に達しぬ、この希臘語學は紀元前一千六百年の頃より羅馬に傳りて羅言言語の研究を催促し、紀元前一百年の頃「ケーザル」「キクロ」等の語れる言語は、羅言の聖語として永く世界文化の上に横行す、「キクロ」「ケーザル」等は皆羅言言語學の上に至大の研究と貢獻

英吉利の言語をその最標識たるものとす、これらの重要な諸語類を惣稱して「ゲルマン」語族となすなれ共、この語は高低の獨逸と紛る、畏れあるが故に「チウトニク」語族といふを以てよろしとすべし、されど茲には一般の慣習に従ひ、全体を「ゲルマン」語族と稱しその中の區分なる高低獨逸語を「スカンデナヴィア」語と區別するには「獨逸語」の稱を用ふべし、これを明瞭にせざるべからず、さて吾人が歴史の最古の曙光に溯るときは、ゲルマン語族は既に種々異りたる性質の方言に區分確定せられたるを見る、ゲルマンの言語族が「インドゲルマン」語族の祖先より分布して「ゲルマン」語族の「ゲルマン」語族たる位置をえたる時代及其狀況、又そがかく種々の方言に別れたる歴史の如きは今日よりはまた探究し得べからず、獨逸「スカンデナヴィア」、英吉利を通じ新世界の平原に至るまでに擴布せる大言語族の起原は要するに秘密に屬せり、始めて「ゲルマン」民族が分布し、又たそが羅言民族と運命に關する戰爭をなしたる頃にあたりて、「ゲルマン」語の上には至大の變遷を生じぬ、この際にあたりて「ゴス」及「ヴァンダル」語が全くこの語史より消滅して、外國との戰爭及勝利は其言語の上に大なる變化をなせり、今を去る三百五十四餘年前近世の獨逸語は始めて其位置を得て獨逸國の標準

とを致せる人なり、かくの如く吾人が文典は希臘羅馬人に負ふところ多し、當時かくまで隆盛を極めし學問が終に言語の科學的研究に新方面を開くをえざりし理由は、前にもいへるが如く大約二個あり、一は當時希臘羅馬の人民は偏破なる尊内卑外の敵愾心盛にして、世界の開化せる人民は獨吾人なり、世界の開化せる言語は獨吾人の國語なり、吾人以外の人民は其言語は、たとへ近隣のものも禽獸と其聲音とに近きものなり、純粹なる人間の言語は殆ど希臘羅馬の言語に限るが如く思惟せしこと、なほ我國學者の大部分が國語を偏重せしに異ならず、かくの如くして、科學の原動力たる比較研究は終に望むべきにあらざりき、近隣諸邦の言語を當時の希臘羅馬の開化せる國語に比せば、それは或は實に、禽獸の聲音に近きものなりけむ、しかも其開化せる自己の言語が歴史をたづねれば、實にこれら禽獸に近き隣邦の言語と姉妹の關係ありて、

言語となりしが、この時は又た耶蘇紀元の始に於けるが如く無數の異りたる方言其國中に發生したり、その多くの方言中の一個が一の時代には重要な地位を占め、また次の時代には他の方言に其位置を譲る、かくの如く轉々するに際して各其時代の重要な方言は皆秀拔なる文學を發達して今日に傳り、「シユワローベン」方言の如きは其一なり、「シユワローベン」方言——Swabian dialect——が其秀逸の地位を得るに及びて、真正なる國語の起るべき豫象ありたれども時勢は未だ熟せざりき、これより後大約三百年をへて獨逸の全部は宗教改革の大革命によりて振蕩せられき、「リファオルメーション」これなり——Reformation——、この時にあたりて又た印刷術の發明ありて、「ルーテル」の檄文は新き印刷術の勢力により忽ちにして獨逸の全部に擴布し、貴賤上下を通じ、人民は皆この文書の感化を被りぬ、「ルーテル」が聖書を翻譯せし言語は、あらゆる階級とあらゆる地方の人民により、真正なる獨逸民族の國語として受領せられ、すべての文學的科學的の文書には悉く此言語を用ふるに至りしは實に電光の如き勢なりき、地方人民が口にする方言は以前の如く種々雜多なるは、なほこの國教育が、これら方言をすべて一の標準言語の中心に綜合するほどの擴布を得ざるによる、されどこれらの方

共に遠く其母を、亞細亞の高原に有せしといふが如き考は、終に希臘羅馬の碩學が夢肩にだも入らずしてやみたりき、あらず、かくの如き崇高なる人生開化の智識は、當時の碩學が禽獸に近きとせし「チウトン」民族の子孫が開發するところとなりき。

さて羅甸語の「ノミナチーヴ」なる名稱は、希臘の「オノマステケー」の翻譯にして、名稱を與ふる格の義なり、「ノミナチーヴ」は單に名を與ふるのみにあらずして、そのある關係にあるを示すものなれば、この名稱は穩當にあらざ「ゲニチーヴ」の希臘名「ゲニチケー」は階級を示す格の義なり、「多くの物のある部分」は我ものなり「物」の中にて「物」なる「ゲニチーヴ」は「ゲニチウス」なり「我もの」は「スベシイス」なり、この用法は「ゲニチーヴ」の一個の用法にすぎず、また最普通なるものにもあらぬことは明なれど希臘人が始めて之に命名せし意味は此點よりなした

言も亦日に中心の獨逸標準の語に近きつゝあるや事實なり、かくの如くにして「ルーテル」の開発せし言語は正に今日の高獨逸言語の祖先にして、彼が言語の勢力は單に高獨逸の人民に止らず、北部の低獨逸語をかたる人民の中にも及ぼせしが、元來和蘭英吉利などの低獨逸人は高獨逸人とは其社會的、生活の状態を異にするが故に、その「ルーテル」の影響を受けることもさまで甚しからず、かれ等は今日に至る迄依然低獨逸語をかたる、されば今日の開化せる一大言語たる獨逸語の起源を求めれば、山間僻地に分布せし無數の方言にすぎず、それを統一して開化せる人民が國語たるをせしめめたるは、その人民が思想上の効績にはあらずして、實に外界事情の結果たるを知るなり、羅甸的言語に於るも同様の事情なるは早く讀者のしるどころならむ。

(1) 低獨逸語

- 英吉利及和蘭の國語を以て最主なる者とす、「アングロサクソン」人の語より今日に至る英吉利言語の歴史には五個の時代を分つ
- 一、近世英語 一千五百五十年以降 Modern English
- 二、中世英語 一千三百五十年以降 Middle English
- 三、古代英語 一千二百五十年以降 Old English

り、之と同一「ダチーヴ」の來れる「ドチイター」は「與ふる」を示す格の義にて、「人に金を與ふる」といふ如きなり、これ亦與格のたゞ一の用法たるにすぎず、次に羅甸「アックサチーヴ」の來れる希臘の「アイチヤチケー」は其意味十分明瞭ならず、「アイチアー」は原因の義なれば、其れに對して或他の事物が原因なる人又は事物をあらはすものならむ、「アブラチーヴ」は始めより羅甸名にして、希臘人は之を要せざりき、其義、或物の中より脱する義なるや明瞭なり、「ロカチーヴ」  
「インストルメント」  
三者は英語の如く特別の説明を要せず。「インドゲルマン」の本語にありては、かくばかり復雜緻密なりし名詞變化の組織も其古今の諸種の國語に分布するに及び種々に變化せしことは、説明の途次讀者の了解せし所ならむ、なほ少く此點をみんか、まづ二個數を示す「チェアル、ナムバー」に特別の變化を與ふるは、實際餘

- 四、半「サクソン」語 一千一百五十年以降 Semi-Saxon
  - 五、アングロサクソン語 一千一百五十年以上 Anglo-Saxon
- 「アングロサクソン」語の始元は紀元七百年頃に至れり、英語及和蘭語の外、「フレイシシュ」「アリシアン」「サクソン」の三語は低獨逸に屬すれ共漸次消滅したり。

(2) 高獨逸語

- 三期に分たる、第一期は種々の方言例へば「メソピア」「フラムシ」「アレマニア」「ベヴァリア」「オーストリア」など、各其範圍内に割據せし時代、第二期は前記のべたる「メソピア」方言全盛の時代にして有名なる「ニーベルンゲン、クレーマ」——Nibelungenlied——は此時代の産物なり、第三期は即近世獨逸語發達の時代なり。
- 一、古高獨逸語 八百年より一千二百年に至る Alt-hoch-deutsch
  - 二、中高獨逸語 一千二百年より一千五百年に至る Mittel-hoch-deutsch
  - 三、近高獨逸語 一千六百年の初期より Neue-hoch-deutsch

り其用無き所より、諸語の上に永く放棄せられたり、太古の「アリア」人は十分に之を示し、「サンスクリット」に其跡を認む、古代希臘人は其幾部分を用ふ、古代獨逸人は第一第二の人稱代名詞にのみ「デュアル」の形を保存せり、羅甸語は殆ど全く之を失ひ、たゞ特別な一二語に其痕跡を止むるにすぎず、格の變化に於ては、印度及波斯の古語にのみ其十分なる組織を認められど、こゝに於ても既に混同の萌芽あり、羅甸にては「ロカチーヴ」及「インストルメンタル」減して、「ダチーヴ」及「アブラチーヴ」其地位を併せ、希臘にては、「ゲニチーヴ」は「アブラチーヴ」を併す、古代獨逸は主、領、與、賓の四格を有するのみ、但こゝにはなほ「インストルメンタル」の痕跡を認むといふ、かくて漸次瓦解に向ひし印歐語の格變化の組織は、近世言語に於る前置詞の發達によりて、全く崩壊せられたり、英吉利國語の如きは其最甚しき例にして

(3) 「スカンデナヴィア」語  
この語族最古き形は「アイスランド」にあり、  
(4) 「ゴス」語  
この語族は今日既に人口をばなれたるが、この死語の紀念として吾人に傳る最重要なるものあり、「ウルフィラ」僧正が「モエリ、ゴス」語を用ひて譯せし聖書にして、紀元四百年頃に成りたるもの、その後五百年「ゴス」民族は消滅せしが、幸にして此書の大部は今日に傳れり、希臘語の文字を基とする文字にてかゝる。

第三節 印歐言語族の文學

「ゲルマン」語族の外、種々「インドゲルマン」の分派につきて一々詳細の記述をなすは限ある本論の紙數に之を略すべし、たゞ「インド、ゲルマン」語族の文學の起源の時代につきて一言すべし、「インド、ゲルマン」語族の最古き文學的產物は、印度にあり、今日印度哲學の聖語たる「サンスクリット」語の發達する前、此地に發達せし「アリア」語族の方言たる「ヴェヂック」語の經典たる「リグ、ヴェダ」即これなり、この書は殆ど耶穌紀元前二千年頃にかゝれたるものなり、歐羅巴にありて最古き文學的產物は即希臘にあり、「ホーマー」の「イリアッド」及「オヂッセイ」の生ぜし精密なる前代は確定せざ

て、名詞には「ボセシー」と「一」が特別の格の語尾を有するのみ、代名詞に於ては「ミー、アス、フォーム」の如き「アックサチーヴ」の特別の形残り、「ローマンズ」語族即佛蘭西、以太利、西班牙等の國語にありては、格より來る名詞の「インフレクシヨン」といふものは全然之を失ひ、悉く前置詞の作用によれり、男中女の文法的性の區別も亦た漸次消滅にむかへり、英吉利語にありては、性によりて形を區分するは「ロイ」「シイ」「イット」の第三人稱代名詞の歴史的變形あるのみ、近世の波斯語にては、「むすこ」「むすめ」の如き單語に區分ある外、性といふもの、區別は全く消失せり、佛蘭西語は男性と中性との區別を去りて、單に男女の二性となせり、尤も大体は、獨逸語の如く性に關する語尾變化を保有せり、古代の印歐語は名詞と形容詞——Noun substantives and noun adjectives——との間に區別をなさず、代名詞も亦た大体に於て一

れども、紀元前二千年の初期より新しからざること又た疑をいれず、之を東洋に徴するに、我國文學的產物の最古きものたる古事記を太安應が奉りしは、天武天皇和銅五年、我紀元一千三百七十二年、即耶穌紀元七百七十二年にあたり、亞拉比亞の「タリック」が「サラセーン」人を率ゐて西班牙に侵入し「ザフシコス」王「ロアック」をやぶりたる年は是なり、今左に「インドゲルマン」語族の諸の派に於る文學的產物の最古きものをとりて、其產出の世紀を記載すべし、但皆耶穌紀元による。

Centuries. (世紀)	
B.C (紀元前)	
20	希臘より早し
10	
10	
7	
4	
10	of Zoroaster)
5	
3	
lor 2	
A.D. (紀元後)	
4	
5	
6	
8	
8	
9	
9	
9	
9	
10	
10	



致したるものなり。  
 数の觀念につき少く述べし、數のこ  
 とにつきては本論、言語學と歴史學との  
 關係をのべたる時に論じたることあれば  
 なほこれを參照すべし、世界の言語には  
 單數復數の區別無き言語は多くありて、  
 開化せる國語にもあり、支那語及我日本  
 語の如き大部分に於て此區別をなさざる  
 言語なり、蓋これら國語は、その發達  
 の當初にあたり、其人民の數の考へが、  
 未だ之を音韻上の組織にあらはすほど發  
 達せざりしものなり、我國語にては、「ら」  
 「ども」の如き語を加へ辛うじて「二」の復  
 數を示す、その後世の發達なるや明なり  
 「われら」「ひと々」「盜賊ども」の如し、  
 「アフリカ」の「チヌマリ」といふ人種は、  
 「ヌギイ」(われ)「ヌゴ」(なんじ)、(ヌ  
 グ)「かれ」なる代名詞に「ダー」なる語  
 を附して辛うじて復數を示す、この「ダ  
 ー」は「以て共に」の義にして、「ヌギンダ

Names	
Beginning of	Rig Veda
" "	Classical Sanskrit
" "	Greek Literature
" "	Homer
" "	Hesiod
" "	Herodotus
Oldest of	Avesta (Sacred) sc.
Oldest Inscript. of Achaemed.	Sovereigns
Beginning of	Attic
" "	Classical Latin
Ulfila's Translation of	Bible (Moeso-Gothic)
Beginning of Armenian	literature (Iranian)
" " Scotch Gaelic	language (Celtic)
" " Old High	German
Beginning of	literature
Life of Sanit Patrisk	Icelandic (Scand.)
Helian ("Saviour")	
Cyril's translation of Bible	single work of Old Saxon
Beginning of Modern	(ancient Bulgarian)
" " Bohemian	Persian
	(Slavonian)

「われ」は「われと他の人と共に」  
 の義なり、國語の「われら」「盜賊ども」わ  
 れども」など「ふ」と異なること無し——  
 —n-da, ngo, non——かゝる方法は自  
 己と他界との區別より始るものなれば、  
 數の觀念はまづ「デアリチ」即二個數の  
 區別に始るをしろし、重復法により  
 て復數を示す、たとへば「ひと々」「や  
 ま々」の如き方法の始源にありては、  
 未だ十分に復數の考へるにあらずして  
 單に二個數の考へなり、世界言語の歴史  
 をたづぬるに、單數外の事物を示す第一  
 の方法は、大抵重復によれり、國語を始め  
 今日なほ此法を用ふる語亦少なからず、  
 南米の「ヒュリス」なる人民は三個のこと  
 を「アリカ」といふ、これ多數の義なりと  
 しふ、「チメアル、ナムバー」が復數に先立  
 ちて生じたるものなるを思はし、その  
 比較的 unnecessary 形態が印歐語の如き開  
 化せる言語の中に遺存せることの決して  
 怪しむ無きをしらむ

Centuries	
A.D.	
Beginning of	Russian literature 11
" "	Middle High German 12
" "	Semi-Saxon of English "
" "	Italian literature "
" "	Cornish (Celts) "
" "	Spanishi Portugeese l. "
" "	French literature 12-13
" "	Diutch 13
" "	ancient Frician l. 14
" "	language of Britany (Celts) "
" "	Polish liter. (Slav.) "
" "	Lithuanian document 16

第四節 印歐言語族の成立  
 耶蘇紀元前二十世紀とは我國神武紀元後大約百六十年の頃に當る、  
 さて「インドゲルマン」言語族の性質につきて少く略るところあらむ

驚くべく廣大なる「インド、ゲルマン」言語の「インフレクシオン」の組織が、其簡單なる單綴語根の時代よりいかにして發達し來りしか、又たかくて一時隆盛緻密の極に達せし「インフレクシオン」の組織が、今世に近くに従ひ漸次瓦解し來り、いかにして今日の英佛諸語の如く殆ど孤立語にも近き状態となりしか、この愉快なる問題は以上吾人が説明によりて、大體の解釋をえたりしならむ、されど「インフレクシオン」の説明のみにては、未だ印歐言語の文法、即其構造法を盡さず、吾人は進でその品詞及文章法發達の説明に入らざるべからず。

### 第五章 品詞及文章法

前の二章に吾人は印歐言語の動詞が、いかにしてその人称、法、及時形を得て之を發達せしか、又名詞がいかにして其格性、及數の變化を得て之を發達せしかの大體を説明したり、動詞及名詞は品詞

今日世界の言語に於てその歴史を溯り、系統的親族的關係の明にせられたるものこの語族の如きはあらず、既に言語學が歴史學の上に與ふる貢獻をのべたるべき、この語族が系統を一にすることの證據をのべたり、一方は單語の類似の上より、一方は文法即言語構成法の類似の上より、かくの如く擴布せる種々の言語が到底系統的同一の祖先に歸すべきことを論断したりき、又た言語が系統の同一なるを證明するとき注意すべき二個の條件ありて、一は語及形態の借用、一は偶然的の類似なり、世界の言語を以て其本源は同一の語より出でたりと論ずる論者の如きは、その他日斯學の進歩せし時にありては兎も角、少くも今日にては、この偶然的の類似若くは相互の借用といふことに重きを置きざるにはあらざるか、二三偶然的の類似を以て言語の系統の一なるが證明されうべきならば、容易く世界の言語は同一起源となるべし、あはれ、わが言語學は、不幸にしてかくの如く淺薄なる者にはあざざりけり、希臘語の「ホロス」と英吉利語の「キール」との間に何の關係も無く、「サンスクリット」の「ロカ」と羅甸の「ロクス」と、近世希臘語の「マチ」(眼)と「ポリネシア」の「マタ」(見)との間に於るがごとし、これらの語は皆其形を相類似し、其意義に至ては殆ど同一なる者なれども、語源の問いかなる關係も發見し

中重要にして、言語の根本を形するものなり、「ナツム」は希臘の「メノイ」にして名稱の義たり、「ツァーン」は「ノイ」にして實位又は談話義なり、——Nomina, verb-rhema——、だ「ツァーン」の名は後忽ち「フレクシオン」の重要な一部をいふこととなり、思想の根本的原素は名詞と動詞とによりてあらはさる、即簡單なる動詞と名詞の主格及賓格は最簡單なる思想の根本的表章たり、此上に吾人は種々動作の事情及場合を示さるべからず、その動作の起れる時、その起れる場所、そのなされたる器具、さては其原因、目的、及結果を示さるべからず、この種の關係は即動詞の法、時形、數、名詞の格、數、などの變化によりて示さるものなり。名詞の格の用法を檢するときは、其言語が其古き性質を保存する度をしることを得べし、この點よりすれば、印歐諸語中羅甸な「リヌアニア」の二語が最古き文章法を保存するをみる

うべからず、——G. ólos E whole; Skt. loca. Lat. locus; M.G. mati Polynesian. mata——「インドゲルマン」語族がこれらの疑問をばなれて、其統一的論断をえたる類似の證據を再左に概括せむ

- 1、近親の關係を示す語の一致
- 2、數詞及代名詞の一致
- 3、文法上の構成、動詞用格の一致
- 4、名詞の變化法の一致
- 5、形容詞の比較法の一致

### 第三章 印歐言語族 (下)

#### 第五節 語の發達及變遷

前三個の篇に於て吾人は既に言語の變遷する大體の狀態をのべたり一の言語が變化し發達しゆく上に活く勢力の種々あることを認めたり、今これを三個の條項に概括せむとす、

- (1) 既に存在する實質の中より新結合を形成し、これによりて吾人の新き智識を表明するための需要に應じ、又語の空しく消失せんことをふせぐ、
- (2) 嘗ては獨立の地位と意義とを有せし語を以て他の語の從屬

羅甸語にては「ゲニチーヴ」及「ダチーヴ」は發達無くして保存せられ、これによりてこの兩格の本源の用法をしるべし。「アラチーヴ」は「ロカチーヴ」と「インストルメンタル」の格に擴張せられたれども、其本義はなほ識別しうべし、印度古語には二個の時代を區別せざるべからず、一は「ヴェダ」の時代、一は「サンスクリット」聖語の時代これなり、第一の古き「ヴェダ」の語に於て格は明瞭にして正則の用法に従へり、聖語の時代に於ては既に格の語尾變化の不必要なる結合語を發達せり、これらの説明はまた余りに専門的なる故に略すべし。

さてかく動詞と名詞とが十分に思想を表明するに足る上に、いかにして他の種々の品詞は發達し來りしや、まづ古代語の小品詞中最古く且重要な地位を占める副詞なるものは、果していかにして發達し來りしや、副詞は英語の「アド、ヴァーン」の譯語にして動詞に加ふべきものなれ共

的的地位にたしむること。

(3) 語の發音及意義の上には不斷の變化の活ありて、當初同一なりし國語を多くの方言に分散せしむること。

實際吾人が現在の經歷と、歴史上にたどり得べき經驗とよりこれらの事實の誤り無きを證明したる後、歴史に前人生の言語がはじめて其形體をなせし頃より、既にこれらの事實の行はれたることを豫定す、この主義の下に一の語族中に存するあらゆる語をとり、その形をせられる、分子を分解し、その歴史をたどりゆくときは、その語族の種々の分派が共通の根底たるべき言語の狀体に達しうべし、「インドゲルマン」の語族にありては此研究が最完全に近く成功せるなり、試に英吉利言語の「フレッキファスト」(朝飯)なる語をとるべし、この語の歴史は既に曾て説明したるが如く覺ゆ、もし吾人が言語の中に「ブリーク」と「ファスト」の二語の存することなくば、この語は決して生れ出ることなかるべし、我國語をとらんか、「たり」は「てあり」若くは「とあり」の約まりたるものなりといふ、この語義説にして果して信ならんか、もし我國語に「て」又は「と」と、「あり」との二語の存在すること無んばこの便利なる「たり」の語は決して生れ出ることなかるべし、さて前に立返りて、英語の語尾なる「レス」

これ必しも動詞自身に附せらるべきものにはあらずして、「ブレンヂケート」に附し、其意味を一層精確ならしむる者なり希臘名の「エプիրヘマ」——epirhema——は此義にして、副詞といはんよりも、よく此詞の本質をあらはせり、印歐語の助動詞は大抵其起源を求めうべく、之を求むるときは、それは實は名詞の或格より來れるをしる、この事はいと見易くして希臘語の副詞の大抵は語尾を「os」に終り即ち「アラチーヴ」(脱格)の語尾これなり其他「ロカチーヴ」及「インストルメンタル」の格より來れり、こは考へ易き現象にして、「たやすく」といふ副詞は「たやすさ」を以て「インストルメンタル」格に均しく、「こゝに」といふ副詞は即ち「ロカチーヴ」なり、希臘語に於ては「アラチーヴ」等の格皆消滅したる故、これらより來れる副詞は、之を其本原の名詞に歸着せんこと難し、於是それらは

(否定の語尾)、「リー」(形容詞の語尾)、d(過去)などの——fear-less, man-ly, reduce-d——語尾をとれ、この種の語尾の歴史は亦諸者の職るところ、これらが吾人の「獨逸語族」のみ限り、その他の印歐語族の語には發見せられざるを見れば、これらの語尾は獨逸語族が大「インドゲルマン」の語族より離れて其位置を得たる後に發達せしものなるを推斷して誤らざるべし、而して又たこの大言語族の諸派に共通にして、之を他の世界の諸の言語族より區分するところの性質あり、最簡單なる分子を結合して、種々の語を形する言語構成法も亦たこの大語族の特質、少く共そが通性なるべし、後世の語は結合によりて成れり、その古代最初の語は結合によりて成らずといふ論斷はあるべからず、現在が過去の鍵索たるはいななる學問に於ても同一の理にして、地質學者も人類學者も動植物學者も、皆自己の經驗の中に來りうべき近世現代の事實を根底とし、その上に一定の法則を建立し、この結果を以て自己の實驗のゆき届かざる古代の機物を説明するに用ふ、言語學者に於るも亦此理を出でず、一語をとりて之を分解し其最簡單なる分子に至る例を示すべし、試に英語中の一語をとりて示す、「インレツホカピリチイ」(抵抗し難きこと)この語は左の如く分解せらる

普通の名詞とは異りて變化無く用ひらるゝ一種の品詞として考へらるゝに及び、かくて副詞は一の特別な品詞として取扱はれ始めたるなり、副詞が名詞の或格より來れりといふことは此の如く見易き道理にして、なほ例へば「やうやく」は「漸を以て」を以て「我家に」を以ては名詞の「ロカチーフ」にして副詞として用ひらるゝもの、英吉利語を例とせば更に奇なり「ワンス」(一回)、「ツワイズ」(二度)は「ワム」の古き「ゲニチーフ」なり——once, twice——「必ず」の義なる「ニーズ」も亦も「ゲニチーフ」なり、——heeds——、「ゼ、モアー」(多しだけ)はも「サイ、モアー」にして古く「イムストルメンタル」の格たり、——the more, thy more——、その他この種の例多くあり、要するに印歐語本來の副詞は名詞の或格より來れり、又或副詞は又た獨り名詞の格より來たるのみにあらずして數多の語が殆ど一文章を形する如く集り、一勢に發

- “Irrevocability”
1. irre oability = Latin. irrevocabilitas.
  2. irrevocable + ty = irrevocabili - s + tas or + tatis
  3. ir + revocable = if + revocabilis
  4. revoke - able = revocare - abilis
  5. re - voke = re + vocare (to call)

羅甸的語なる「イレヴォカビリチイ」は容易に此の如く分解せられて一々其羅甸に於る同義語を示さる、其始めは羅甸に「ヴォカン」を「呼ぶ」といふ義の動詞より發達し來れるを見るべし、「ヴォカン」羅甸にては名詞に用ひられて「ヴォクス」(持格、ヴォクトム)——VOGS, um——となり、聲音の義なり、英語に「ヴォイス」——voice——として存するもの是なり、areは動詞の語尾たるにすぎず、この語に於て羅甸にては、「ヴォク」——VOC——の部分か、動詞にも名詞にも、すべての部分に共通せるを見る、次に「インドゲルマン」語族中古形態を存する「サマスコリット」語をとりて之を検するに、「ヴァク、ミイ」(われ呼ぶ)、「マク、シ」(なんぢよぶ)、「ヴァク、チイ」(彼呼ぶ)、——vak-mi, vak-si, vak-ti——の形あり、これを見れば「インドゲ

音せられて副詞となるものあり、「オイルトクザー」、「チヴァー、ツイレンス」の如く希臘の例にもありて「チロンチ」(明に)、「エスチム、キータ」(時々)の如し——also gether, nevertheless, G. delo hote——、わがくにの「モキト」、「たび」などの如し、なればこれらも實際名詞の格たるにすぎず、「ナウ、エ、ゾー」(今日)は「ゲニチーフ」なり、「ホヤース」(そこ)は「ロカチーフ」たるが如し——therenpon, now-a-days——、なほ例を示さんか、英語に副詞の語尾とする「リー」、「リ」の由來は本論にのべたり、これは形容詞の「リッ」より來り、一たび形容詞の語尾となり、再轉じて副詞の語尾となれり、即「リッ」なる形容詞の「イムストルメンタル」の格より來れるものなり、これは獨逸語的のものなり、又た英語に於る「メント」なる語尾は「ローマンス」語に屬し、その諸語にあり、佛語にては「マン」の發音して一般の副詞の

「ルマン」語に於る「ヴァク」又は「ヴォク」なる語は「呼ぶ」といふなる語幹的地位を有し、これが種々に修飾せられて、英の「イレヴォカビリチイ」の如き語をも作り出すものなるを信じて疑ひ能はざるべし、なほこの例によりて、今日にては單に一語の所屬的形態詞たる語も、そのはじめは獨立の地位を保持したるものなるを斷じて認らざるべし、なほ語をかへていへば此語族の語尾的又は形態的分子は二種に區分することをうべし、第一は、第一次的のものにして、語根より直に來りしもの、第二は第二次的のものにして、語根より直に來りしもの、第二は第二次的のものにして、既に形態的分子となるものより進化し來れる者なり。

第六節 印歐語族の單綴語根

以上の講究は「インドゲルマン」語の性質を研究する上に至大の必要ある點にして、從て又た世界大部の語が性質を研究するに資するものなり、前に示したる「ヴォク」の如き分子は、單一の母音より成り、即單綴の原子にして、學者が精勉も亦たこれより上に此語を分解すること能はず、「インドゲルマン」語の分解に於て吾人が最後に抵りたる結果なり、「インドゲルマン」語に於る言語學者が精勉なる研究の結果は、この語族に於るすべての單語は、その歴史の全く不

語尾なり、これは羅甸名詞の脱格「メンテ」にして「心を以て」の義なり、それが全く原意を失ひ單一なる副詞の語尾となり、佛語にてはなほ原意のほのみゆるものあり、例へば、「ボヌマン」(深切に)なる副詞は、羅甸の「ボナ、メンテ」にして「深切の心を以て」の義(又は「良き心を以て」)の義なり、英語には本源の明瞭ならざる小なる副詞あり、「アップ」(上に)、「オン」「オン」(さうして)の如し、されどこれらも、他の一般の語例より推せば其始めは名詞の或格なるを測知しうべし、要するに文典上便宜のため吾人は副詞を一品詞として取扱へ共、實際は歴史的名詞の一格たるに過ぎざるや疑ふべからず。副詞はかく名詞の格より出で、名詞の格と共に動作の事情を、一層明瞭に且完全に定むるために用ゐらる、されども格の變化のみにて其意味を定めむことは未だ十分ならず、何とならば格はそれ自身に混同の免れざるあればなり、格の變化は

明にしてたゞる可らざる二三を除き、その語源として皆この「ヴォック」の如き單綴音に歸着せしめ得べきことをしれり、元より復合語は其主要なる部分をとり、又從屬的形態的分子は其獨立に用ひられしときの者に立返り、之を分解して皆かくの如き單綴の狀体に達せらるなり、而してこの單綴音は皆それ／＼根原的の意義を有することなほ「ヴォック」の如くこれを「インドゲルマン」語族の語根(「ルート」——root——といふ、言更ふれば「インド」語族中に存するあらゆる單綴をとりて之を分解すれば、終に或限られたる數の單綴音に歸するをいふ、蓋今日にありては、該語族中のいかに古き語をとりそのいかに古き歴史に溯るとも、吾人はかくの如き單綴の音を以て語りし人民のありしを證すること能はず、すべての語根は皆多少の語尾前綴などのために修飾せらる、茲に於てか學者の間に二論ありて、一は「インド」語族の歴史を溯り、其始めて亞細亞高原の一部に生れ出し時代に至れば、人民が此の如き單綴の音のみを以て語りし時代あるべきなりといひ、一は之に反し、かゝる説は畢竟臆斷にすぎず、凡そ語根といふものは言語學者が一の語を分解して至りうる最初の時代を示すに止り、云更ふれば學術的臆斷の分子たるに止りこれのみにて語りし時代などのありうべくもなしといふ、これらの

たゞ頗る一般の意を示すにすぎず、例へば羅甸語にて「エオ、ウルベム」——*eo-urbem*——「エオ」は「われ行く」、「ウルベム」は「市」の義にて「アックサチーヴ」なり(といへば、我は行くといふ動作をなし、市は其目的物なること明なれども、さて其市を目的として行くといふ動作をなすにも種々の意味あり、もし羅馬人ならば、「エオ、ローマム」の如く市の各をかいぐれば、故郷にゆく意十分明なり、言更ふれば故郷のために市にゆく意明なり、なほ一層の明瞭を要する他の場合に即兩語の中間に他の語をさしはさむ、例へば、たゞ何の意もなく市にゆくならば「エオ、アド、ウルベム」といふ「アド」は我に又は「( )にまで」の如き意の語なり、又た敵心を以て行くならば、「エオ、アドヴェルズス、ウルベム」といふ「アドヴェルズス」は「反して」又は「對して」の意、又た市が岳山にあらば、「エオ、スプ、ウルベム」(市の下(ゆく)の如く

問題はまだ吾人が、なほ一段高等なる研究に進まん日をまたざるべからず、唯その語根が、果して「インドゲルマン」原人日用の語なりしと否とに拘らず、注意すべき條件あり、語根といふものと、言語の起源といふものを一にすべからざることは是なり、要するに「インドゲルマン」語の語根とは、すべての文法上の區別の未だ生ぜざりし前、語尾變化の未だ起らざりし時、品詞の未だ分れざりし前に存在せし、若くは存在せしと想像せられし語の分子をいふ。

第七節 語根の發達

何をか文法上區別の發達の前にいふや、蓋語根の有する意義なるものは、その根本的意義にして、未だ名詞にも動詞にも形容詞にも、いかなる品詞にも分生せざりしものなり「ヴォック」に(呼ぶ)の意ありといふも、それは動詞にもあらねば名詞にもならず、自由に種々の場合に用ひられべきものなり、希臘羅甸サンスクリットなどの靈妙な語尾變化の作用に驚きし讀者は、茲に至りて又、この複雑なる變化と構成とが、此の如き簡單なる狀体より發達せしものなるを見て、一驚を重ねざるをえざるべし「インド、ゲルマン」語族語根に於る詳細の觀察、その種類より、この單簡なる語の形態が、漸次復雜なる文法を構成し來る階段、即「インドゲルマン」語構成法發達の

いふ、かくして一層意味を確定するなり、又た羅句の「アマラチーヴ」は既に述べたる如く、「市より(又はから)」「市の中に」「市のために」「三様の義を有す」「アマラチーヴ」「ロカチーヴ」「インストルメンタル」(同一の脱格を用ひて此意味を區別明瞭ならしむるにはまた他の語を加ふ、「アマ」「エックス」の如き語を、脱格の「ウルベ」に加ふれば單に市より外に出ることとなり(脱格の本義)、「イン」を加ふれば、「市の中に……」の義となり、「ウルベ」「一箇を用ふれば又は「オア、ウルベム」の如く)」「インストルメンタル」の用をなすべし、かくの如き必要のために發達せし小品詞即前例の「アド」「ア」「エックス」「ヌ」等の如き前置詞といふ、名詞の前に置かるゝが故なり、我國の「てには」も一部は即之に當るものが、我國の語法にては名詞の後に置く故に、後置詞——Postposition——と云ふ、さて印歐語の前置詞稍疑ひも無き副詞に

歴史は、最必要にして趣味ある問題なれども、限ある本論の紙數之を記するを許さざれば、吾人は茲に該語族の筆を收めむとす、なほ頭段印歐語學概論を述ぶるにあたりて、讀者は多少この點の研究を齎ることをうべし、蓋この語族は、今日の言語學が依て以て發達せしどころの語族なり、世界の言語中、や、完全に近き研究をえたるは獨此語族あるのみ、茫漠たる亞細亞、亞米利加、亞非利加の三大陸より、群島に至る無數の國語は、その開化せると否とに論無く、未だ五里霧中でありて、その歴史の明にたどらるゝ者、殆ど一もこれなしといふも亦謬言にあらず、されば他の種々の言語、たとへば吾人が大和島根の言語を研究せむとするにも、先づ既に「イン」「メ」「マン」言語研究の上に發見せられ、創設せられたる方法と規則とを根底として進まざるべからず、苟も言語の研究に入らんとする者は故にまづ「イン」「ゲルマン」語の講究、少くともそが研究の歴史より入らざるべからず、印歐語學が一般言語學の根底として至大の必要あるや此の如き事どもを論らざるべからず、例へば語根につきても、この語は頗濫用せらるれども、真正の語根なるもの、明なる觀念の發達せるは獨この語族に限り、我國語の如きに至ては實に未だ茫漠捕捉し難き研究の狀にありといはざるべからず。

して名詞の或格より來るものなり、英吉利語にて時に副詞に用ひられ時に前置詞に用ひらるゝものあり、例へば

Adverb: I ran him through  
Prep. I ran him through the body.

の如し、希臘羅句の語によるも、前置詞は大抵副詞より來ること明瞭にして從て名詞の或格より出たり、前置詞(又は後置詞)、副詞、名詞の三者が如此關係あることは一見解し難きが如くなれども、實に見易きの理なり、國語副詞の多くは名詞にては「を」を加へたるものが、若くは形容詞の語尾を變化せるものなり、「大變に」「立派に」「大きく」「強情に」などの如し、その他形容詞のまゝに用ひらるゝもの、また重複によりてあらはす「ドン」「シト」「ゆく」「」などの類あり、副詞構造の東西を比較せんはいと興味あることなり、そは兎角、印歐語に於る前置詞はまた、たとへ悉く之を證明し能はざるも、本來名詞の或格より發達

第八節 音韻轉訛の法則

「インドゲルマン」語の歴史即その靈妙なる「インフレーション」の組織がいかにして發達し、又分解せしかの歴史はこれを吾人が印歐語學概論にゆずり、こゝには此語の上に建設せられたる音韻轉訛の法則を述べべし、この法則は、言語學第二の創建者たる獨逸の學者「ヤコブ、グロム」が該語族中諸語の間に起れる子音の轉化を説明せんがためにたてしところなり、この法則をみるときは、紛雜端緒無きが如き言語上の現象にも自ら天然の法則ありて支配され、決して支離滅裂のものに非ざるべし、同一の語が該族の諸語に形を變じてあらはるゝとき、其間には一定の法則ありて變遷を裁す、一方には語族中の古語たる希臘羅句の語をとり、一方に近世の言語例へば英吉利語をとりて其語の變遷を比較すべし、まづ「p」「t」「k」の如き音を「ムート」(啞音)といふ、これに濁音あり、氣音あり、又た唇音喉音齒音の別あり、濁音は「b」「g」「a」にして氣音は「f」「th」「h」なり、之を表示すれば上の如し、

Mutes.  
Throat (喉音) (Guttural)  
c = k  
g  
h (Saxon)

この表よりして、英吉利語と古代語との間の音韻轉訛をときうべし、まづ例へば、希臘又は羅句に於て

し来りしものにして、當初は唯文章の意味を明にするために附せられ、漸次名詞にのみ限りて用ゐられ始めしものなるやまた疑ひをいれず、今日にて「プロハチンヨン」の語は之を直譯すれば前置詞にして、この語よく其性質を示せども、元來「プロハチンヨン」の語は、その名詞の前に置かるゝとさうやうなる意味より來れる名にはあらず、この語は希臘名の「プロテニス」——prothesis——の翻譯なり、然るに希臘にては所謂前置詞「プロテニス」は、名詞の前に置かるゝこと、其後にあかるゝこと、相伯仲せり、前置詞と動詞との關係は希臘語に於て最も見らるべく、この語の最古の時代にありては、なほ純然たる副詞たるを見るをうといふ。

次に來る品詞は接續詞なり、文章法の發達は此品詞によりて行はれたり、名詞の格、及これより來れる副詞前置詞は、一の動作が他の動作と關係を有せざる限、

その動作の事情を限定す、在れども一の動作が他の動作の條件若くは結果たるが如き場合にはこれのみにては足らず、なほ他の方法無るべからず、最古く且最簡單なる方法は二個の動作を何の結合もなく單に並列するにあり、かくして讀者若くは聽者の判断に任するなり、「汝は呼吸を失ふ、汝は死す」の如き語法にして、「ヴェダ」の文章中に多く此種の法あり、「汝は呼吸を失ふ、而して汝は死す」といふは一段の進歩たり、「汝は呼吸を失ふ時に汝は死す」といふは愈完全なり、印歐言語の接續詞はまた大抵格の變化より來り、就中代名詞の格より來るといふ、英吉利語を例とすれば、「ホエン」(時に)は「フー」(關係代名詞)の男性資格たり、「イツ」(若しも……ならば)は「アイズランド」語の「エフ」にして、其始め疑ひを意味する名詞なり、希臘羅甸の接續詞大抵皆關係指示等の代名詞より來れるをしろべし。

又た古語が氣音「f」「th」「h」にて始る語は、英吉利語に「b」「d」「g」には始る、例へば希臘の「ph」又は「f」と羅甸の「f」とは英のbに合同す、其例左の如し、

	Lip. (唇音) (Labial)	Tooth (齒音) (Dental)
Thin (Tenns)	p	t
Medial (Mediae)	b	d
Aspirate (Aspiratæ)	f	th
Latin.	Greek.	English.
primus	pūr	fire
patér	pater	father
	pente	five
pes	pous	foot
piscis		fish
pullus		foal
P = f		

共に「p」「t」「k」の「薄音」に始る語は、英吉利語に於ては氣音なる「t」「th」「h」となる、即例へば古語に「p」にて始まる語は、英吉利にては「f」にてはじまる、其例左の如し、

f = b	
G	fēgos
L	fagus
E	beach
G	fúō
L	fui
E	be
G	fratúa
L	frater
E	brother
G	férō
L	fero
E	bear
th = d	
G	thēr
E	deer
G	thugatēr
E	daughter
G	thura
E	door

又た希臘の羅甸に濁音の「b」「g」「d」に始る語は、英に薄音「p」「k」「t」にて始まる、その例左の如し、

(Lat.)	(Gr.)	(Eng.)
duo	dákru	tear
decem	dúo	two
	déca	ten
	drús	tree
dingna		tongne
d = t		
genus	genos	kind
genu	gonu	knee
g = k		

のなり、又たかくの如く比較するは其言語の古き形ならざるべからず、後世に發達せし新き形は、其國語の歴史の上に固有の變化をふるが故なり、以上の例は印歐大言語族の上にていふ、また其中に屬する小言語族、例へば羅甸語より發達せる「ローマンス」諸語即佛蘭西、伊太利、西班牙等の諸語は、其相互の間及羅甸の母語との間に

之を要するに副詞、前置詞、及接続詞は共に名詞及代名詞の格より來り、時としては相交換流用せらるゝことあり、間投詞は「インダーヴェクシヨム」の事は本論言語の起源の篇に論じなければ之をみるべし、形容詞の「ナツン、アヴェクチーゼ」にすぎざること亦之を論じぬ、なほ一個残れる品詞は冠詞にして比較的後世の發達なり、英佛獨等の諸語をまなべる人は、所謂不定冠詞の、「エー、アム、(英)「アイ、アイチ、アイチス」(獨)「アム、ニン」(佛)が數詞より出でたることを説明せらるゝを要せざるべし、獨逸語を學べる人は、其定冠詞が關係及指實代名詞に用ひらるゝことをみるべし、實に定冠詞は「アモンストラチーゼ、プロナツム」より出たる者なり、如此して冠詞も亦た、接續詞副詞などと同じく、もど名詞若くは代名詞より出たることをしるなり、なほ定冠詞につきて少く述ぶべし、英吉利の「ザット、イム」と「ゼ、イム」と、

正き音韻轉化の法則あり、勿論一國一社會の語自身の中にも、其時代を逐て變遷する上には又た音韻上一定の規則ありて存すべきものなればかくの如き現象の比較的大なる語族に存すること自然なり、「ゲルマン」語族の如きも、其「ゴス」「スカンチナツイア」さては高獨逸低獨逸の諸語に分布する其間に規則ありて、これらが系統的同一の語族にあることを證明するなり、今「ゲルマン」(「チウトニク」)語族中に成立する音韻轉化の法則ある二三の例を示すべし、この語族中の音韻を研究するには高獨逸は第九世紀の頃なる古高獨逸の形に溯り、低獨逸は「モエン、ゴス」語にまで溯りて古き形によりて研究するなり、英吉利語を例として示せる低獨逸語と、印歐古語との間に成立する子音轉化の法則は歴史以前に成立せるものにして、獨逸語族の最古き形を存する「モエン、ゴス」語に於ては既に其中分行はるゝを見る、これ印歐言語が其根原の本語より、數多の大言語族に分れたる際におこりたるものなればなり、然れどもこの「モエンゴス」語より所謂高獨逸語に分れたる第一段の音韻轉化は殆ど紀元六百年の頃に起りたるものなり、低獨逸語は「ゴス」語のまゝの音を傳へたるものなり、かく高獨逸語の分るゝために生ぜし子音の轉化にも亦前に低獨逸語と「アリア」古語との間に示せし如き一定の法則

「は「アモンストラチーゼ」、一は定冠詞たるが語勢の差違のみにて同一の事なり、定冠詞既に「ゲニチーツ」若くは形容詞と同一の用をなすならば、其位置亦これらと同一なるべき理由なれどこれ必しも然らず、英獨にて冠詞の名詞に先立つは自然なれど、形容詞が名詞の後に來る「ヘンリッ」アラヒヤ」及古代埃及などの語にても冠詞はなほ名詞の前に來る、之に反して「スカンチナツイア」、「アラシヤ」、「アルガリア」、「アルバニア」等の印歐語族のものには冠詞の位地名詞の後にあり、この不規則の原因は蓋冠詞發達の頗る新きによるものなるべく、その形容詞などよりも比較的新的ことは全一の語の方言中あるとなきを存するに於てしるべし、されどその發達の新しいことは、何故に、或語にては名詞に前立ち、或語にては後なることの原因となるや、羅甸の「その」の義「英の「ザット」なる代名詞「イルン」より發達したる—lle = that—

あるをしる、今「ゴス」語及獨逸語(英吉利語)と近世の高獨逸語とをとりて其間の音韻轉化の法則を例示すべし。

第一「ゴス」及低獨逸語に濁音「p」「t」「k」を有する語の、高獨逸語にて氣音「f」「z」「h」を有するもの、

第二、低獨逸及「ゴス」語に「z th h」のものが高獨逸にて「b g d」となるもの、但今これらは齒音の三を例とす、

		t=z	
		Eng.	N.H.D. or German (今日の獨逸語)
Gothic.	tag	ten	Zehn
	teil	timber	Zimmer
	taub	tongue	Zunge
	tochter	tooth	Zahn
	tor	two	Zwei
		etc.	
第三、低獨逸及「ゴス」の			
		E.	Germ.
Gothic.	「b」「g」「d」が高獨逸の「p」「t」「k」となるもの	three	drei
		that	das
		thou, thee	du, dich
		though	doch
		then	den
Gothic.		through	durch
		thank	dank
		thirst	durst
		etc.	
		th=d	

以上三個の場合に於て吾人は常に「t」「d」「th」「z」の如き齒音をのみとりて例とせり、其他の唇音 p b f



希臘「ケルト」、「チウトン」、及「ローマン」諸語族の冠詞は皆名詞の前に来る、たゞ「ラシア」のみは後に來れり、「アルベニア」語が印歐語なるは今日又た動かすべからざるどころ、其は兎角希臘語自身中にも冠詞の後ることあり、「スカンヂナヴィア」語に於ては常に然り、「ウエールド」、「ユン」をいへば英の「セ、ウオールド」の義なり、冠詞位置の不定なることを説明して其學者はいへらく、天然の狀況、殊に氣候が人生言語の上に及ぼす勢力は、偶然にもこの冠詞の上にあらはれたる「アルベニア」及「スカンヂナヴィア」は不思議にも共に比較的氣候寒く且つ山脈にぞみたる國なり、山國及寒國の人民は其肺臓を用ふるに精強なるが故に、冠詞の如き名詞の前に來るよりも、後にいはるゝ方殊に勢力あるものなり、元より一般形容詞の如く、古くより印歐言語に存在せしものならば、そは一定の始めの位置を有するものなるべけれ共、比較的

Goth.	E.
dags	day
dails	deal
daubs	deaf
dauhter	daughter
daur	door
deds	deed
dreiban	drive
drigkjan	drink
	etc.

喉音 k g h にても規則は同様に保持さるゝものたるや勿論なり、たゞ此場合に於ては今日の獨逸語（即新高獨逸語）は既に多く變化をなして直に例とすべからず、モエツヨス語より

始めて分れたる古き高獨逸語（即今日の獨逸語の祖先）を例とせざるべからず、これ未だ「ユス」より分れて高獨逸なる一の形を成したる始めにして變化無きものなり、今悉くこれをとりて例示する必要もなし、たゞ第三の規定の場合なる、「ユス」及低獨逸の濁音「b」[g] [a] は、高獨逸の「p」 [k] [t] となることの小例を示す

Mesogothic.	English.	Old High German.	Modern German.
brikan	break	brechen	brechen
brothar	brother	pruoder	bruder
guth	god	kot	got
	etc.		

印歐言語族に於る音韻の轉化を巨細に説明せんは今吾人が目的にあらず、ただこれらの説明によりて、大凡そ言語が變遷分布する歴史は常に一定の法則によりて制裁せられ、決して支離滅裂の猥りなる

後世の發達なる故に、その國の狀況に従て異なるものなりと。

要するにすべての品語は、名詞及動詞の種々の方向に分布せるものならず、そも品詞なるものは悉く思想を示すため必要欠くべからざるものにはあらざるが故に、これらはすべての言語に共通なるものにあらず、以上のぶる所の如きは印歐言語に發見せらるゝものたり、印歐言語自身の中にも異同あることは、冠詞のあるとなきとの語あるにても知らるべし、あらず、元來品詞の區分なるものは、文法者が便宜のためにたてたる組織にして、言語構造上絕對の區分にはあらず、今日にても八品詞あり、九品詞あり、又たその區分は漸次進歩せしものにして、文法學の起りし始めより今日の如く整備せるにはあらず、既に説明せし希臘語學第二期の「オンスリテイ」たりし「アリストテル」は、「オノマー」「ローマ」の名を以て名詞と動詞とを區別して「ゾマデス

變化を爲すものにあざること、言語の生活の上にはいかに靈妙な自然則のたらくかを知るべし、獨り印歐言語族に於るのみならず、大凡世界上人生の言語は、皆其族により、其歴史的發展の上には一定の法則を有するものたるや、吾人の信じて疑はざる所なり、たゞ斯學の研究未だ幼稚にして之を開發しえざるのみ、我國語の如きに於て音韻の歴史は今や吾人が研究の中にあるなり。

#### 第四章 東洋の言語

談話は「リンテ」咲く「ゲレンシア」の花園を去りて、日輪出る東洋の天地にうつりぬ、東洋に存在する重要な言語は大約五個あり、我日本國語を始めとして、朝鮮、支那、後印度（安南、緬甸、暹羅等）「レー」半島を除く、南洋諸島、これなり、吾人に近き國語なる故に今こゝにその概観をなさむ、今日世界言語の研究未だ幼稚にして、確固たる論據より其系統的關係の創立せられたる語族は獨り「インドケルマン」あるのみなること既に論じたるが如し、我國語の如きも悲しきかな、未だその蒙昧たる研究の中にありて、その起源茫漠捕捉すること能はず、これ我國法歴史の古きによるか、若くは其性質然らしむるか、我國語は、亞細亞大陸を求むるもこれと同一の系

モイ」の名稱の下に、接續詞副詞前置詞などを含む所謂「パーチクルス」を理解し、又た「アルトラ」の名の下に代名詞をあらはせり、「アルトラ」は關節の義にして、これにより名詞及動詞の結合せらるゝ如く思へるなり、かく區分はなしつゝも、「アリストテル」は之を言語學上必要のものとは考へず、たゞ希臘言語の裝飾の如く思へり、「アリストテル」は又た動詞の定義の中に、其時を定むることをいひたり、これ希臘動詞の時の精密なる區分より來れる見解なるべけれど、實は時を定むることは動詞の或場合の性質たるにすぎず、「セミツ」語に於るが如く時の曖昧なる動詞あり、「アリストテル」の始めたる事業をひきつぎたるは、「ストイック」派の學者にして文法學の發達はよりて以てなされたり、名詞を普通名と固有名とに分ち、普通名の方には「プロセーゴリアイ」の名を與へ、固有名の方を單に「オノマ」せよべり、この區分は同學者

統をひくと思はしむる一の語をも發見すること能はず、語の性質は多級にして「アッグルチチーヂウ」の構造法を有す、英佛の如き近世の印歐語に比しては劣らざる「インフレンクシヨ」の組織をなし、語調流麗にして完美なる文學を産出せり、日本語は其構造法の點に於て隣邦の朝鮮語と酷肖するを以て今日の學者は假に之を朝鮮語と同一族なりとし、所謂「ウラル、アルタイク」語族に置く、構成の點に於ては、日本語は「ウラル」語族共通の性質を有するなり、されども單語の上の類似に至ては、近來多少朝鮮語との間に發見せらるゝのみにして、未だ到底兩者が同一起源より出たるを斷ずるには足らず、兎角日本語は極て多くの種類の國語を混合せることは事實にして、近世研究の結果、我古語の「サンスクリット」語、支那語、南洋諸島語、朝鮮語等より來れるもの、多きを發見せり、琉球の言語は殆ど我國語に均く、此地の方言研究が國語學に資すること多し、兎角今日東洋開化の中心たる我言語は、東西の學者によりて精勉なる研究をいつけられつゝあり、動かすべからざる科學的論斷によりて東洋に一大言語族の創建せられんも、亦た甚遠きにあらざるべし。

西は「ウラル」山より東は「アルタイ」山に至る、廣漠たる亞細亞の高原に擴布する所謂「ウラル、アルタイク」語族は、今日構成の上より

等が哲學的見解より來れるものにして、偏見たるにすぎざるものなれ共、彼等が精神は第二十世紀に至る迄系統して、人名地名の如く一事物に固有なる名稱を「プロパー、ナウン」即適當なる義の名稱とよぶなり、又此學者は「アルトラ」即代名詞を、定と不定とに區分し、定の中に人稱代名詞を理解し、不定の中に其他の代名詞を入れたり、希臘語學の第三期たる「アレキサンドリア」の批評時代に至り、「ゼンドッス」始めて「アントメア」即代名詞の名稱をたて、此中に「アルトロン」を區別して冠詞となせり、元來代名詞なるものは極めて概念的の品詞なり、「アリスタカス」は「メンデスマイ」中より前置詞及其他の「パーテクルス」を區分し、分辭も亦區分されたり、希臘語に「メトッヘ」といひ、分擔の義なり、動詞と名詞との義を分ちとるの意にて新き一の品詞となれるなり。

「アレキサンドリア」より「デオニシオス、

我日本語の屬すとせらるゝところ、其性質の一斑を述べんは頗る趣味あることならんけれど、限ある紙數之を許さざるは深く憾とする所なり、印歐語梗概の章に亦多少々の語族につきて聽くを得べし、朝鮮語は既にいへるが如く、次に我國の北方、北海道の一部、千島、樺太の諸島に住する「アイヌ」人の言語も亦其所屬せられず、「カムサカ半島の言語は一方「ウラルアルタイ」語に近き、一方北亞米利加北地の言語に近きと思惟せらるれど確たる研究なし、兎角東北隅亞細亞の言語は北亞米利加最北隅の言語と關係あるは誰人も想像するところなり、さて南の方にては、東洋の大帝國たる支那の言語あり支那語の特質は、その單綴なるにありて、語根のまゝに止りて結合語といふもの、無きなり、支那語は最劣等なる言語を以て、最高等なる開化を發達せしめたる國民なり、支那語はその單綴なる性質に於て後印度の諸種の方語と一致し、こゝに東南亞細亞の一大言語族成りて之を單綴語族——Monosyllabic Family——と云ふ、世界中語の單綴なるは此地方に限れり、然れども支那語が果して全く單綴なるや否やは今日なほ研究の中にあり、又其後印度諸語とも言語の實質即單語の上にては十分一致を證明しえずといふ、支那語は兎角東洋の開化せる一大言語にして、其我國語の上に與へし影響至大な

ツラックス」は其八ヶの品詞を携へて羅馬府に來り、始めて一の文典をかけり、「ツラックス」は「アリストターカス」の弟子にして、其羅馬に來りしは「ボンベイウス」の時代にあたり、其八個の品詞とは、「オノマ」(名詞)、「レマ」(動詞)、「メトッペ」(分辭)、「アルトロン」(冠詞)、「アントヌミ」(代名詞)、「ステシス」(前置詞)、「エヒルレマ」(副詞)、「モンヂスモス」(接續詞)これなり、この八個は今日に至る迄用ひられ、少許の修正の外全然その儘なり、されば今日の文法上に、吾人が動かすべからざるもの、如く思惟する品詞の區分も、決して絶對的に始より識別せられたるに非ざるを知らむ、「ツラックス」の文典成りてより、八個といふ數は品詞の區分に必要神祕なる數の如く思惟せられしが、その羅甸言語に適用せるに及び多少の變化を來せり、即一は「メトッヘ」即分辭は動詞に屬せしめられ、一は「アルトロ」即冠詞は羅甸言語に之を欠き、その

れば、この性質を詳にせんも亦趣味あることなれど、吾人が紙數は又之を許さず、次に「マレイ」半島及南洋諸島の言語は別に一語族を形るこれを南洋語族といふ。  
東洋に於る言語分布の狀況の大要も記載し終りぬ、世界各地言語の詳況に至はて讀者はなほ高等なる著述をまたざるべからず、要するに人生の言語に於る研究は、今日未だ極めて幼稚の狀にあること此の如く、多望なる然れども開拓に困難なる科學の富源は、茫漠として吾人が眼前に横れりとしるべし、

### 第十二篇 言語の本質及起源

#### 第一章 言語の性質

##### 第一節 言語の研究に必要な注意

吾人が言語の分布その歴史の講究は歩一歩を進めて終に其起源をたづぬるの時に達しぬ、そもく吾人が祖先の恩恵に浴する事物萬般なる中に言語の如く其恩恵の大なるはなし、これによりて吾人は吾人が愉快なる社會の組織を固くし、これによりて吾人が靈妙なる開化の發達を營む、この不可思議なる吾人が財産の由來と其起源とは早くより究理的思想に富る人民が諸學の問題にして、西洋哲學の淵源なる希臘の盛時にあたりては當時の學者聖殆と一人として此點の論義を試みざるはなかりき、しかれ共既に屢述べたるが如く言語上の理論は、いづれも皆必ず實際の材料を輯集し比較と探究との上に建設せられたる論斷ならざる可らず、決して僅に自己が主觀を前據とせる臆斷なるべからず、事實と材料との根柢を捨てた己の私見を以て哲學的に宇宙萬象を解釋せんとせし希臘羅馬の碩學が、言語説の大半に於て失敗せしやまた怪むに足らざるなり、第十九世紀の科學的風潮限りてより、言語の起源に關する學說亦漸次空斷を

名稱の必要なし、こゝに八個中二個の空位を生じければ、羅馬の學者は之を充たさんとし、「オノマ」「ナウマン」を、「サナスタマンチツ」(名詞)と「アヂエクチーヅ」(形容詞)とに分て其一位をみたま、この區分は論理的には價值あれ共、印歐語の名詞と形容詞とは同一の變化に従ふもの故實用上は不必要の區分なりき、第二の空位は「インターヂエクシヨ」(間投詞)若くは感嘆詞)によりて填めたり、これ賢明なる希臘人の品詞として認識せざりしところなり、かくの如くして今日西洋文典上に見ゆる八個の品詞は成立したるものなり、つけ加へて一のいふべきことあり、文典上にこの八品詞を區分し單語につきて記載するを「アシヂエンス」といふ、單語篇の義なり、これの名稱も亦「アレキサンドリア」時代より來れり、「デオニシウス」又は其前の學者は、名詞に供ふ五個の徵候ありて、其性(男中女)、種類(「プライマリー」なるや「デリヴェー

チア」なるや、階級(單一又は復合)、數及格なることを論ぜり、この附屬階級は羅何名の、「アクシデンチア」にて譯せらる、この名稱が動詞にまで擴布せられて今日「アクシデンチス」の名稱を形れり。

「インドゲルマン」言語の、語の構成法の發達なり、其文法學的分類の沿革に至るまで、大畧之をとき終りぬ、所謂單語篇の考究は之にて終りたれば、これより少く該語の文章法(「シンタクス」)につきて論じ以て印歐言語學の梗概を了るべし。

凡そ一國語の文典は、文章法の條項の下に、單語を文章に組織する上の規則を記載す、「インドゲルマン」言語族中諸語の文章法には多く共通の點あり、たゞ格の最簡單なる用法、諸種の語尾變化の一致、接續法の原用法などの類には異同あり、かくの如き文章法の異同によりて、各國民及其言語の能力の發達の相違が最も示さるゝものなるが、これらの事は今

はなれて學問的のものとなりたれ共、元來頗る幽玄にして高尚なるかゝる問題なれば今日なほ未定の間にある點頗る多し、凡そ言語學に論ずるところ一として言語の性質ならぬはなけれど、その起源を論ぜんがためになほ一層精密なる觀察をなさざる可らず、現在は正に過去の鍵索なるが故なり。

第二節 交通の機關

言語は人の天性的に有するものにあらずして或は故意に或は無意識に父母其他既にその社會の言語を有する人々より習ひえたるものなり、人は決してその社會の言語の全体を習得すると能はず、人は生れてより死に至る迄言語を學びてやむときなし、又同一社會同一國語の中に生活する者といへ共二個の人は決して其言語の惣量を均一にするにあらず、これらは前節の諸篇に反復説明せし處なり、今日吾人は言語を以て交通の機關とす、然れ共交通の機關豈獨り言語のみならずや、言語を有形に示す符號なる文字は暫く措きて、その外建築彫刻繪畫より身振り手眞似など智能く吾人が思想をかたる、これらの種々の方法中最重く廣く用ひらるゝ者は即言語なれども、言語の及び難く達し難き點は常にこれらによりて補はれざるべからず、就中最言語に近くたへず之と伴ひて用ひらるゝものを身振り

茲に論ぜず、凡そ文法上の規則なるものは或一の時代に於て一の人民の最多く用ゐたる習慣の統計をとりて、文法學者が建設せしところにして決して一定不易、動かすべからざるものにはあらず、一の文典の上にあらざるゝ一の國語の規則はたゞ一の時代のものを示すに止れば、その前後の時代に於て多少の相違あるは自然のことにして、少許の相違は積で至大の變化を形る、一の文典に從はざる語法は悉く誤謬なりといふべからず、言語にはたゞ變遷あり、發達あり、その變遷と發達とは獨り單語の上のみにあらずして、文章法の上にも亦たへず起る、故にいかなる規則も時代と場所とを異にしては不易なることをうべからず、いかなる規則といへ共この不斷の變遷を示すこと能はず、古今集源氏物語等を標識とする平安朝時代の文章法は、萬葉記紀宣命等の時代の文章法と同一ならず、されど、古今源氏の規則を創建し、萬葉時代

(手眞似其他包含せらる)とす、英語に「ゲスチユアー」といふもの之なり、雙啞の人が或は體の運動により或は手眞似により或は又顔容の靜動によりていかに巧に其思想を通ずるかを見よ、またよく言語を用ひうる人々ありても試に壁を隔て、講談をき、その面を見ずして演説をきかんに其吾人に與ふる感覺は、必ずや直に之に接するに比して其半なるべし、完美なる言語を有する吾人にありても所謂「ゲスチユアー」が交通の機關として有要なる地位にあるをしらむ、そも、苦痛にうめき、愉快に洪笑し雀躍するはその起源は兎角人の人たるに近き時代に於ては全く先天的に有する所の性質なり、此點にて人は下等動物を去ること遠からず、犬といへ共梳裏になき食を見て尾を振るをしれり、人が顔容身振りなどに其意志をあらはすことは既に其最未開なる原人の時代よりして先天的に發達せしものなるを斷じてあやまらざるべきなり、さればもし人生の歴史に於て人が全く言語といふものを有せず、或は之のある共極めて貧乏にして多少啞聾に近かりし時代ありとせば、かゝる時代に於て吾人が交通の最要機關たりしものは實にこの先天的性質なる身振り顔容とにありといふべし。

言語は一の社會の交通の機關なれば、たゞ一の語といへ共そが一

の用法を以て其例外となすはあやまれり萬葉時代の祖先は、曾て古今源氏の語法を知ることあらざりしなり、はた又た、古今源氏の規則を以て、鎌倉時代に比し足利時代に比し、江戸時代に比し、又た明治の時代に比するも同一のことなり、これら時代の文章法は各其時代の法則にして、其中何れが他の例外たりとか、又違則たりとかいふこと能はず、そも一の言語に文章法の生ずることは、荒野の叢林を開拓するにたとへつべし、あらゆる草木は、位置無く秩序なく個々亂雑に生長する其上に、人の微妙なる努力加はりて、漸次部分明瞭となり、位置も多少定まり来る、されどなほ幾分が荒生の遺影残りて當初萬物生長の勢力を示る、文章法の發達せし始源の状況は實にかくの如くなりしならむ、これよりして終に靈妙なる文學時代の来るは、なほ花さき鳥歌ふ以太利の花園の開かれたらんが如し、江戸時代の國學者和學者は、平安朝

の國語の上に生命を保たんがためには、必ず該社會にある多數の人の採用をえざるべからず、いかに博學の人によりて製造せら又いかに美しき語源の意義を有するものなり共、社會大部の人が之を採用することなくんば其語は終に言語たる性質を得ること能はず、帝王の權を以てするも政府の力を以てするも狼に動かすべからざるは言語なる事吾人は既に悲しむべき森子爵の例に之を見たり、羅馬の「チベリウス」獨逸の「キスムント」——「Iberius, Sigismund」——二帝の如きは羅句語に變化を行はんとして失敗せし人なりき、今日既に人口をはなれたる死語といへ共一個人の力よく之を動かす能はざるなり、一の社會一の言語中の各個人には皆それ／＼の特質ありて種々の變化と誤謬とを我言語に行へ共常に四周の大勢に訂正せられ終るものなり、然りとて共も社會は個人の集合によりて成る、一の社會の原素が個人なるが如く一の國語の原素亦其個人が言語ならざるべからず、社會といひ國語といふは單に抽象的名稱にすぎずして、言語の實體は個人より他にあるべからず、されば一個人の有する特質誤謬といへ共そが一たび其社會多數の人の採用を得たらんには、特質と誤謬とは忽ち其時代に於る正き言語の形たるをうべし言語の轉移は此の如く常に個人より社會に及ぼす者なり、韓輿人は

時代の語法をとりて標識とし、この上に完美なる文法を形成し、國語の法則は又たこの外に出づべからずとなし、自己の文章はその規矩以外に出でざるを尊びたりき、されどは彼等學者が學說の上のみ行はれしことなりき、近松巢林子はこの語法に従はざりき、山東京傳はこの語法に従はざりき、しかれども巢林子京傳は江戸文學史上に於る名譽ある位置を失ふこと無し、巢林子京傳の語法は國學者が所謂國語の法則に對して、誤謬にもあらねば、又た其例外にもあらず、かれら國學者といへども、自己の所謂國語法なるものは、之をその死したる文筆の上に用ひえたりしのみにて、彼等自身が日用の活きたる言語は、到底かくの如き學說を以て制裁するをえざりき、彼等は自己及周圍の常用する活きたる言語と其法則とを以て、降れる世の卑しきことばとして悲しみけむ、然れどもは卑しきものにもあらねば、誤れるものにもあらず

英語に「Tartar」といふ、この語はもと「Tatar」と綴りて第三番目の「r」は無しものなり、そが入りたるは實に佛王「サン、ルイ」が「語より来る、  
"Well, may they be called Tartars, for their deeds are those of Hends from Tartarus."  
一個人の始めたるものが全社會若くは其多數の人に採用せらるゝに至る迄には多くの年月を有す、言語上の現象が常に徐々に起るは此の故なり。  
第三節 言語の神傳説  
言語の性質を考へその起源を考ふるに於て先づ排除せざるべからざるは神傳説なり、大凡そ宇宙の森羅萬象として造化が恩恵ならざるはなし、仰げば高きヒマラヤの峯より、伏して 弘き大洋の水に至る間、「キケロ」「デモセニス」が燄天の辨より乳兒呱呱の聲に至る迄、吾人は皆「シユープリーム、ホイーンク」の光を頂けり、しかれ共世界成てより茲に幾億萬の星霜を経たる後の事物を以て、これが現在の性質と形態とを備へたるまゝに、直に神の手より地球の上に附與せられたるものといはし誰かその愚を笑はざらんや、すべて學問に於る所謂神傳説は皆この至愚なる迷信を奉ずるものなり、そ

巢林子京傳の言語が、貫之紫式部の言語と、同等の位置にありといふことは、彼等國學者の終に夢想だせざりし所なりけむ、あはれ。

印歐言語の文章法の發達を論ぜんことは頗る趣味あることなれど、元來文章法の研究は人生心理の研究と相關係して殊に困難なるところなり、我國語の如きは今日に至て未だ十分なる文章法の組織成立せず、その大要をのべんにも多く語族の古語に直らざるべからず、餘りに専門的にして讀者の誤解を來すに止るべければ暫くこゝに擱筆すべし。

「インドゲルマン」の言語が、綜合的精神を以て其發達をはじめ、簡單なる單綴語根の時代より起り、吾人が歴史以前に於て既に早く、此の如き廣大にして微妙なる「インフンクシヨンの組織を形成し、其最高點にまで達せしものがいかなればその一たび歴史の時代に入りてより、當初の精神とは全く反對せる分

も「宇宙の萬物は皆其歴史あり、その始めて今日よりは殆ど考ふべからざるに單純粗殘なる、寧ろそが原動力にすぎざる状態を以て神の手より附與せられてより、あらゆる變遷と進化をへて終に今日の文明に達したる歴史を溯りて、幾億萬世紀の古に至り其起源を求めんこと一事物といへ共容易なる者ならず、それを唯千年萬年の以前に溯り直に之を以て其事物の起源の時代とし、多少今日の狀に近き形體を以て其儘直に神の手より傳られたりとなすが如きはいかで又一顧の値あらむや、所謂言語の神傳説は、吾人の言語は其語根の形を以て直に神より一種不可思議の能力を付して附與せられたりとなす、誠に言語を分解して今日吾人の達しうる最高起源は其所謂語根の時代にありといへ共、何を以てか語根が直に其語の始源なるを斷じらるべき、かくの如き説に對して茲に多くの論をなすを要せざるべし。

第四節 思想言語

人の思想と言語との間に絶對の關係無きこと既に論ぜしところなり然れ共言語のかくの如く發達せし今日、吾人の思想と言ふは殆ど離へからざるほどの深き因縁を有するに至り、言語無して事物は考へらるべきものかといふ事は近來まで屢幼稚なる學問社會の問題な

解的傾向が流行し來りて、終に近世諸語の如く殆ど孤立語に近きまでの状態となれるや、語の種類によりて其傾向の流行の度に多少はあれど、其近世に赴くに從ひ分解的となるは均しく一なり、この傾向の相違は果していかなる原因より來れるか、この趣味ある問題は下の如く解釋せられ得べし、曾て印歐民族の未だ亞細亞の高原に羊をかひし時代にあたり、一たび綜合の法方によりて語を形成することの精神行はれ始めてより、この民族が緻密なる心理の能力は忽ちこの精神を發達せしめ、かくて吾人が歴史時代のはじめにこの族の諸語に觀るが如く、驚くべく廣大なる「インフンクシヨンの組織は完成せられき、この作用既に其最高點に達して「デクレンシヨンの「コンマニグーシヨンの組織 全く完備するに及びては、民族が綜合的精神は又た用ふるに處なくたい時々消滅する二三の舊形を補ふため新形を作るに十分となれり、

りき、言語が單に人の「コンツェンシヨナル」にして「アービトラリ」なる符號にすぎざること知られてよりも此點に於る問題はなほ問はれたり、言語と概念といふ事は相分離すべからざる者なり、とか又は、言語なくんば、「しろ」「白」「くろ」「黒」といふ如き簡單なる概念といへ共現時も實現せらるること能はずといふ如き論斷なり、言語と思想との關係につきては米國の學者「ホイットネー」最巧なる方法を用ひて説明を與へり、吾人はその説を以て讀者に紹介せむとす、今こゝに唯一の「スノー」(雪)と名くる白色の物體ありとせよ、吾人は之を認めつゝも之に向ひ敢て特別の觀念を催す事ならず、赤黄青其他の色に於るもまた同じ、然るに今この雪といふものより、外に白きもの知らざりし人が「コットン」(綿)を見たりとせよ、然るときこの人はその色の雪の色に均きを見て、その色を「スノーカラー」(雪の如き)——SNOWY——とよぶべし、これより他の多くの白色物に於れば皆之を「スノーカラー」とよぶべく、かくて「スノーカラー」の語は今日の「ホワイト」(白)と同一の意味を有するに至る、「スノーカラー」チツス」(雪の如き)は「ホワイトチツス」と同一義たるべし、これによりて見るも、吾人は「白」といふ語無くしてよく「白」といふ概念を實現し得るをしるべし、言語の歴史に於て事物に名を與ふる順序の

かくて時をふるに從ひ該言語の形体を成す分子及其組織は日を逐て古くなりゆき新きものは減少しゆく、言更ふれば形体の起原は日に之を用ふる人民によりて忘れられ、音韻の變化は自由に其上に活き、新き形体分子を形成せんことは益々困難となるべし、於是言語の綜合的傾向は著しく制限せらる、此時にあり他の一方には、人智進むに從ひ一國語中の語の數、即その「ゾオカブラリー」は日に増殖しゆきて、種々微細なる點を區別せる命名法も發達し、諸種の異りたる思想上の關係は獨り形体的分子によりて示されず、又た多く獨立の語によりて示されうるに至るべし、この傾向は時をふるに從ひて益々勢力をえ、之と同時にたへず形体的分子の用を制限しゆくべし、この時又た一の勢力が此上に影響するあり、即文化日に進みて言語の教育亦精密となり、印刷術行はれ文書出版せられて、言語は其保守的性質を發達し、言語發達の

この「スノー」「スノー・井」の例の如きものなるは既に讀者のしらるゝところなり、言語無くしては思想を構成する能はずといふは、なほ恰もゆりかごと乳母の準備無き内は赤兒は生れ能はずといふに均し、既に思想は言語より獨立するのみならず、又すべての方面にて一步を言語に先んずる者なりといふべし、吾人は心に十分の識覺ありながら之を言語にあらはしえざる場合頗る多し、言語機關の發達せる今日吾人は通常事物を考ふるに言語を用ひて其助けをかる、然れ共必しも之をからざれば考へ能はざるにあらず、又言語を用ひずして考ふる場合甚少ならず、試に思へ、吾人が二個の棒をとり其長短を比較せんとする如きときは、吾人は直に兩者を並べて比較す、このときいかなる言語も考察の上に来らず、一般に思想の構成は瞬間にして言語の構成は多少時を要す、思想先成り次に之を自己の言語に構成し見て確るが吾人通常の考察法なり、なほ思想の言語より獨立なるは下等動物に於て其著きを見る、吾人の如き言語を有せざる下等動物も、よく人の愛撫恐嚇不親切を了解し、食物と然らざるを判別す、烟の出る水はあつし、この水は熱す、故にこの水は吾四肢を傷くべし、かくの如き推理力は言語無き犬馬にも自由に構成せ

初期に於るが如く自由に獨立語の原意を消滅し、之を他の語に加へて從屬の關係を生ぜしむること能はず、是に於て語族當初の根本的精神たる綜合的傾向は又た制限せらる、かくの如くして一方は分解的傾向發達の勢力を養ひ、一方は綜合的傾向の制限せらる、時にあり、その言語の歴史の上に大なる變遷起りて、その古き形體の組織を破推するや、その形體的分子は又た再び發達するの勢力無く、僅に少許の舊形を遺すのみにて、祖先が綜合的精神は全く死滅し、これに反して密に發達の機をもちたる分解精神は、之に乗じて一時に跋扈をなし、こゝに近世言語の著き分解的性質は成立すべし、英吉利言語及佛蘭西、以太利、西班牙等の如き多くの「ローマンス」族の言語は正に大變革をへたるものなり、かくの如く説明すれば、一たび隆盛を極めし印歐言語の綜合的精神が、忽ち瓦解して分解的趨勢をとるに至れること、又た疑ふに足ら

らるゝなり、さればもし言語の起源か神傳説の如くならず、その人生の歴史に於て順次に發達せしものとすも、その發達は必ず人生の思想力即意識の發達に後れたるものなるを識るべきなり。さて此の如く言語は思想より獨立なる事を證しえたる次に來る問題は言語が人生思想の構成を助くる勢力これなり、たゞそが他より獨立なりとするも、言語が思想の構成を助くる効力の至大にして殆ど、促すべからざるは又た疑ひなかるべし、この點は、殆ど吾人の如き言語無き下等動物が思想の構成法と最高の言語を有する吾人とを比較するより解明によきは非るべし、鳥は數を算する觀念ありといへり、二個の獵夫が小屋の中に入り次で唯一人出來るときは鳥は能くなほ一人の屋中に止るをしり、又三人入て二人出で、四人出で三人出るも同く、かくてその觀念の及ばざる數に至る迄鳥は能く一人の止るを知るといふ、さて今こゝに二十粒の米粒と十九粒の米粒とを別に相置くべし、然るとき唯之を一見したるみにては其何れが二十粒にして何れが十九粒なるやを知りえざること人も鳥も異ることなし、されどこゝに人と鳥との區別はあらはるゝべきにて鳥は永くその何れなるやを知ること能はざるべく、人はたゞ一の語を有せざるもその粒を自己の數へ能ふ數、例へば四個づゝならば四個

ざるべし。ながき閱讀者の精勉なる頭腦をなやましめたる印歐語學の梗概も終りとなりぬ、印歐の言語は、之によりて以て近世の言語科學が發達せし言語にしてこの研究の上にはあらゆる斯學研究の法方が備はれり、今日なほ幼稚の狀にあるこの學問は、彼來印歐語族研究の上に創建せられたる方法によりて其發達を計畫せざるべからず、いかなる國語を研究せんにも先づ印歐語族研究の歴史を學び、その上の智識を根底として、各自の講學を始めざるべからず、今印歐語學の梗概を終るに望み、吾人は他日、東洋言語學の梗概を掲げて、再び讀者に見ゆるの日あらんことを期せんす。

印歐語學梗概終

づゝに分ち見、かくして容易く兩側の差の一個なるを知るべし、之に加ふるに人はたゞ三個の米粒が二個の米粒より多きをしるのみならず、又た三つか二つより多きことをしる、これ即人の抽象的能力「アブストラクト、パワー」(abstract power)の發達せるものにして、言語が發生する大原理は實に此抽象的能力の發達にあり、言語なる特にいへば物名の生ずるは、同種類の物体に通ずる通性を認め、其通性を物体それ自身より抽出す際に於て生ずべきものなればなり、然りしかして言語が思想の構成に及ばず能力の要も亦主として此點に存するものなり。單に思想のみにては到底構成し能はざるほどの大數の觀念も、數名によりて容易く其實在を認識し、之に加へて文字數字の助力を求めかくして高尙なる數學も其發達を見るをうべし、思想を構成する上に言語と文字との必要なる數學の如きはあらざるべし、これは極端の例なれ共其他いかなる思想の種類といへども言語よりその助けをかくること數學的推理に劣ることなし、この助けによりて思想は其明晰をまし之を運用するに適せしむ、これによりて諸種の思想は比較せられ制限せられ相互の關係明瞭となる、これあるがために多くの人多くの時代はよく共に同一の思想に向て活き、それに形態を與へ關

文字の起源及發達

(一) 文字の價值

無形の言語を有形の標識にあらはし、遠隔の地との談話をなし、又は自己の言語を後世子孫に遺すは實に文字の効益なり、言語の上に卓越して文字の効用ある點は大約四ヶ條とす、

- (1) 言語は話されたる瞬間に消滅す、文字は之を後世に傳ふ。
- (2) 言語は遠距離の地の人と直接に交通を媒介しえず、文字は形ある故によく信書の用をなす。
- (3) 言語は同時に一人の談話を多數の人に擴布しえず、大演說會をなさんも其聽衆の數は限あり、文字はよく之をなす。
- (4) 言語は人の口より口に移轉し、從て變遷し易し、文字は形に示してよく其形を保存する故に言語變轉

係を給し且意義を附す、すべての單語は皆抽象と結合とより成る思想構成の結果を示す、而して此示されたる結果によりてその思想は容易く他に傳り又其上に一段の改進を建設す、大凡そ言語が直接の補助無くしては殆どはたらしきざる思想の種類頗る多し、熟練なる土木師もその精巧なる器械なくんばいかで能く其靈妙なる測量を行ひえんや、しかも土木師自身が手腕の精鍊亦欠く可らざるなり、言語の思想に於る關係は恰も測量器械の土木師に於るが如し、言語はこれ思想の器械なり、熟練せる土木師の手腕ありて始めて精巧なる測量器械その要をなすべし、しかもその精巧なる器械無んば熟練せる手腕も終に用ふるに所なからむ、さらば吾人が結論は又疑ふべきところなし、思想は言語に先立つ、而して前者は後者ありて始めて其運用を全うすべきなり。

第五節 言語の社會との關係

茲にまた講究すべき第二の論點あり、思想は言語に先立ち之によりて運用を全うするものなるや既に疑ふところあらずといへ共、これが故に言語は思想の構成を容易にせんため個人の故らに畫作せしものと思はれこれ大なる誤謬なるべし、小兒をして決して他人に接せしめず生長せしめば、疾病饑渴などを訴へて嗚咽悲鳴し或は食を見



を妨ぐ、文學の發達が言語の一大保守的能力なる事は既に本論に屢々論せし所なり。

文字の發明は人生の開化史に於て一大段階を形するものといふべし、この力によりて一時代の人民は前時代人民の作り上げたる智識の全体を習得して我輩中の物となし、この上に自己の新智識を加へてまた之を次期の人民に移傳し、かくて人生の開化は層一層の進歩をえたり、元より文字無きがために全く文學の發達せざるにはあらず、我國神代の如きは文字無ししか、若くは之ありしとするもその用極めて少なかりしにも關らず、多くの美妙なる歌謡を残して古事記の上に傳れり、され共人生にして果して文字の恩恵を受けることなくば、吾人は永く動物の上一步の低き地位に止りしならむ、今日の開化は文字の恩恵なりといふも詭言にあらず、言語は各特別の社會の統一と獨立とを強固にし、文字はすべての種族及社會とま

て喜び笑ひ雀躍するが如き外特別に思想を構成すべき言語を發達せんとあらざるべし、幽靜なる家庭に生長せしめし小兒が比較的沈黙に生長すること實驗せられたり、言語は社會の生産物にして、人類が相集て社會を構成するとき、彼是交通の機關として始めて發達せしものなり、言語の歴史的起源を求むればそれは個人が心中に構成せられたる思想が、果實の割れて種子を煥出するが如く、心中よりわれ出たるものにあらず、言語はたゞ一人が心中の思想を他人に通ぜんがため取用ひたる方法なるのみ、なほ言更ふれば自己が思想と均き思想を他人をして起さしめんがために取用ひたる機關たるにすぎず、言語は社會の生産物なり、社會は言語を形らんがために集合せしにあらざ、言語と思想との關係に於てこれ等の點はまづ最讀者の心中に明にせざるべからず、かくて吾人が直接の問題は來る、いかにして最初の言語製造者たる人民は、その天性に於て毫も吾人と異なるどころ無く、唯其が遺傳的性質の發達せざりし状態に於て、いかにして自然にこの交通の機關これによりて相互を了解しうる機關の所有をえたりしが、吾人は言語の起源に關する諸説を檢するに先立ち、なほ少く言語の性質を考へざる可らず。

第六節 無意識の變遷

たすべての時代を結合して世界の統一を計畫する傾あり、されば文字はその本來言語の附屬物なるにも關らず、恰も之と正反の性質を有せり、言語は進歩と變遷とに傾き、文字は固着と保守とに傾く、しかも文字ありて言語の効用亦益完美なるべきものなれば、吾人の言語學はまた文字に向て論ずるところ無る可らず。眼にてみらるゝ文字が耳にきかるゝ言語に對して、決して其數學的代表者にあらずるや明なり、吾人は「キテロ」「デモスゼニス」の雄辯集を讀みても、實際其人に接せしに比して半程の感動をも呼び起し能はざるなるべし、同時代の人にありても親く其面容に接したると單に其談話の筆記を讀むと其の聽者讀者が心中に印する感應の差甚大なるべし、言語の能力を助くる手眞似身振りなどを文字の上には見るをえざるのみならず、音の高低、調の急緩の如きいかに「アクセント」の符號にとみたる言語にありても決して真正

小兒が言語を習得するの無意識なるは既に屢論じたりき、小兒は四足ありて動くものを何故に「けだもの」と名くるやの理由を知らず、たゞ父母乳母を始め四周の人皆かくいひて同一の物を意味し相互に意味を通ずる故に、自己亦かくいひて其意を通ずるのみ、小兒のみにあらず、すべての人は其言語を用ふるに際し其意義語源に關しては全く無意識なり、「ランブ」なる一語は何故に洋燈を意味するや、この語は葡萄牙より入りしか、西班牙より入りしか、はた又佛蘭西より來りしか、かゝるとは之を用ふる人の關する所にあらず、言語の習得既に無意識「アンコンスシアス」にして、その轉化亦全く無意識に進む、「そうだ」は果して「さやうである」の約ありしものか、「ピシヨップ」は果して「エビスコボス」より來れるものか、誰が始めてその第一綴と最終の綴とを零せしか、何故に吾人はその零したるものを採用して語るに至りしや、かくの如きことは「そうだ」を用ひ「ピシヨップ」をかたる人の關する所にあらず、言語が思想の「アービトラリー」にして「コンヴェンショナル」の符號なると共に、その習得と變遷との無意識なりといふ事は、實に言語が根本的の性質にして、之が性質を論ずる者の常に心中に明にして忘る可らざる所なりとす、説明の反覆此點に渡るも亦之がためなり。

に寫すこと能はず、しかのみならず、或時代に存する文字は決して其時代其社會に存するすべての聲音を寫すこと能はず過去と現在とは正に然り、未來亦正に然るべし、凡そ人の聲音は咽喉より口内諸機關の變形によりて變化す、而してその諸機の変化は其段階無數にして従て一個の人が生ずる又は生じうる聲音の種類亦無數なり、この事はやゝ高尚の理論に屬するが故に吾人は茲に之を詳説するの自由を有せざれ共、文字が其時代人民の聲音を誤謬不足無く寫せしものと思ひあやまりたる事、屢々東西の語學史上に大なる誤謬を引起せり、我國の文字は古來五十音面上の假字に止れり、故に我國古音にはアイウエオ五十音の外の音あらざりしと信ぜしは從來國語學者の通弊にしてその誤謬の大部を引起しき、要するに吾人の文字は其いかに完全なる者にてても、言語の完全なる代表者に非ず。

(二) 文字の種類

第七節 言語の進歩  
 言語は社會交通の機關にして其社會にすむ人の思想をあらはす者なるが故に、一社會言語の物量は社會人民の有する思想の物量、若くはその比例的代表者たり、而して一社會の保有する智識の物量は時と共に進歩増大する者なるが故に、其言語亦共に進歩し豊富となるべきや言をまたざるべし、されば一語の歴史を溯る時は一般に其時代の古きほど其言語の貧乏なることを認むべく、近世に近き程豊富となるを知るべし、これ萬物自然の原則にして、徒に古人崇拜に流るゝの結果、古語は貴く今語は賤く、古語は正しく今語は邪なりと論ぜし從來の國學者が如きは全く一顧を値するに足らず、古語が今語よりも貧乏なることは大約二個の點にて見らるべし。

第一 古言は今言に比して、單語、結合語(「コムバウンド」)、支語(「アロウエチーヴ」)の少きこと、  
 これは多く説明を與へんまでもなるべし、新き事物新き智識の生ずるに従ひ新き名稱を生ずるや自然のことなり「シヤッポ」(帽子)「ランソ」シガレット、「シガー」タバコ、三十年前我國民のしらざりし名稱數々來れば枚舉に違わらず、云ふことなかれ、古語古名消滅せしもの多し

今日世界に於て吾人の有する文字の種類は既に本論第二篇教育學に於る頁獻の條第三に國語と文字との關係を論じたるとき之をのべたり、即左の如し

- (1) 意義的の文字(「イデオグラフィック」) 一語に一字形ある漢字の如きをいふ。
  - (2) 綴音的の文字(「シラビック」) 綴音の存するだけの文字あるものをいふ、我五十音假名文字は是にあたり。
  - (3) 音標的の文字(「ホネチック」) その國語にて言語の根本的原素たる音の存するだけ文字の存するものをいふ、西洋諸國語の「アルファベット」之なり。
- なほ之を他の方法によりて分類すれば、第一の意義的の文字を二分し、第二の綴音的の文字と第三の音標文字とを合して一となすなり、即左の如し。
- 第一 意義的の文字「イデオグラム」

と、吾人は一事物よりも進歩し豊富なる代者を有せざれば古物を棄ることあらざるなり、「上下」「大小」はなくなりたれど、「モーニング」「フロック」「燕尾服」「サーベル」など無數の代りものは生れたるにあらざや、次に結合語のこと、是は先の篇のあたり言語の生命をとき、「インドゲルマン」語族の語が、その始め各單獨なりしもの漸次相結合融和して多く新き形を作りたるをのべ、その勢力の時を逐て愈進むことをいひたるにて知らるべし、第三に「デリヴェーティブ」——derivative——といふは他國の語又は自國の語の漸次形態を變化し之より由來して生ずる語なり、その時を逐て増殖するも亦明なり、徒に古言の簡易に迷ひて其清明をほこれる國語學者の如きは將に愧死すべきなり。

なほ例を示さんか、「タスマニア」の蠻人は「たかき」まろき(高、圓)といふやうなる語を有せざるが故に「たかき」といふはんとするときは、「長足」といひ、「きろき」といはん時には、「球の如く」とか「月の如く」とかいひて其意を示せり、「ニユーカレドニア」人には「今日」「昨日」の

— Ideographic —

(1) 象形文字 — Mere pictures —

象形文字とは、日月星辰を始め天地間にある種々の事物の形態を模して書き、之を以て其事物の標識とす、言更ふればその事物の名稱を示す文字とするなり、漢字の

○ 血

の如きは明にその事物の繪畫にして、其書法漸次變化して今日の、日月山水、とされるものなり、

(2) 符號文字 — Pictorial Symbols —

有形の事物は既に象形文字によりて示すとすも、その事物の關係を示す無形の事象に至ては如何に之を示すべきや、たとへば或物の「う」(上)とか「した」(下)とか、「みぎ」(右)とか「ひだり」(左)とか、事はいかに示すべきといふに、之には符號的文字の發達を見るなり

語無く、「ゼイロン」の一種族は自己の目前に在るに非ば、我妻の名を語る能はずといふ、南亞米利加の「ダラス」とよべる人種は、「三」までしか數の名を有せず、その自己が所有する雄牛を認識するは數に依らずして一々其顔にて記憶し居るといへり

第二 古言は今言に比して一語に有する意義の多くあること、

これは第一の場合の特別なるにすぎず、國語義の多きは其人民思想の細密なるを示し殊に其識發達の度の高きを示すや勿論なり、小兒が言語を檢する時は吾人が多くの語に分ちて示す意を單に一語に合せ示すこと頗多し。

言語に抽象的詞の多きは其語の發達を表識しうべきものなり、吾人は常に知りたるもの、智識を以て知らざる者に及ばず、吾人の五官にてしりうべき者より始めて、五官以上の精神的名稱に及ばず、思ふに吾人が精神的作用は五官の發達によりて發達せしめらるゝものなること心理學の講明する所なるが、之と均く言語も其最初にありては唯有形の事物にのみ名稱を有し、その名稱成りて後始めて比喩の方法によりて無形の事物に迄推し及ぼしたるや疑無し、英吉利國語の「スピリット」(精神) — spirit — はその語源を尋ねれば、呼吸

即例へば一線を引きて中心とし、其上部に點を記して上部といふこととの符號とし、下部に點を記して下部といふ事の符號とするなり、漢字にありては之を指事文字といふ、一二三等の數字の如きも亦たこの符號的文字に屬するなり、

一 一 一 一 左右

第二 音的文字「ホノグラム」

Phonogram

この種の文字は意義的文字の如く形態又は繪畫によりて事物を示し、又た其名稱を示すにあらざりて、事物の名稱たる言語其自身の音を單位として、其各音に符號を用ひ、その符號を綜合して各事物の名稱を代表せしむるものにして、綴音文字と音標文字とに分るゝこと既にいひたるが如し、

- (1) 綴音的文字
- (2) 音標的文字

の義の語より來り、「ヴァーチュー」(德行) — virtue — は「人の性質」といふ事を意味し、「インテレクト」(才智) — intellect — は「一個の事物中より一を撰得する」といふ義の語より來るといふ、いかなる言語といへども此の如き方法によりて進まざるものなし、今日我國「あたま」(頭)の一語が人体の最上部の名稱より出でいかに多く有形無形の意味に用ひらるゝかを見よ、「あたまから叱られた」「あたまにかゝはる」「あたまが要る」「あたまが痛む」「あたまから水に入れた」「あたま」の差を見るべし、現在は以て過去を推知すべしとせば、今日その語源を求め難き多くの抽象詞も亦言語の初期にあり、かくの如き方法によりて發達せしむるに難からざるべし、同義語及び抽象的言詞の多少は、又啻に一國語の上のみならず、以て異りたる國語が發達の優劣を比較する標準となすべきなり。

第八節 言語の優劣

談話は言語の優劣といふ事に入りぬ、吾人は曾て讀者に對して此上の説明を爲さんと約したることありき、こは言語起源説とはやはなれたることなれ共亦均く言語の本質なるが故に少く其要を述べし、異りたる種類の言語が其發達進歩の上にて優劣あり品等あるは

凡人類には一種の天性ありて、自己の耳目になる、事物を書き示して、一は備忘に備へ一は紀念となさんとす、又た種々の符號を作りて、社會に於る種々の事物の關係を示さんとすることあり、支那古代結繩の政の如きを始め、今日にても世界諸地方の未開なる人民にありては、細と結びてその結び方、樹皮をきりては其長短などにより互に意味をあらはし、一は自己の備忘とし、一は相互交通の機關とするものあり、されば支那太古の人民が、 $\odot$ 、 $\ominus$  をかきて日月を示し、 $\text{血}$ 、 $\text{月}$  をかきて山水をかたどれる如き事業は、その支那言語の起源との關係は暫く措き、少くとも、 $\text{〇}$ 、 $\text{血}$  が未だ支那言語の標識たる配文字なる前より、人民の間にあらはれしものなるべし、人智漸く進み、それら事物の實體夫自身をばなれて、名稱たる言語を形に示さんとするや、既に存せし種々の繪畫的符號を用ひて、その名稱を表さんとせしや又た自然の道理なり

また、同一の語の上時代によりて優劣あると疑ふべきところなし、同義語の多少及抽象詞の多少は此上の標識たるべし、吾人が茲にいふ言語の優劣及品等とはかゝる意味にあらず、二個の異りたる語は、其歴史的發達と時代とに關せず、根本的に其語が構造物の上にて品等に上下あり、位置に優劣ある者なりやとの論即これなり、英吉利人の語は果して根本的に「アメリカ」土人の語よりも優れるものなるか、日本人の語は果して根本的に「アイヌ」土人の語よりも秀でたるものなるか、元より時代の考をなし開化せる人の語が未開せる人の語よりも豊富にして秀逸なるや論をまたず、たゞこれらの語が其發達の時代を一にし、これらの人民が其開化を共にせしときは、なほ各自言語の上には根本的構造物の優劣ありや否やと問ふときは、たゞ「吾人自身と「アイヌ」を比し、英吉利人と亞米利加土人とを較ぶるも、吾人は此上に容易く断定を下すこと能はず、既に世界に現在する言語の種類は大畧第三篇に「明」にしたり、通常學者は「インフレクショナル」語は「アングルチネーチツ」よりも進み、「アングルチネーチツ」語は「アインレトナツク」よりも進むといふ、進むとはこれによりて人が思想を表示する上の適不適をいふなり、されどこの三語種中何れが果して最能く思想を表明し得るものなるやは大なる疑問なりとす、見よ、世界の言語中所謂「アインレトナツク」語の標識として、單獨綴若くは最之に近き語より成立する支那語は、果して其思想を表明する上にて、發達する希臘羅馬の「インフレクショナル」語族に劣りしや、今日こそ保守の狀体に沈淪すれ、その歴史上曾て一たび發達せし支那人が思想界の開化を見るもの、誰か支那人の言語を以て希臘羅馬人の言語に劣れりと爲すことをえむや、支那人は所謂最劣等なる言語を以て最優等なる開化に上れる人民なりき、いで吾人をしてなほ一段の講究をなさしめよ。

り、蓋かくの如き天性はいかなる人民にも存在し、今日地中より開墾せらるる、太古人民が土器石器等の彫刻を見ても之を示すべきなり、その繪畫形態を發達して立派なる文字の組織とまで進歩せしめたるものは、實に其國民が優等なる開化心に基くものとし、されば大凡そ世界に存在する文學は、其根原を繪畫と符號とに歸するものにして、象形文字及符號文字は文字の起源的のものなり、微妙なる音的文字、即音標文字及綴音文字が皆この象形文字及符號文字より發達變化し來れるものなる、驚くべき進歩の順序はこれより漸次讀者のしるところとならむ、

(三) 意義的の文字「イデオグラム」  
現在の世界に於て、「イデオグラム」の最發達して、崇嚴なる一國の文字となれるものは、近く支那の文字にあり、單に天地間事物の畫標たる象形文字と、事物の關係を示す符號的の文字とを骨子となして、此上に種々の發達をなし、五萬有餘

る疑問なりとす、見よ、世界の言語中所謂「アインレトナツク」語の標識として、單獨綴若くは最之に近き語より成立する支那語は、果して其思想を表明する上にて、發達する希臘羅馬の「インフレクショナル」語族に劣りしや、今日こそ保守の狀体に沈淪すれ、その歴史上曾て一たび發達せし支那人が思想界の開化を見るもの、誰か支那人の言語を以て希臘羅馬人の言語に劣れりと爲すことをえむや、支那人は所謂最劣等なる言語を以て最優等なる開化に上れる人民なりき、いで吾人をしてなほ一段の講究をなさしめよ。

の漢文字組織は發達し來れり。  
今日の支那文字に六種あり、之を六書といふ、即左の如し、

第一、象形、即その事物の繪畫の發達進歩せしものにして日月山水の如き是なり、

○日、月、木、水、木

第二、指事、即符號的の文字是なりこの數凡そ六百余あり、以上の二種は即支那文字の根本的原素にして、この兩者の上に微妙なる發達のなされたるものなり、

第三、會意、二字を合して其上に新意を寓したるものなり、日月を合して明とし、人と山とを合して仙とし、口と鳥とを合して鳴とす如きものにして、其數凡そ七百余あり、

第四、諧聲、同く二字を合したるなれ共、一字は義を示し一字は音を

本質を去ること遠きは既に述べしことあり、しかも今日の英語を以て思想を表明する上にて希臘羅馬の古語に優れりとも劣れりといふを得べきか、歐洲白人の美婦人と、亞非利加黑人の美人と、蒙古黄色人種の美人とは到底一致せんこと難し、若し語の優劣が單に其語法上形態(グラムマチカル、フォームス)の多少及變化に由りて定め得べきならば、「エスキモー」「クローキー」の未開人の言語は遙に「カメル」「イリヤット」にては「ケーザル」「キケロ」の語の上にあるといはざる可らず、簡潔敏活の點よりいはいは支那語に及ぶものありむや、はた又明晰の點よりいせば勝利は即英吉利の言語に歸すべきなり、世界言語中最流行なりと稱せらるゝ希臘語なりとも、もしこの語に倣はざる者が左の數語をよまば、いかでか笑を催さざらむ。

“io, moi moi, e e, io fo papai, ton agathon,  
chrison etc.” — Sophocles

「アッグルチネーチヅ」語族は「インフレクシヨナル」語に優れる點あり、即文章をその成職分子に分折して文典上の關係を相互明瞭に區別するの點是なり、或學者の如きは英語の歴史を論じて、もし發育自然論にして正きものならば、「インフレクシヨナル」族語は即「アッグルチネーチヅ」語族に進歩すべきものにして其反對なる可らずと、

示するものなり、例へば、「こ」に「こう」といふ名の河ありとせよ、これを文字にあらはさんとすに、河なる故其意義の上より、まづ水といふ文字をとり來り、次に「かう」といふ發音の上より、既に存する「工」といふ文字をとり來り、兩者を合して「江」となすが如し、「河」といふ文字も亦た同様にして作られたるなり、崑崙の如きも、崑崙は發音にして、山が意義なり、支那字書をひもどく時は、いかに斯くの如き文字の多きかを知るべし、所謂「片」は意を示し、「作」は音を示す者比々皆之あり、鳥獸虫魚草木等の名稱皆此方法よりあらはさるゝなり。

第五、轉注、指事に類して意義を轉じ來れるものなり、上の一字に、上部と皇帝とを示すがごとき

かくの如き高尚の理論は暫く措くも、異りたる關係に同一の形を用ひ、同一の關係に異りたる形を用ひたために思想の表現を妨るは「インフレクシヨナル」語族の通弊なり、その無性物に男女の性を分つはもと蠻人時代の余俗を保守するにすぎず、要するに希臘羅馬の言語が根底的性質は論理的に一段を吾人の國語が根底に轉するものなるを知るなり、そも「インフレクシヨナル」も本來の主義は、すべての第二次的思想は之を語尾若は語頭の變化にて示べしといふなりされどこれは畢竟事物の簡單なりし未開時代の主義たるにすぎず試にも思ふべし、人生の開化進み日常の事日常に多端となるに當り、いかにしてかよく萬般の關係を單一なる語頭語尾の上にあらはしめんや、既に羅句語にありても多く助語の發達を來し、「彼れ愛するだらう」といふを示すには單に「アマールン」(愛す)動詞を未來の形に曲げて「アマロト」といひて足り、英語の如く助動詞を用ひ「ウ井ル、フヅ」などいふとなけれ共、一段を進みて「彼れは愛さねばならぬ」(英に「マスト、ラヴ」)を示すには「フエリー、アマンゾームエ」の如く助語の助けによらざるべからず、進歩せる英國語がいかにその語尾變化の性質を失ひ、なほ日に失ひつゝあるかを見れば、所謂「インフレクシヨナル」語族の主義は到底完美の者に非るを知ら

第六 假借 發音の類したる文字をかりて示すものにして、支那の如き文字組織にてはやむなげれども、頗る不十分なり、英吉利に「イングラント」を示す類なり。

上古既に五千の文字あり、今日には五萬有余あり、支那國民の構成的能力が、いかに微妙なる階段を過ぎて、其文字の發達の完成せしかは以上の説明にて明瞭なるべし、支那古代、殷周時代碑銘の今日に残れるものを見れば、その太古文字組織の愉快なるを見ん、(碑銘文字略之)變化せし今日の字形にては、其起源の不明なるものもかくの如く比較すれば、明にその由來を認めうべし、支那文字が古文、所謂蝌蚪文に始まり、周宣王の時、太史籀篆書を作り、秦の季斯小篆を形り獄吏程邈隸書を作り、爾來今日の楷行草三体に變化し來る階級の詳細は暫く之を措き今その數個を例示すべし

む、開化の程度低き「スラヴ」「リヌアニア」等の語は今日なほ繁冗なる語尾變化の組織を保存せり、野蠻なる亞米利加土人の所謂「ポリンセチック」語族といへ共なほ一の優等なる點あり、即一段の思想を一聯に結合して示す効用これなり、之を要するに言語は其發達の時代によりて貧富の差違あるは勿論なるも、その根本的本質の上にて於ては一長一短終に完全の者ある無きこと、これ造化自然の原則なり、といふを以て最穩當の斷案となすべし、徒に古言を貴て今言を賤み、我語を重んじて他國の語を輕んせし我從來の國學者、并に歐米の一部の學者が臆説の如きは、蓋し宇宙を觀るの明無きに坐せる偏見のみ。

### 第二章 言語の起源

#### 第一節 言語創成の原動力

余りに岐路に入りぬれば再前に立ち返らむ、手眞似身振り即「ゲス テュアア」が今日の言語にも最要なる補佐をなし、全く未識の國に於る旅行者、及啞聾が用ひうる第一の言語はこれなること、又人生の歴史に言語無き時代、若くは最之に欠乏せし時代ありしならむには、其時代の重要な交通の機關は「ゲスチエアア」なるべきと、

古文	上	下	左	右	日	月
篆書	上	下	左	右	日	月
隸書	上	下	左	右	日	月
楷書	上	下	左	右	日	月
行書	上	下	左	右	日	月
草書	上	下	左	右	日	月

この位に止むべし、かくの如く支那文字の歴史をたどる上に最も注意すべきを、諸聲の一字種となす、「水」の義をとり「工」の音をとりて「江」字を作り、「可」の音をとりて「河」字を發達せしを見よ、此場合に於て「工」といひ「可」といふ文字は、其本源は兎も角も、既に明に音の標識として用ひられたるものなり、意義的數字より成立する支那文字組織といへども既に一步を音的數字中に進めたるものにして、江河崑崙等諸聲より成りたる文字は、之を「イデオグラム」といふべき

既に之をのべたり、實に人にして聲音といふものを所有すると無んば、「ゲスチエアア」は發達して吾人が言語となりしならむ、多くの言語ありし中より、聲音によりて成れる言語が獨り其發達を逞うしたりし原由は請ふ之を第一篇に問ふべし、社會はまづ形成せられし後、人生の聲音は交通の機關として種々の方法によりて發達し以て言語となり、言語一たび成りてよりは單に交通の機關たるのみならず、又た人生開化の種々の方面に向ひて至大の効用をなし、社會は之に由て鞏固となり、思想は之に由て發達したり、人の精神の靈妙なる作用が社會交通の希望によりて刺戟せられて言語てふ活動物の發達を來せしはなほ例を以て示すべし、絶壁の半服にかゝれる小石のありとせよ、將に落んとしてをちらず、年を逐ひ世を経て重力の宇宙力は其上にはたらくこと無く、人生れ人死するも依然として不動に止るべし、されど一朝小動物のこの絶壁を下り來るありて偶然にもその一脚をかの小石に觸れたらんとし、辛うじて保たれたる平均性は忽ち破れ、小石は憂として千仞の底に落下すべし、言語の原動力に於るも亦此の如し。

#### 第二節 最初に生れたる語の種類

事物が始めて聲音の特種なる者によりて表せられたる、所謂名稱を

よりも、寧ろ「ピラミッド」の内に屬すべきものにして、また「イデオグラム」と「ピラミッド」との中間を形するものなり、此種の文字を英語に「ヴァーバル・サイン」Verbal signs—w/s/s, 即一個の文字にて一種の發音を示すものにして、是より我日本の假字文字の如き、綴音文字發達し、次で音標文字の創建となりたるものあり、これらの順序及支那人民が此の如く微妙なる低度迄その文字組織を進歩せしめながら、なほ一步を進めて音標文字を構成しをざりし理由如何、これらの趣味ある問題は漸次讀者の明にする所とならむ。

人生文字の根原が、繪畫と符號とにあること既に述べたるがごとし、文字の起原は言語と異りて吾人が歴史上明に認識せらる、これ文字の有形的保守的なる性質より來る自然の結果なりとす、太古地球上開化の始めてその曙光を發達せし頃、その開化の三個の中心は、均く三個の象

えたる其原始は果して如何なる種類の名稱なりしかば議論の存する所なり、既に抽象的言語は音體的言語に後れて發達せしことを論せしが、さらば其實言語は果して根原より實體の名稱として發達せしものなりやと考ふるに、これは又た實にしからずして、その事物が性質の名稱はその事物自身の名稱に先立つ者なるを知るなり、この點に於て混同の誤解をさくべし、前に吾人が述べしところは、精神的形而上的の名稱は形而下的實物的の名稱より來れりといふことを意味し、今茲にのべんとするは、その實物の名稱は、其形態動作等の性質の名稱より來るといふことにして、前後に撞着の厭無きことをしらざるべからず、「インド、ゲルマン」語の語根を検すれば實にこの説の謬らざるをみるべく、即この語の語根は皆性質及動作を直接にあらはす名稱にして、之を根原として復雜なる今日の命名法は發達したり、この現象を稱して、言語は分解法（「アナリシス」）によりて始まり、總合法（「シンセシス」）によりて生ずるものにあらずといふ、實例はなほ遠く求めざるも今日の語法にて知るべし、吾人が一新き事物に接したるときは先づ其性質、天性、動作などの狀を精査し、さて之に似たる性質を有する既存の事物の名稱、若くは其性質夫自身の名稱を用ひて之に命名するなり、これはなほ前にハイト

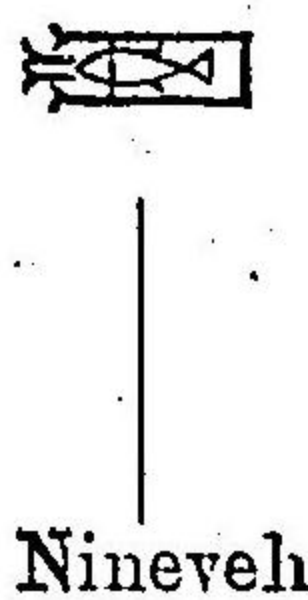
形文字を發達せしめたるを見るべし、其一は支那、其二は埃及、其三は「アッカデア」これなり、埃及の象形文字はかの有名な「ピラミッド」その他多くの碑銘の上に残りたるものにして、近世學者の研究によりて讀まるゝに至り此上に得たる新研究多し、ナポレオン遠征の時、一將官がナイル河口の「ロセッタ」地方に築城の開掘をなせしとき偶然に發見せられし、有名なる「ロセッタ・ストーン」Rosetta Stoneの研究より埃及文字及言語の智識開達せられき、今日歐羅巴の「アルハベット」の大部分がこの埃及象形文字に其起源を有すること頗る驚くべき現象なりとす、「アッカデア」人とは「セミツ」人なる「アッシリア」人の前にありし人種にして其の用ひし文字は所謂、楔形文字（「クナイフホルム」—Cuneiform—）なり、この文字も亦た碑銘に残り近世の研究によりて明となれり、この文字は希臘印度波斯の三個の古代文字に發達し來れ

ネーが「スノー」「スノーバー」の例に示したるが如し、限無き年月限無き事情の下に、言語の起源亦此の如くして發達せしものなり、語源學者が一の語を研究して其起原に溯るや、その性質夫自身を示す名稱に達せざれば、決して一段の成功を得たる者にあらずといふ、英語の船の甲板を意味する「ボード」board—なる名詞は「ブロード」(廣き)—broad—なる形容詞より來り、「ムーン」(月)—moon—の語源は計算を意味する活語に至り得べく、「ミス」(銀冶)は「スモーション」(滑平にすること)より來るといふが如し、凡そ一物を示す符號はその符號の性質によりて異なる、假に犬を以て例とせんか、之を示す符號が文字又は繪畫ならばそはまづ、低き四足獸にして人家の傍に横るものなるべし、その符號が「グスマチエア」ならば、或は噛むこと或は尾をふる事などすべて其動作の模倣なるべく、はた又その符號を聲音に求めばそはまづ「ワンワン」なるべし、言語發達の初期、其未だ豊富ならざるや、性質動作を示す同一の語が或は名詞として或は形容詞として、副詞として動詞として種々に轉用せられたるや、疑無るべし。

第三節 感嘆詞起源説

かくの如く種々の方面より言語の本質を論じたる後、さて言語起源

り、「クナイフォーム」文字の最著き一例を示さむ。



有名なる「ニ、ヴェ」府を示すなり、家の符號の中に魚の形あり、これによりて古代開化の中心たりし「ニ、ヴェ」の市民も其始はたゞ劣等なる漁夫にすぎざりしものなるをしるなりとす。

以上三種の外、古代文字の發達せしものなほ二あり、一は「メキシコ」文字にして一は「ロッチテ」文字なり、「ロッチテ」Hittite—とすは、小亞細亞の地に於て其文字は既に綴音字に近きたりといふこれら五種は即古代文字なるが、其中「イデオグラム」の古跡を存して、其儘に照くべき發達をなしなるものは吾人の支那文字なりとす。

(四) 音的文字、「ホノグラム」の發達(一)

説の本部に入るべし、言語の神傳説既に既述にして取るに足らず、言語は人が無意識に其先天的所有物なる聲音の上に發達せしめたる方法に就きて、今日吾人の考へ得るに大約二個の點あり、その一を「インターマセクシヨンの理論」といひ—Interjectional Theory—一を「オノマトポエアの主義」といふ—Onomatopoeic Principle—第一「インターマセクシヨンの論より入るべし」インターマセクシヨンは文法上、人が喜悲其他激しき感動によりて自然に發する叫喚的聲音にして文法上の構成に關らず、所謂譯して間投詞又は感動詞といふ是なり、談話的言語未だ發達せずして人生が多少鳥獸に近かりし時代にあたり、感動の自然表章なる音が發達せしこと疑無るべきなれど、こはもと感動を自然に示す聲音にして單に「ア」といひ「オー」といひ「キヤ」といひ「アハ」といふが如きものなれば、其談話的言語を形する上に及ぼせし勢力は甚大ならざりしなるべし、たゞ同一なる感情は人の精神を刺戟する作用亦相均しきが故に、同一の感情に對しては同一社會の人は殊に多少同一なる感動詞を用ひ、從てそが交通機關の一部をたすけ、又た全く動物的情操上性質を脱してよりは談話的言語中に入り其起源の一部を形りたるものなり、「インダゲルマン」語の「アジマ」—agh—とよべる語根は「アッ

今日の社會に發達する音的文字が、その始め「イデオグラム」文字より發達せしものなることは、既に疑ふべからざる事實となれり、就中綴音文字は支那文字より變換し來りて我國に發達して假字文字となり、音標文字(「ホノチック」)は、埃及「アッシリア」等の「イデオグラム」より發達して、歐洲及亞細亞大部の文字となれり。まづ綴音文字より始むべし、既に述べたるが如く支那文字の諧聲は既に一步を音標文字に近づけり、我國片假字及平假字の作者は暫く拙き、支那文字の簡單なる者を取り、其片、冠り、又は作りなどをとりて五十音文字を作り出せる手段はこれ最簡單なり、

片假名

- 阿 a 伊 i 宇 u 江 e 於 o
- 加 ka 喜 ki 久 ku 氣 ke 已 ko
- 散 氏 須 世 曾
- 多 知 通 天 止
- 奈 仁 奴 彌 乃

文字の起源及發達

ハ」といへる間投詞の發達せしものなりといふ、これにつき奇殆なる現象は完全なる意義を有する語が時として單一なる感動詞に下ることあるにて、近世英吉利の間投詞の多くは如此發達より來り「アラス」[ロー]—alas! lo!—の如き皆完全なる語にかへりうべしとす。

第四節 自然聲起源説

言語の形成に於て最大なる勢力を有するものは即第二の「オノマトポエア」の主義なるべし、この主義は言語の起源が自然聲の模倣より來るといふことなり、「犬」を「ワン／＼」といひ、「猫」を「ニャーニャー」といひ、「牛」を「モー／＼」といひ、「馬」を「ロ／＼」といふは、兒童が完全なる談話的言語を習ふに先立ちてまづ事物を呼ぶの名稱なり、民生が言語を形する始にありてはまた如此方法の主として行はれしや疑なかるべし、唯に生物の聲音を模倣するのみならず、小川の「チヨロ／＼」と流れたる、竹林の「サヤ／＼」と音する、瀑布の「ドン／＼」と落ちる、石を「ガラリ」と投る、數限なき自然聲の模倣は言語の上にあらはるべし、殊に我國語の副詞には自然聲のまゝに存するもの多し、こは後世の新奇發達なるが故なり、「サヤ／＼」「チヨロ／＼」「ガラリ」其他皆是なり、口語の上には此の如

言語の分布

三五三五



半 比 不 反 保  
 末 尾 牟 妙 毛  
 也 以 遊 衣 與  
 頁 利 流 禮 呂  
 和 韋 宇 回 乎

これを作るに多くは漢音をとりたれ共、中には和訓をとりたるもあり、阿以字於をainoに用へるは音なり、江をeに用ひたるは國訓なるが如し、止、乃の二者をtoに用へるも亦訓なり、これらの原字につきては中に多少附會せるが如くも見へ、又た説の一ならざるもあれど、巨細は茲に論ずるに及ばず、大体上の如きものなり、平假字に至りては漢字の草体をとりなほ一層略したるものにして、其形體は日本諸文典の上に見ゆればこゝにはあげず。

これにも亦音訓を交へ用ひたり、國語五十音の組織が「サンスクリット」語の組織に基きて作られたるものなること今日の定論なるが、其上に假字文字の發達をな

き副詞常用に用ひられ其益多きを加ふるが如し、「ドシ〜」といふは始め水などが盛に落下する音響より來りてすべて事物の敏捷なるを示し「セラ〜」は始め絹布などが相接する音響より來りて、すべて事物の圓滑にはこべることをあらはす、そも〜今日の言語にて其起源を自然聲に求め得べきやうの者は極めて少きなれ共、その然るを以て言語の起源が主として自然聲にありといふ吾人の所説を破ることも能はず、苟も少く言語の變遷といふ者がいかに驚くべきかを知る人は、無限の長年月間に於て多の語が殆悉く其自然聲の起源の面影を失ひたるを疑ふことあらざるべし、自然聲の模倣が言語多分の起源たるは既に早く我國語學者の認識せし處にして、即ち本居宣長が門弟なる鈴木明が雅言音聲考は其代表なり、この書は文化十三年の版にして、言語起源の大要を四類とし其本源を今日の所謂「オノマトポエア」の主義に歸着せんとせしものなり、その用例の上には誤謬も少なからず見ゆれ共當時にありて此の如き説を爲せるは卓見といふべし、今其中多少事實に近きものを例として引用すべし

1. 鳥獸虫の音より來る者  
 かり(雁)、かけ(鶏)、ふくろあ、こぼろぎ。  
 あぶ(蛇)は「ぶん〜」より來りしならむ、雀の「す〜」

せしことは立派なる進歩なり、何故に吾人は支那文字より此の如く容易く綴音文字を創建しえたるか、何故に支那文字はかくまで至大なる發達をなしながら一歩を進めざるしか、この問題に答ふるどころあらんとす。

既に本論に於て讀者は支那言語の性質を學びたるなるべし、この語の詳細の性質は今日なほ研究の中にありといへ共、大體の上に於て「モノシラヒツク」なる語に屬するものなり、即各單語はみな單一の綴音即母音一個を有するのみにして、殆ど語根の形に止れり、支那語のすべてが果して單綴なるや否やは今日未だ考究の中にありといへ共、大體に於てその然るは疑なかるべし、かくの如き簡潔なる組織にてはいかに多くの發音をなすも、到底豊富なる事物の名稱に於て伴ふこと能ざるが故に、支那語には多くの同音語ありて其數限なくなれり、而してこの同音異義語の區別をなさんために、四聲即

2. 人の聲をうつせる者  
 吹くの「ふ」、吸フの「す」、「すゐる」綴の「すゐ」、咬ムの「か」吐クの「は」、「うめく」の「う」、「よなむ」の「な」、「くち」の「く」、「さやく」の「さ」、「産ム」の「う」、「鼻かむ」の「か」
3. 萬物の聲をうつせる言  
 「ちやく」「さやく」「ちま」「まゆ」「まゆ」の「まゆ」
4. 萬づの形、有様、意、仕業をうつせる言  
 (この點は今茲に要なき故略す)

なほ英吉利語の一例をとるべし、その雄鶏の義なる「コック」——Cook——をみよ、この語は「シヤンチンレー」——Chanticleer——の「ンク、ア、ゾイドルゾー」といふ自然聲模倣の音響より來れりといふ、而してこの一語生じてより左の如く種々多き語は生じたり、  
 cock-a-doodle-doo !, cock, —coquette, cockade, the cock of agun, to cock one's eye, to cock the head on one

「アクセント」は發達し來れり、これらのことは本論に於て詳しくのべたり、さて支那文字が象形指事等の方法によりてあらはるゝや、其各文字は各綴音の符號なりき、而して其綴音には無数の異りたる音と四聲の種々複雑なる變化を加へたりければ、或有限なる文字にて一定の綴音の數を示し、これに四聲を加へてすべての語の符號とせんは、支那人にとりては寧ろ頗る繁冗なる事業にして、殊に困難迷錯を生ずべき基なりしや明なり、その文字が言語などに於て一步を「ホノグラム」に近けたるにも關らず、綴音文字を發達するあたはず、永く「イデオグラム」の舊体に止まりしは、其言語の性質上自然にしてやむべからざる結果なりき、之に反して我國語は多綴語にして、一語の上にも多くの綴音あり、語の大部分は音の變化によりて意義を示し、聲即「アクセント」の變化もは古來少きにはあらざりしも、そが國民の「コンメシアス」の上に

side, a cocked hat, and so on.

支那の語の、猫(ミヤウ)、蟬(セム)、齋々(セム)、香、憂鬱の如きはみなこの主義の見ゆるものなり、諸國の異りたる言語に全く相似たるものあるはその模倣せる自然聲の残れる語に多し、我「オクツコ」(鶏)と「コック」又は「カック」(吐鵝)との如き是なり、家畜の猫が始めて「メヒア」より埃及に入りしは第十一若しくは十二朝の頃に於て埃及人は之を「ミヤウ」とよべり、支那の猫と同じ、「パンア」島東北岸の土人は犬を「ボ、ウ、ウ」といひ、鐵を「デン、デン」といふとぞ、我國の兒童は食事を「ウマ、ウマ」といふ、或は「マン、マン」といふ、西洋の小兒は「ナム、ナム」といふとぞ、今日の美味を「ウマ」といふも如此自然聲より發達せしものか、今日言語の起源を説明する説の重要なものはこの二種とす、其他種々の説あれ共或は哲學的に或は臆斷的に論ぜるものにして今日多數の學者は之を採用せず、今日最用ひらるゝは言語本質實驗の上に建設せられたるこの二説となす、しかれ共吾人が實驗の上に於て、この二々の主義によりずべての言語の起源が説明せらるべき者と誤解すべからず、誠に言語の最初にかゝる方法の下に發達せしものならんども、その一たび人生の間に發達してより茲に幾萬年、あらゆる進歩と變化との行はれたる今日に

あらはるゝほど多きものにはあらざりしなり、於是我國國民の多少語學的智識あるものが、支那文字に接するや、その文字をかりて我國語上の各綴音を示すといふこといと容易く行はれ始め、次で梵語の音韻の組織をしるに及び、これに倣ひて國音の大畧を組織し、その音に簡單なる支那文字をあてはめかくして五十音圖上の文字は容易に成立したるものなり。限り無き同音の語をいかにして支那人は文字の上に區別せしかといふに、諧聲は即此方法なり、既に「こち」といふに「工」の字あり、他の「こう」の語はいかにすべきといふにあたり、その性質上より水を加へて「江」字を作る、「可」の字あり、他の「か」は如何といふに於て、河を加り呵を作り詞を作るが如し、この一方「イデオグラム」と一方「ホノグラム」を用ひたるものなるに既にいへるが如く、河の片傍し又は水は「イデオグラム」として用ひられ、「可」は既に音の標識たれば「ホノ

あたり、かゝる理論により直接に起源に溯りうべき者は、無限の語中萬が一にも足らざるべし、言語の起源に關し今日吾人は唯自己の經驗を基として如此薄弱なる説明を試みるに過ぎざるなり。

第五節 文章の發達

單語の起源が或は「オノマトポエア」なるど、或は「インターシエクショナル」なるを問はず、次に講究すべきは文章の起源なり、そも言語の實態は文章にあり、單語は唯事物の符號にして之を結合して一個の思想を表章するものは文章なるが故に、言語の起源を求めむには單語を以て満足すべからず、進で文章の講究に入らざるべからず、先づ考ふべきは言語は文章によりて始まりたるか、單語によりて始まりたるかの點にあり、既に言語は社會の個人が其思想を表明して之を他人に了解せしめんがために生ぜざる機關なれば、其始めて起りしは其思想自身の表現にして、云更ふれば論理學の所謂命題ならざる可らず、一の命題は即一の文章なり、言語の最初はまづ文章に起りしものならざるべからず、たゞ其言語創始時代の文章は今日の如く單語の相集りて相互に關聯構成せるものにあらず、實にたゞ單一の單語なりしならむ、即人生の社會に始めて發生せし單語は即夫自身一の文章なりしといふ「獅子!」といへば「獅子來る」

グラム」として用ひたるものかゝる一字一語を示す「ホングラム」を「ヴァーバル、サイン」といふ、この復合文字の方法は、支那文字に限らず、埃及の「ヒエログリフイック」及「アッシリア」の「クナイフオルム」中にも用ひられたるものにして、その「イデオグラム」の方を、支那にては片傍といひ、埃及「アッシリア」にては定字「デターミナーチヴ」(Determinative)といふ、極めて日常の用となるもののみより統計するに、支那文字には、片傍即「デターミナーチヴ」の數二百餘、「ホングラム」一千四百餘、埃及にては、P三百乃至四百、D百以内、「アッシリア」にては、P五百二十餘、D三十位ありといふ、これらのものが互に相綜合して微妙なる「イデオグラム」を構成せり、音標文字、綴音文字、意義的の優劣の論の如きは暫く措き吾人は直に「ホングラム」中「ホチチック」文字が發達せし状況に立入るべし、たゞ一の學者の言に

といふことを意味し、「蜂」をいひて「蜂に刺されたり」といふことをあらばすが如くなりしならむ、當時未だ品詞の區別なく、一の單語は未だ名詞動詞形容詞など種々の方面に發達せず、殊に副詞接續詞前辭詞など文章上第二次的の助語の如は全其影を生せず、僅に散在せる不完全の名稱を結合ししかにして當時の人は其意志を表明せしや、この時最主要なる機關たりしものは吾人が屢どきたりし「ゲスチチャー」にして、之によりて文法的關係を示せしや疑なし、「ウン」といひて首を前に傾ければ應諾の義「ウン、」といひて首を左右にふれば否定の義を示すが如し、單一なる單語によりて「ゲスチチャー」を加へて意味を示すは今日の言語にも屢あらはるゝところなり、なほ今日言語の狀体を見て其由を知べし、英語の「エムド」(ならびに及び)「ヒューズ」(……の故に)の兩個の語は今日にては接續詞としてたゞ符號的に用ひらるゝものにすぎざれ共その歴史を溯れば共に十分の意義を有したる語にして、「エムド」はなほ進みゆくこと「ヒューズ」は「……の原因によりて」といへる意味なるを知る、すべて文法上の形を示す助語はかくの如くにして發達せしものにして其始源に溯れば十分の意義ある言語なるをしるべし、兎も角も言語の歴史を溯れば、吾人が曾て、記憶せる單語を並べ「ゲスチチャー」

記すべきものあり、いへらく、日本人の才能と創建的天性とを以てして、なほ終に綴音文字中に止り、こゝに安坐して一步を音標文字中に進めざるを見れば、「アルハベチカル、システム」の成立が、いかに困難にして又たいかに貴重なる事業なりしかをしるべしと、され共此點に於ては、一國民才能の如何のみにあらず、自然事情の如何も亦た頗る重要な位置を有するものなるを識らざるべからず。

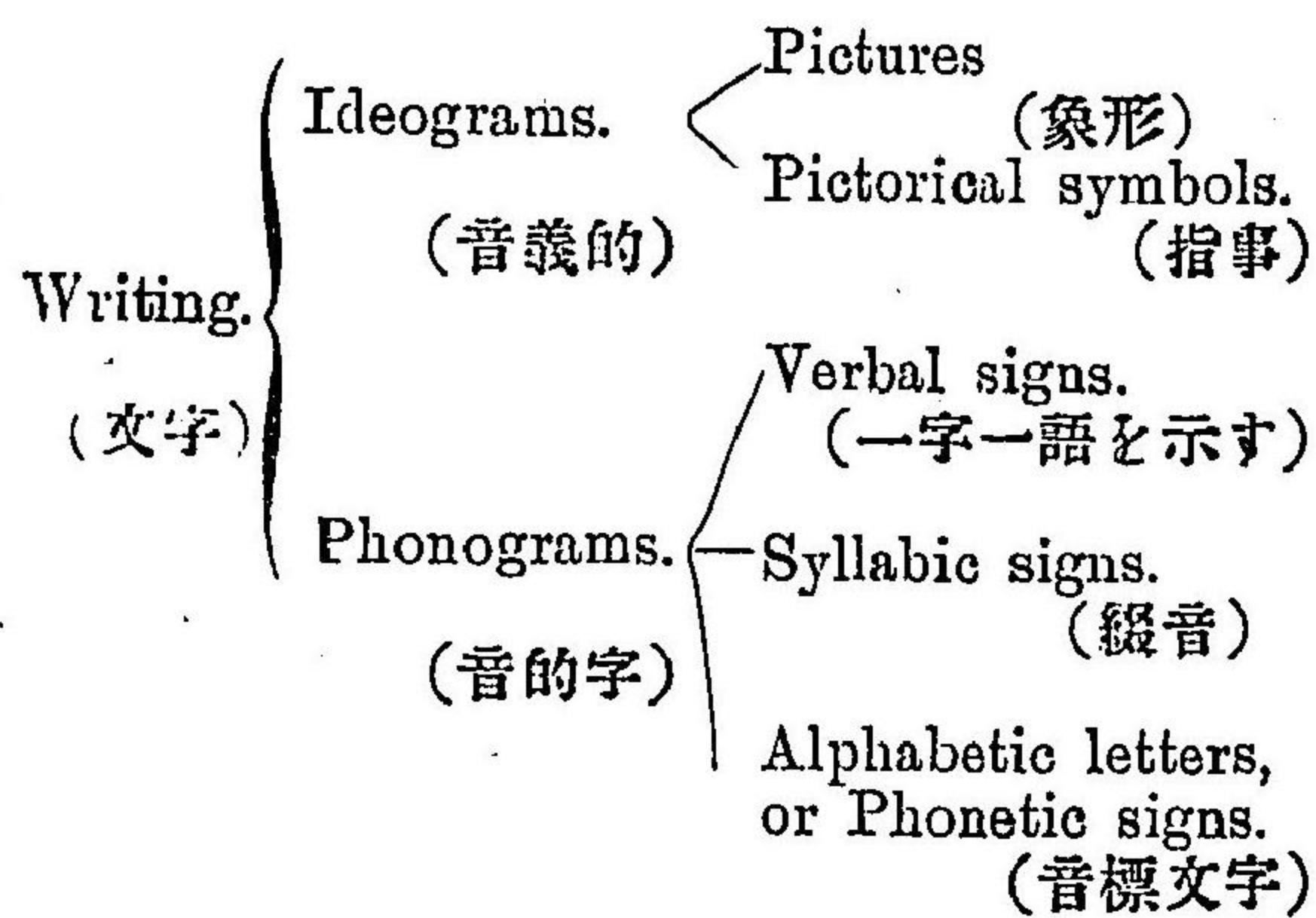
(五) 音的の發達 (二)

近世言語學者の驚くべき精勉は、弘大なる「ヒラミッド」建設の前幾世紀の太古より、此世界にあはれたるべき埃及の象形文字より、今日の開化せる歐羅巴「アルハベチカル」の殆ど各文字が發達し來りし歴史は、明瞭に研究せられたりき、既に説明したりしが如く、文字は左の五種二類に區分せらる。

の力をかりて思想を交換せし時代あるをしるなり。

言語の起源、文章と單語との關係につきて學者の創建せる多くの高尚なる學說に立入らば吾人が目的にあらず、言語には生命といふものあり、生ありまた死ある狀況よりとき始めて、順次其重要なる性質に入り、終に茲にそが人生の世界に發達せし起源を求め終りて、吾人が讀者に見へんことも既に終に近きぬ、三百餘頁の記載を讀み終りたる讀者は、この不可思議なる吾人が恩惠者の性質を會得し、これを目的として發達せる高尚なる學問が梗概を窺ひえしなるべし、思ふに讀者はその讀過の際愉快なる學問の光に酔ひたる事も少なからざらむ、はた又た説明の不十分と困難とに倦怠せし時もありぬべし、その發達まだ新くし斯の學問はこれが大要を平身に説明せんとするにあたり、説明者に多くの妨害と不満足とを與へき、然れども進歩の未だ十分ならざると共に斯學の前途は益々多量なり、吾人は他日なほ筆硯を新にして再讀者と見ゆるの日あらむをたのしみとせんとす。

通俗言語學 終



て十分なることゝなるなり、國民が音韻上の考へ進歩して子音母音の大体の區別明となるに及んで、再其各綴音を分拆し、言語の基礎たる音自身を示す文字となす、茲に於て今日世界に存する文字中最高等なる音的字母は成るなり。

音標文字たる「アルハベット」中に混ざる「ヴァーベル、サイン」及び象形文字あり、例へば羅馬數字の如きは多くの手の形をうつせるものなり、I II IIIは指の形なり、IVは親指のみをばなして、他の指を集めたるなり、「X」は「W」の器にして兩手を示す、これらは象形なり、XIXの如きは指事(ピクトリカル、サイン)にまで進め

音的字母若くは「アルハベチカル、ライチング」なるものは、正に此五個の文字の段階をへて進み來れるものなり、宇宙の事物を單に其繪畫若くは其符にて示し、之に音を示して文字とせし象形及指事の二者は正に文字の根源にして「イデオグラム」の境に屬す、これが一步を進むときは其一字が音的の境界に入ることなほ支那文字に於る諧聲の如くなる、江河崑崙の如く、構成の上には一部の象形の意味を交ゆといへ共、文字の本質(「エッセンス」)の上に於ては純然たる音的字母にして、「ユー」たり「カ」たるをあらはすなり、この文字の状態を所謂「ヴァーベルサイン」といひ、音的字母にしてしかも一字一語を示すものなり、これが或事情の下に、たとへば日本人が假字を創造せしが如き發達をなす、即その「ヴァーベルサイン」の中より一部をとりて、自國の語に存するだけ、若くは之に近きだけの綴音を示し、これを以て自國のすべての語をあらはす、綴音文字の發達は、文字の製作最重要なる進歩にして、これによりて無限事物とその名稱とを示すべき符號の数が、吾人の用ひやすきだけの少數に

るものなり、「十」は「ET」なる羅何文字の約めるものなりといへどいかいにや、「ET」は並びにの義の接續詞なり、さて今日歐羅巴の「アルハベット」の各文字が殆ど皆古代埃及の象形文字より來れることの證明せらるること既にいへり、例へば「M」といふ文字は、古代埃及の「ムラク」(鳥の義)なる語の文字より來れり、始めは實際鳥の形の畫にて「ムラク」の音を示す、次でこれが鳥といふ義をはなれて單に「ムラク」の音を示すこととなり、これに「ホングラム」の中に入る、第三にこれが初綴の「ム」のみを示すこととなりて綴音文字となり、最後に「M」の一音を示すこととなりて「ホチチク」の文字となる、之に併ひ鳥の原形は漸略されて「M」となれり、Mなる文字に於て左右の嘴は、鳥の兩耳の形の殘れるものなりといふ、埃及の象形文字は獨り羅馬文字の母たるみならず希臘、「サンスクリット」、「センド」、「ヘンリウ」、「アラビヤ」、蒙古、滿州、西藏、緬甸、「マヤツア」等の文字亦皆これより發達せしものなりといふ。

埃及の文字は世界上最古き文字なり「マリエット」の説に従へば、世界文書之最古きもの紀元前四十七世紀の頃「セント」王のたてたる樓の上にありといふ、兎角紀元前六十世紀の頃既に象形文字は、發達せる古代文書の文字なりしこと疑ふべからず、「アッカヂヤ」の楔形文字は紀元前二十七世紀の頃迄(少くも)其起源を求めうべく、支那文字と殆ど起源の時代を均し、埃及の意義的の文字の組織は支那文字の組織と大同小異にして次の如し、

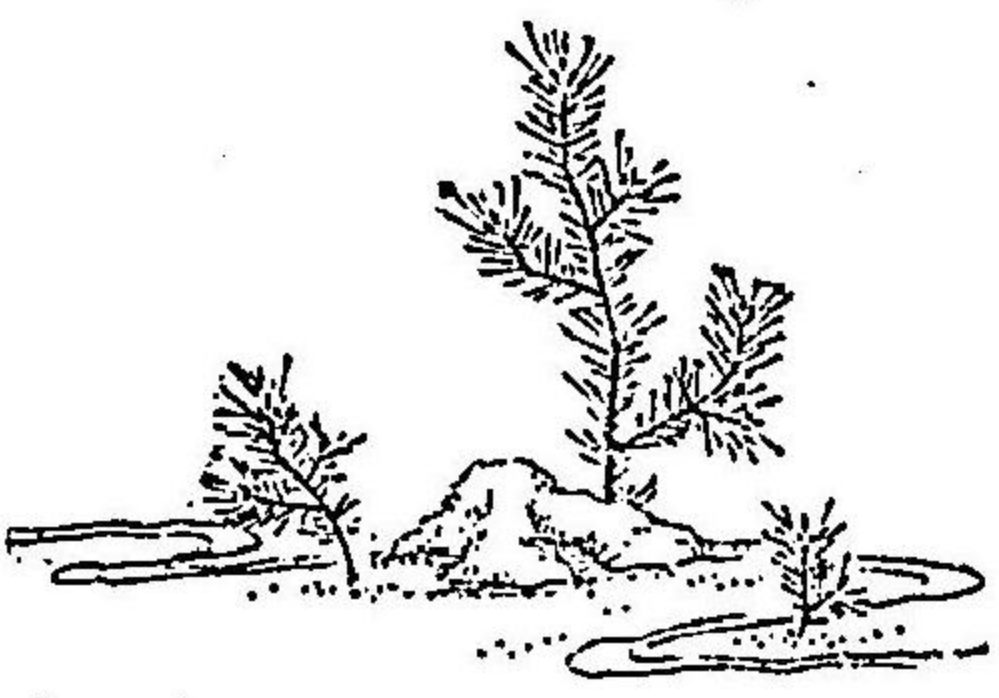
1. 繪畫的即象形文字、○を以て太陽を示すこと支那文字と均し、
2. 抽象的思想をあらはすに用ふる符號、水に向て起る浪を以て渦といふことを示し、二個の武器を對せしめて戰鬪を示すが如し、
3. 楔形文字に於て見らるゝが如く、「ヴァーベル、ホングラム」に用ふることを、一字一語の音を示す、支那の階意の場合にて工可の如きもの、
4. 「ヴァーベル、サイン」より發達せる綴音的符號
5. これらの綴音符號を結合して、符合的の「ホングラム」を形ること、

同一の埃及の「イデオクグラフィック」といふも既に以上の如き種の分子の存在を見る、さてこの組織より「アルハベット」組織の發達せしことを論ぜざるべからず、世界の文字は皆繪畫に始まり、もし何れの文字も同一に發達しうべきならば、支那文字といへども亦便益なる音標文字を發達せしめえし理なり、その、音標文字は兎角十分の綴音の文字をも發達せしめざるは、主として支那言語の性質に基けり、埃及文字が獨り其發達を恣にし、終に世界文明國の文字の起源となりしは又た其理由なるべからず、既に埃及の「イデオクラム」時代にあたりて、吾人は早く其中に「アルハベット」的性質の符號が存在するを見る、これ最注目すべき現象なり、即最古象形文字の時代に埃及人は既に音標的の文字の考へを有したるものなり、「パピロニア」人「アシリア」人「メアス」人さては我日本人は何れも綴音の文字を發達せしめたり、綴音文字の中には既に母音の獨立を認むるをうれども、なほ一層了解に困難なる子音の考へは終にこれら人民の達することとならざりき、綴音をその音標的分子に分解して、聲音の根原的標識を求むることは無意識に埃及人のなし始めたる所なりき埃及の子音の標識文字は之を綴音とみむよりも、寧ろ音標と見るべし、何となれば其多數は、發音に際して自由他の母音の何れにてもを加へて發せしむればなり、紀元前四千年乃至四千七百年の間に支配せし「セント」王のとき、音標的の文字の既に用ひらるゝを見るとき、その音標文字は又た普通の順序により發達せしものにして、單一の繪畫、指事的符號、「ヴァーベル、サイン」、綴音、音標、この時代をへたるなり。

埃及人が音標文字發達の功績を荷ふ原因は、亦その語の特質に基くや、明なり、埃及語の母音は他の母音よりも極めて不定なる性質を有す、例へば英語の、「アバウト」の「a」、「アサート」の「e」、「バード」の「i」、「オヴン」の「o」、「バット」の「u」、「ダブル」の「u」の如く、極めて變化し易き性質を有せり——about, assert, bird, oven, but, double——埃及語は常に母音を零してかゝれ、前後の外中間の母音は語勢を強むるやうのときのみかゝる、例へば「セス」(帶)といふ音の符號に、「イ」の符號を加ふれば「シイ」を意味す、「セス」に「イ」を加へて「si」となるべき義にあらざれ共、始めの「セス」の母音「e」が發音されずなりたるなり、即此場合に「セス」なる音の附號は、單に一子音「s」の符號として用らるゝなり、かくの如き母音の性質は、其文字の組織に大なる影響を與へたるなり、殆ど四百個の「ヴァーベル、ホノグラム」は皆其頭字を示しうるなれ共、實際の用には其數限られ始め五十五あり、後又二十五個に減せらる、史家「アルタイク」の傳ふるところ亦實に此の如し、埃及人はかくの如く音標文字を發達せしめつゝなほ之にのみ依るの勇氣無く、綴音及意義的の文字を共用せり、大膽にも其上に一步を進み、全然「アルハベット」ならざるすべての組織を排斥して、殆ど完全なる音標文字の組織を成効するは埃及人の能力の外にありき、この大事業は實に「フェニシヤ」人なる「セミツ」民族の成せし所なりき。

「カルデア」の楔形文字の事を少く述べし、この文字は「アッカデア」人の碑銘の上に傳れり、「アッカデア」人は此地太古の民族にして其言語は「ウラル、アルタイク」の古語なりと稱せらる、此の人民の用ひし楔形文字の例は前に示せり、これは近年「ペロソ」ニ「ニヴェ」ムグ「ヘイル」セ「ケンケレー」等の古代市の遺跡より發見せられ、燒かざる粘土に簡密に彫刻されたるものなり、凡そ文字の發達なるものは、そが一人種の手より、他の人種若くは他の國語族の手に移りゆくによりて生ずることは一般の通則なるが如し、例へば支那文字は日本民族の手に入て、完全なる綴音文字を發達す、埃及の文字も其創造人の手をはなれて「セミツ」人の手中に入り、又た出で、「アリア」人民の中に入り、希臘波斯印度等に分布移植せるによりて、終に完全なる發達をせたり、「クナイフォルム」文字に於るも亦然り、その「アッカデア」人の手中にあるとき、既に「ホノグラム」として用ひられたることあるが如く、次でこの後に來れる「セミツ」人種即「アシリア」「パピロシ」人の手に移り、こゝに於てか大なる綴音文字を形成せり、暫く楔形文字發達の狀を見るべし、楔形文字の創作者たる「アッカデア」人は支那人とは異りて多綴の言語を話したる故に、その文字の組織も亦支那人と同一なるべからず、數限なき語に一々符號を與へんことは到底出來得可らずとして、之を救うは唯綴音の一法あるのみなれど、これは單綴の支那音に於るが如く容易に生じうべきものにはあらず、或人は、此人種は「アクロロワイ」の法即語の頭綴音を其文字にて示し以て流用したりといふ、されど一般の説には「アッカデア」の言語は多綴より單綴に破壊せられたるもの多し、これによりて綴音組織を我せりといふ、例へば、大空、星宿、又は神の義なる「アナ」といふ語は語

尾<sup>ヲ</sup>を失ひ「アン」として用ひられたるが如し、その組織が「アッシリア」人の中に入るや、その文字は「ホノケラム」と「イデオグラム」との兩方に用ひられて、新舊用法の衝突を生じ、大混雜をなせり、於此「アッシリア」人は支那の階聲文字の如く、音標文字に「アターミチーチツ、イデオグラム」を加ふることを始めたりといふ。畢竟文字の歴史につき余り深く入りんは吾人の目的にあらざ、要するに文字の發達の歴史も亦た言語の歴史と均く無意識に行はれたるものにして、其上に「エツォリニーション」の原理のはたらくことはなほ活言語に於るど異なること無し。



文字の起源及發達終

明治三十二年三月七日印刷  
 明治三十三年三月十日發行

定價金貳拾五錢

著者 宮田修

發行者 大橋新太郎

印刷者 多田三彌

印刷所 惠愛堂

東京市麹町區西幸町一丁目五番地

版權所有

發兌元

東京日本橋區  
 本町三丁目

博文館

石川辰之助君編

# 通俗英語案内

全一冊洋裝  
正價金廿五錢  
郵税金八錢

外國語の獨修果して出來得べき乎。校に入らず、師に就かず、獨學之を修めんに、獨修用語學教授書に據るの外なし、獨修用語學教授書として近來種々の名稱の下に發刊せられたるもの、又發刊せられたるもの、實に其數を知らず。而して一として所期の目的を達したるもの無く、又之を達する能ざるなり。凡そ語學教授は言語の主腦たる動詞を以て系統を立て、一步一段秩序整然、己知より順次未知に進み入らざる可らず。一課に授くる所只一事に限らざるべからず。第一課には「それは犬である」と教へ、第二課には「子供と犬を見よ、子供と犬は走る」と授くる如きは、動詞を以て系統を立つるにあらず、己知より未知に進むにあらず、宜しく「御覽なさい」と一歩一段秩序整然として、文法の説明を示す、和英比較研究たるべきなり。今日の英語講義なるものが、實際何の効用も無き實に宜なり。世の眞に英語を獨修せんとする志望者は老若男女の別なく、先づ本書を一讀して外國語の獨習は、果して出來得べきや否やを判せよ。本書は、英語發音より始め、之を讀み了らば、政治經濟等普通の學術に關する英文書を容易く讀解し得る様立案したれば、中學生には無二の参考書たるや疑ひ無し。

文學士エル、ビー、チャモレー先生校閱  
島田豊、島田弟丸兩君共著 (総クローズ金字入)

# 英和應用會話指針

全一冊洋裝  
正價金三拾錢  
郵税金四錢

本書は從來世に行はるゝ所の、會話篇と其撰を異にし、交際にまれ、商業にまれ、外國人と從來交通する者の便を圖り、部門を分ちて日用單語を擧げ、實地に應用すべき談話數十項を掲げて、彼我對話の模範を示せるものなり。殊に英和辭典家島田突疑君其令弟丸君と共に著作せられ、チャモレー先生之を校訂し慶應義塾大學部教授ロイド先生本書の正確にして有益なることを讚稱せられ、其自ら譯する所の小説會話を附録として卷末に掲ぐることを甘諾せられたれば、如何に本書が他書に超越して價值あるや、此一事を以ても知るべきなり。内地雜居の時機近き今日苟も彼語に通せんと思ふ者、本書を熟讀せば大に得る所あるべし。

博言博士イーストローキ先生  
突疑 島田 豊先生 共纂

# 學生用英和字典

全壹冊總皮  
正價金壹圓五拾錢  
郵税金拾貳錢

英和字典書ノ世ニ行ハル、モノ甚多ク、而シテ其書モ亦少カラズ、然レドモ大抵五六年乃至八九年以テ前ノ有名ナル、イーストローキ、島田ノ二先生ニ纂譯ヲ依賴シ、近年英國ヨリ舶載セル、ウエブスター氏袖珍字典ニ從事シ印刷漸ク成ル、今ヤ本書ノ發行ヲ大方ニ察告スルニ當リ、元長ノ飾言ヲ須ヒズ、左ニ獨特點ヲ擧グ、如何ニ本書ガ英語ヲ修ムル學生諸君ハ勿論公務ニ、通商ニ、交際ニ、苟モ外人ト相往來スル大方ノ諸彦ニ必要ナルカヲ證ス。

- 本書ハ實用ヲ主トスレバ無用ノ冗語ヲ省クモ原書ニ舉ケル所ノ新語ハ悉ク之ヲ譯出シアラバ近年舶載ノ新刊書ヲ閱スルニ便益ナクアルヲ詳シトセズ例ヘバ目今諸學夜ニテ用フル所ノ教科書中ニハ往々從前ノ字書ニ掲ゲザル新語アリ即チSwodgrass 唐書浦(ロンググマンス讀本) Colpitts 軍艦ノ治療室(チルトン傳)ノ如キハ其ノ一例ナリ
- 下セリ例ヘバ Oceanry 占領スル Streetbar (槍架遊樂場) Volley 一發射擊 舊譯多統齊發) 等ノ如キ一語ニミテ一ハニ餘ニ互リ
- 動機ハ原書ノ意ヲ詳ニ譯スルニ最モ必要ナレバ品ニテ之ヲ撰取セリ故ニ Take, Turn 等ノ如キ一語ニミテ一ハニ餘ニ互リ
- 助理化ナシテ各專門ニハ海軍專門家ニ就テ其シタル語ヲ下セリ
- 本書ノ挿圖ハ悉クウエブスター氏ノ萬國大字典中ヨリ縮小シタルモノナレバ他ノ字書ニナキ新圖頗ル多シ
- 本書ノ字書ノ附録トシテ必要ナルモノ、外新ニウエブスター氏ノ袖珍字典ノ附録中ヨリ萬國地名表ヲ譯出セリ本表ニハ國名面積人口首府帝王名ヲ掲ケ是レ勿論他ノ字書ニナキ所ナリ
- 近來西洋音樂ノ大ニ流行スルヲ以テ本書ハ新ニ音樂用ノ略語ト其記號ヲ掲ゲタリ

茲ニ最モ大方ノ諸君ニ特報スベキハ各國貨幣ノ換算ナリ從來他店ニテ發行スル所ノ字書ハ何レモ廿年前ニ發行セル柴田小安兩氏ノ纂譯ニ據グルモノト同一ナレバ英貨一ポンドヲ我四圓臺トヒリ然レモ今ヤ外國貨幣ハ次第ニ騰貴シテ一ポンドハ我九圓臺ニ上レリ故ニ本書ハ昨三十年大藏省ノ報告ニ係ル各國貨幣換算ニ據リ彼我ノ價格ヲ示セリ以上擧グル所ノ條目ヲ以テスルモ本書ガ他ノ字書ニ優ルコト固ヨリ論ヲ俟タズ請フ大方ノ諸君陸續申込アラシムコトヲ

文學士エル、ビー、チャモレー先生校閱  
島田豊、島田弟丸兩君共著

### 實用英和作文

全壹冊

總クローズ金字入 正價金參拾錢 稅郵四錢  
内地雜居目睫の間に迫り、外國人との交通是より漸く頻繁ならんとす。江湖の人士宜しく之が準備を爲すべし。本館茲に觀るあり、島田奚疑君と其弟弟丸君とに囑して、實用英和作文を發行す。本書の要は日常贈答の普通文は勿論、商用書狀、諸契約書廣告文の模範を示し、尙ほ和文英譯の資助と爲さんため、古人の傑作數十則を抄録し、和譯を附し作文の指針と爲し、作文用の名詞及動詞をイロハ分けにして掲げ、附録には、商業用諸書式を始め、從前他書になき、送り狀及び稅關に出すべき諸願届の書式を擧げ、以て作文便益上に遺憾なからんことを期す。請ふ御購求あらんことを。

益田孝君序文、矢野次郎君序文  
高等商業學校講師アロツクホ井ス氏編  
高等商業學校教授祖山鍾三君編纂  
三井物産會社大田黒重五郎君編纂

### 英和商業作文辭彙

全壹冊上製  
正價一圓卅錢  
郵稅拾錢

商業作文に關する著書にして、世に見ゆるもの其類少なからず、到底各種の取引に固有なる用語を一一指摘するに、容易の事にあらざる、去れば實に不充分なからざるに、重要な取引に用うる字句を知らしめんが爲め、此道に通ずる者の曉とに遺憾とする所なり。本書は即ち此缺點を補はんが爲め商業に要する字句を集め、之れをイロハ順に綴りたる者なれば、其作文に便なるは深く述ぶるの要なし、殊に編者祖山氏は、現に高等商業學校に商業學を教授し、大田黒氏は外國貿易に従事せらる、事なれば、其編纂宜きを、且つ高等商業學校講師アロツクホ井ス氏校閱の勞を取られたれば、其誤なきは本館の疑はざる所なり。今や條約改正將に大成せんとし、彼我實際に一大變動の時機來らんとす。本書を待て大に得る所あるべし。

### 支那南部會話

全壹冊洋裝  
正價貳拾錢  
郵稅四錢

中江篤介君序文  
法學士石尾一郎助君校閱

在法科大學 福田富治君著

### 初學佛蘭西文典

全壹冊洋裝  
正價七拾五錢  
郵稅八錢

本書はラリオン、フルリ、兩氏の最近著、佛蘭西文法の體裁に倣ひ、主として佛語邦語を以て簡易に著述せるものにして、可成理論の發音譯解法を詳述し、第一編に於ては、第二編に於ては、第三編に於ては、各章毎に十數の問答を附したる、本書の特色とする所なり。今や將に此語學の極要ならんとするの時期、目睫に急迫せり、學者此際一書を參考して、多少の裨益無しとせんや。

文學士 畔柳都太郎君著

### 邦語英文典

全壹冊洋裝  
正價三拾五錢  
郵稅八錢

上製(總クローズ金字入)

文學士 畔柳都太郎君著

### 英文典語句慣用法

全壹冊上製  
正價六拾錢  
郵稅六錢

### 實用英和商業會話

全壹冊  
正價二十錢  
郵稅四錢

濫江保君註釋

### ロングマンズ讀本註釋

第一讀本註釋	正價三拾錢	郵稅六錢
第二讀本註釋	正價卅五錢	郵稅六錢
第三讀本註釋	近刊	郵稅六錢
第一讀本	正價廿五錢	郵稅六錢
第二讀本	正價卅五錢	郵稅六錢
第三讀本	正價四拾錢	郵稅八錢
第一讀本	正價廿四錢	郵稅四錢
第二讀本	正價卅四錢	郵稅六錢
第三讀本	正價三十錢	郵稅六錢

館文博

東京日本橋區  
本町三丁目

發兌元



# 帝國百科全書

每月二回發行  
全一冊三冊  
紙一冊三冊  
以上洋裝並製

●(並製)一冊金三十五錢○六冊前金二圓○十二冊前金三圓八  
十錢○廿五冊前金七圓五錢○五十冊前金拾四圓五錢○全  
部百冊前金二拾八圓●郵稅一冊八錢一冊五錢一冊三錢○全  
●(上製)一冊金五錢○五冊前金二拾八圓●郵稅一冊八錢一冊五錢一冊三錢○全  
●(下製)一冊金三錢○五冊前金一拾四圓●郵稅一冊四錢一冊二錢一冊一錢○全  
●(並製)一冊金三錢○五冊前金一拾四圓●郵稅一冊四錢一冊二錢一冊一錢○全

専門學術の普及を計り社會智識の指導に供せんが爲に  
弘く知名の學士に請ひ其專攻の學術を編述せらるゝ者  
にして日進百科の學を通じて遺漏なからしむ。

(本書既刊目次)

- 第一編 世界文明史... 文學士 高山林次郎君著
- 第二編 日本新地理... 地理學士 佐藤 傳藏君著
- 第三編 東洋倫理學史... 井上文學博士 木村 誠太郎君著
- 第四編 肥前哲學... 文學士 木下 義道君著
- 第五編 宗教哲學... 文學士 楠崎 正治君著
- 第六編 新撰算術... 農學士 高木 貞治君著
- 第七編 農產製造學... 農學士 楠崎 正治君著
- 第八編 萬國新地理... 地理學士 佐藤 傳藏君著
- 第九編 支那文學史... 文學士 征川 種郎君著

- 第十編 農學論... 農學士 恩田 鐵綱君著
- 第十一編 修辭學... 文學士 武島 又次郎君著
- 第十二編 論理學... 文學士 高山林次郎君著
- 第十三編 栽培論... 農學士 橫井 時敬君著
- 第十四編 植物營養論... 農學士 稻垣 乙丙君著
- 第十五編 英語養論... 文學士 柳田 大郎君著
- 第十六編 法律學... 法學士 熊谷 直太郎君著
- 第十七編 新撰代數學... 理學士 高木 貞治君著
- 第十八編 新撰幾何學... 理學士 佐藤 傳藏君著
- 第十九編 新撰林義學... 理學士 林 鶴一君著
- 第二十編 森民法... 法學士 奧田 貞衛君著
- 第二十一編 國民法... 法學士 上田 豐君著
- 第二十二編 國際私法... 法學士 中村 太郎君著
- 第二十三編 國際公法... 法學士 北條元篤君 熊谷直太郎君 共譯
- 第二十四編 倫理學... 文學士 征川 種郎君著
- 第二十五編 日本歷史... 文學士 木寺柳次郎君著

第廿六編以下百編迄は來三十三年迄に出版すべし

# 通俗百科全書

每月一回發行  
全一冊五拾冊  
紙一冊三拾冊  
廿頁以上洋裝

定價 一冊金貳拾五錢○六冊前金壹圓四拾錢○十二冊前金貳圓七拾  
一錢○廿五冊前金五圓九拾錢○郵稅一冊八錢

百般の學術を講明し智識の開拓を計らんが爲に簡易  
明暢を主として諸家各得意の科目の編述せらるゝも  
の最も實用有益にして懇到完全なる講義録なり。

(既刊書目)

- 第一編 通俗日本歷史... 足立 栗園君編
- 第二編 通俗世界歷史... 長谷川 誠也君編
- 第三編 通俗明治歷史... 坪谷 善四郎君編
- 第四編 通俗德川十五代史... 岸上 操君編
- 第五編 通俗文學汎論... 奥村 信太郎君編
- 第六編 通俗倫理學... 足立 栗園君編
- 第七編 通俗法學汎論... 在法科大學 桐生 政次君著
- 第八編 通俗商業簿記... 高等商業學校卒業 高橋 邦次郎君著
- 第九編 通俗政治汎論... 鳥谷 部 鏡太郎君編
- 第十編 通俗英語案內... 石川 辰之助君著
- 第十一編 通俗言語學... 宮田 修君著

(近刊書目)

- 第十二編 通俗銀行簿記... 馬詰 次男君著
- 第十三編 通俗會社簿記... 高橋 邦次郎君著
- 第十四編 通俗經濟汎論... 春山 實次郎君著
- 第十五編 以下出版書目は左の如し

- 通俗日本地理
- 通俗日本地誌
- 通俗算術
- 通俗博物學
- 通俗佛語
- 通俗代數
- 通俗支那歷史
- 通俗世界年代表
- 通俗心算
- 通俗授業
- 通俗手工
- 通俗植物學
- 通俗地質學
- 通俗支那歷史
- 通俗米國歷史
- 通俗支那歷史
- 通俗日本歷史
- 通俗世界歷史
- 通俗佛國史
- 通俗逸語案內
- 通俗理化
- 通俗世界地理
- 通俗世界地誌
- 通俗佛國史
- 通俗日本歷史
- 通俗世界歷史
- 通俗佛國史
- 通俗逸語案內
- 通俗學校管理學
- 通俗動物學
- 通俗礦物學
- 通俗天何學
- 通俗幾何學
- 通俗英國史
- 通俗衛生學
- 通俗國語學

# 日用百科全書

每月一回發行  
全部五拾冊  
紙數一冊二百  
五十頁餘洋裝

定價 一冊金貳拾錢 六冊前金壹圓拾錢 十二冊前金二圓五拾錢  
三十冊前金五圓三拾錢 全部五十冊前金八圓五拾錢 郵

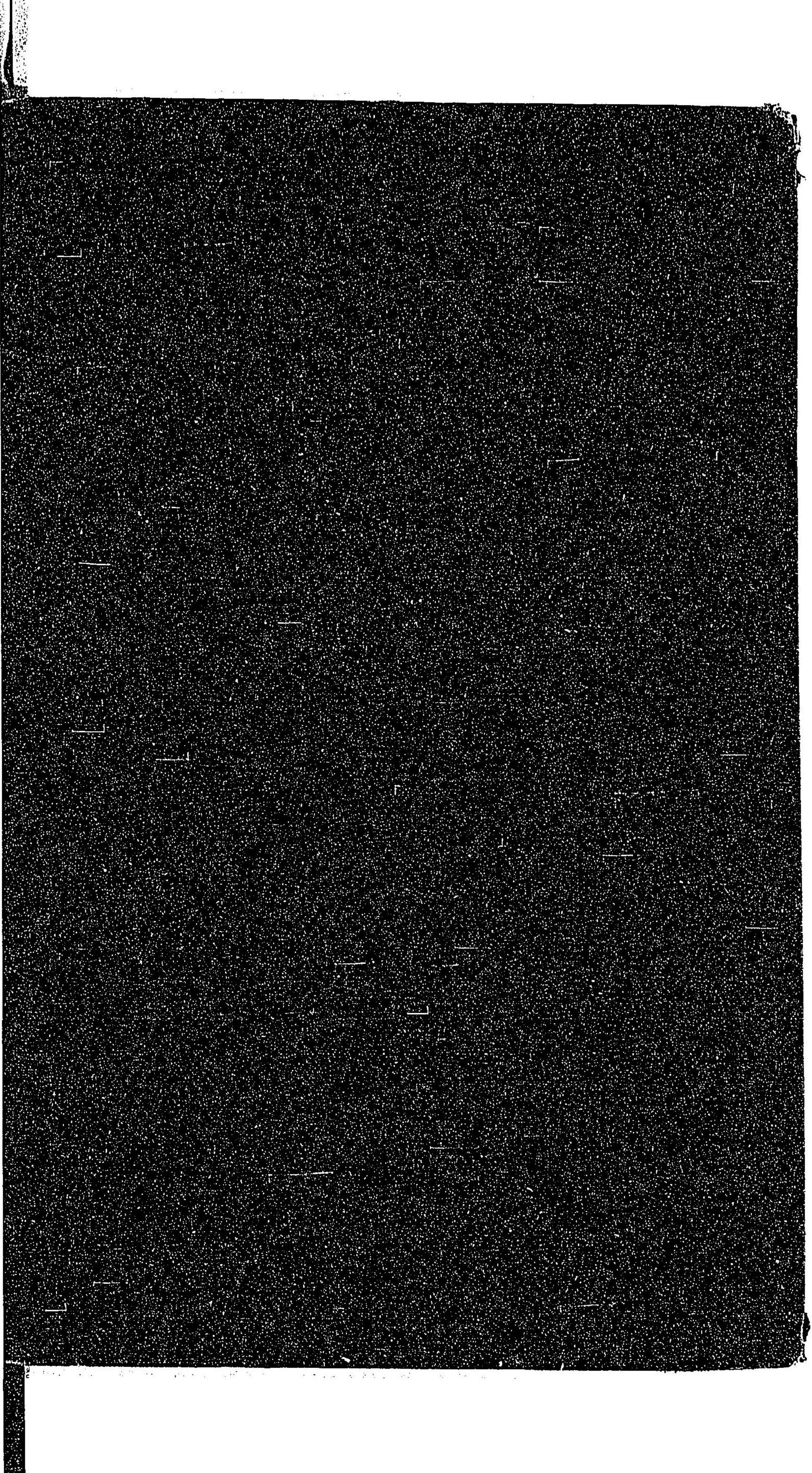
家庭日用必須にして知了せざるべからざる藝術事項を網羅し以て齊家處世の指針に充てんとする者家長主婦たる者は勿論而人も座右に缺く可らざる寶典也

(既刊書目)

第一編	和洋禮式	大橋 乙羽君編
第二編	茶の湯と生花	博文館編輯局編
第三編	實用料理	藤本 藤隆君編
第四編	家政案	岸上 操君編
第五編	琴曲獨稽	博文館編輯局編
第六編	裁縫編	吉田 調子君編
第七編	住居編	博文館編輯局編
第八編	勤學處	桐生 政次君編
第九編	育兒衛生	西田 敬止君編
第十編	俳諧獨	三宅 青野君編
第十一編	俗書翰	樋口一葉女史編
第十二編	通洋料	佐々木 孝君編
第十三編	西洋料理	三宅 青野君編
第十四編	旅行案	三宅 青野君編

第十五編	祝辭演說	博文館編輯局編
第十六編	聲曲	博文館編輯局編
第十七編	詩文	柳井 綱壽君編
第十八編	作業	岸上 操君編
第十九編	園藝	平田純一那君編
第二十編	作業	森 一兵君編
第二十一編	化粧品製造	宮澤 春文君編
第二十二編	書法	松永 工學士編
第二十三編	秘書術	三宅 青野君編
第二十四編	日常行為法	博文館編輯局編
第二十五編	致富法	丸尾 昌雄君編
第二十六編	致書	森 一兵君編
第二十七編	工書	野口 勝一君編
第二十八編	農業	松永 工學士編
第二十九編	內家遊戯	横井農學士校岡 茂君編
第三十編	商家人書翰	茅原 茂君編
第三十一編	海軍人書翰	上村 左川君編
第三十二編	農工書翰	森 一兵君編
第三十三編	農工書翰	三宅 青野君編
第三十四編	農工書翰	坪谷善四郎君編
第三十五編	農工書翰	上村 左川君編
第三十六編	農工書翰	佐藤 通君編

78
5





076638-000-0

78-5

通俗言語学

宮田 修/著

M32.3

DAA-0049

